

---

# セブンス女郎Dチーム

頭かゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セブンス女郎Dチーム

### 【Nコード】

N1893Q

### 【作者名】

頭かゆ

### 【あらすじ】

セブンスドラゴン二次創作小説

それ以上でも以下でもないからあらすじとかもはや書くことはありませんの。

## 歌姫少女

少女は船に乗り、アイゼンからカザンへ。

乗り換える前の船よりかは幾分かルシエの乗客が減ったような気がする。

いや、確実に減っていた。

一等客専用のデッキにいるのはアイゼンの貴族がほとんどで、彼らは場違いな少女を賤しい者とし、奇異の目で睨み付けた。

旅立ちから二十六回目の夕日が西の水平線へと沈もうとしている。

水面は柑橘果汁のように鮮やかな色に染まっていた。

「お嬢ちゃん、カザンへは何をしに？」

ふと、老翁から尋ねられる。

恐らくはこれもまたアイゼンの貴族だろう。

立派な顎髭を蓄え、長く伸びた白い髪を結わいていた。

「下賤の者」にわざわざ話しかけるような物好きもいるものか。

少女はそう思いながら当たり障りの無い返答をした。

「『世界を見てこい』と、上より奏されましたの」

老翁は一言「そうか」と答えると、少女の隣へと並び沈み行く夕日を眺める。

デッキが静まり、周囲からの視線を感じた。

この老翁が余程の名士だったのか、それとも単に、貴族がルシエと関わりうとしているからなのか。

そんな事を考えながら、西の水平線を見つめ、しばらく少女は波音を聴いていた。

潮風が少女の二つ結びの綺麗な髪と、胴体がバネの奇妙なうさぎの

ぬいぐるみの耳を揺らす。

「歌姫修行かね？」

老翁が静まり返ったデッキの沈黙を破る。  
後ろでヒソヒソと貴族の耳打ちが聞こえた。

「ご名答ですわ。よくご存知で」

「なに、今となってはマレアイアも世に知れたものだろう」

「そうですわね……」

周囲がざわつく。

特に女性が反応した。

確かに、かつて秘境と呼ばれたマレアイアも、近年は観光客数の伸びが著しい。

特にアイゼンの富裕層の間では密かなブームが起こっているのか、拳ってやって来るのだ。

「カザンへ行くと言うことは、活気溢れる繁華街を見て回るのかな？ それとも陸路でミロスへ？」

「どちらでもですわ。いずれはアイゼンやネバンプレスにも行くつもりですの」

「……そうか。ネバンは南国の生まれには寒さが厳しいだろう。斯く言う私もあの寒さには参ったものだ」

少女は少し驚いた。

まさか、アイゼン貴族の身分がネバンへと赴くだなんて思いもしない。

野獣の群れに『貴族』と書かれた肉を掲げて突っ込むようなものだ。

「あら、物好きなお方ですこと。その御身分であの国へ？」

「ハハ、身分は隠したよ。我が国にルシエを忌み嫌う輩が居るように、ネバンにもアイゼン人を目の敵にする者が多い」

睨んでいた視線が一気に消えるのを少女は感じた。

そして改めて確信する。

貴族は体裁ばかりの馬鹿がほとんどなのだ。

「お嬢ちゃん、旅には苦勞が付き物だ。しかしそれはきっとお嬢ちゃんにとつていい経験になるだろう。歌姫になるにしても、ならぬいにしてもだ」

「……ええ。でも歌姫になんてなるつもりは、毛頭ありませんわ」

「ハハ、そうか。旅を終えた後はマレアシアに帰るつもりかね？」

「いいえ、旅は終えませんわ」

「ハントマンにでもなる気かね？」

「当たらずとも遠からず、ですわね」

「……なかなか、面白い事を言うのではないか」

日が沈む。

光の筋が細くなって、やがて消えた。

もう一度日が射し込む頃には、カザンに到着しているだろう。

老翁は胸元の懐中時計を一瞥する。

「そろそろ夕食の時間のようだ、私は失礼するよ」

「ええ、日も沈みましたしね」

杖をしっかりと握り、彼は少女の目を見て最後に一つ訊いた。

「そつだ、名前を覚えてくれないか？ 私には君が何か大きな事を成し遂げるように思えるのだよ」

少女は目を逸らし、今はもう水平線に隠れてしまったはずの日を見つめて答える。

「モメノ。姓は、ありませんわ」

「……そうか。楽しい時間をありがとう」

「ええ、こちらこそ」

老翁は一礼すると、船内へと戻った。

気付けば他の乗客たちも既に戻っているようで、薄暗くなり始めたデッキにはほとんど人はいない。

紺と橙の混じる空の東からは月が昇り、モメノと名乗った少女を照らし始めていた。

## 乙女騎士

「はぁ……」

始業時間からの喧騒がようやく収まり、落ち着きを取り戻してきたクエストオフィスでケイトは大きなため息を吐いた。どうにもこうにも、自分がやりたいと思える仕事が見つからないのである。

「まあ、駆け出しはそんなもんだよ。あまり気を重くしなくてもいいって」

書士官のポーアがコーヒールを一杯出しながら、負のオーラを出しっぱなしのケイトをなだめる。

「とは言っても、せつかく騎士号とつたのに……これじゃあ私どうにもこうにも、はぁ……」

ケイトはナイトだ。

それだと聞こえはいいが、実際の所は落ちこぼれで、ミロスの騎士学校をお情けで卒業したようなものだ。

いや、実際は卒業どころか進級すら難しかっただろう。

だが、何もケイトに全く才能がなかった訳ではない。

座学や儀礼などではそれなりに優秀な成績を誇っていた。

それでもケイトが落ちこぼれたのは、やはりというかなんというか、周囲との性差があったためだ。

騎士なんてものは基本的に武芸に長けた健康な男子が志すものであり、女子が騎士学校の敷地内に入るなど考えられない。

それでもケイトは十二歳の時に志願してしまったものだ。

本人もダメ元、両親も無駄だろうと笑っていたが、奇跡的にもミロスの騎士学校の募集要項には性別による制限が明記されていなかったのだ。

とは言っても、女子の志願者など存在しないことが当たり前すぎて明記されていなかったのだが。

そのため学校は大混乱、校内だけでなくミロス国内を巻き込んで議論が行われた。

学校側がハッキリとダメならばダメだと断ってくれば良かったものの、ミロスの平等を重んじる国民性のお陰で、斯々然々、六年後に卒業して、もちろんのこと仕官もできず、仕方なくハントマンを名乗り、まあ今腐っているのである。

「まあまあ、とりあえずここに来ればコーヒーぐらいは出してあげるから」

「私はこの常連客になりたい訳じゃ無いですよ……」

そう言ってテーブルに突っ伏す。

コーヒーに手を付ける様子は無い。

「個人でダメなら、ギルドに参加すればいいじゃないか」

「入れてくれるギルドがあればとくにそうしてますけどね、はあ

……」

「何も戦闘だけがハントマンの仕事じゃないよ。家事手伝いみたいなものもあるから、君に向いているのも見つかるはずさ」

「それじゃあ本格的に学校で過ごした六年間と騎士号が意味無いじゃないですか……」

ケイトがどうしても騎士になりたかった理由。

それは少女なら誰もが一度は憧れる「お姫さまになりたい」と言う夢まで遡る。

普通ならば成長するにつれてそんな非現実的な夢は諦めるのが相場だが、ケイトは乙女病を拗らせてしまったために、いくつになっても夢を持ち続けてしまった。

そしてある時彼女は気付く、「お姫さまにはなれないのだ」と。突き付けられた現実には辛いものだったが、それでも彼女は乗り越えた。

いや、乗り越えたと言うよりは飛び越えたの方が的確かもしれない。騎士になれば「お姫さま」の近くにいられる。

私は「お姫さま」にはなれないけれど、傍に仕えることはできるのだ。

そんな思いで、彼女は現実を明後日の方向に飛び越えた。

「私、夢をそろそろ諦めるべきですかね……？」

「僕、その質問を否定してあげるべきかな……？」

「……大丈夫です、言いたいことはわかりますから」

はあ、とため息をもう一つ、ケイトはゆっくりと立ち上がる。

このままじゃあいられない。

「どこか行くの？ コーヒーも飲まずに」

「とりあえず日銭は稼がないと……繁華街の方でできること探してみます」

「うん、応援してる」

「……どうも」

どうにもこうにも、動かなければならない。

カザンは活気溢れる街だ。

夢がどうであれ、仕事なら探せばいくらでもある。

そろそろ現実を見つめる時期なのだ。

ケイトは景気付けに頬を叩き、クエストオフィスを後にした。

## ギルドオフィスにて

「あらいらっしやい」

モメノが訪れたギルドオフィスには、なにやら香水のような匂いが仄かにしていた。

匂いの元はあの女だ、あの無駄に胸を強調するようなデザインの服を着ている受付の年増だ。

それ以外にはムサイ男くらいしかいないのだから、当然と言えば当然なのだが。

「可愛いぬいぐるみね。お嬢ちゃん、ハントマンさんにお手伝いを頼みたいなら道を挟んで隣の建物よ？」

ああ、そうか。

この女　ネームプレートにはエランとある　の目には「小さなお客さん」としか映っていないのだろう。

モメノは凜とした声で言う。

「ギルドを作りたいのだけど、登録料は如何程なのかしら？」

横からムサイ男達の笑い声が聞こえた。

そりゃあ、そうだろう。

初等学校を卒業したか、そこいらの少女が「ギルドを作りたい」と抜かす。

どれ程微笑ましい光景か、どれ程滑稽な光景か。

そんなこと、わかつているのだ。

エランだか言う年増の方を見ると、やはり彼女は彼女でどうやってこの「小さなお客さん」の相手をしようか少し困った顔をしている。

「……そつか。お嬢ちゃん、お名前は？」

「モメノ。姓は無いわ」

「モメノちゃんね、うん」

オフィス内がより一層笑顔で溢れる。

様々な視線がベタベタとまとわり付き、不快だった。

少し考えながら、年増は続けた。

「……モメノちゃん、ギルドを作るのにお金はあまり必要ないけれど、年齢制限があるの。十五歳以上って決まってるのよ。今、いくつかな？」

「十一ね……」

ギルドオフィス内が爆笑の渦に包まれる。

老いも若きも、皆腹を抱えて笑いだした。

ボルテージは最高潮だ。

よく見れば香水乳年増も笑っている。

モメノは下衆どもを叩いてしまいたい気持ちだったが、叩いたところで何の特にもならないし、鞭は宿に置いてきたのだった。

「……それなら、」

モメノが口を開くとまた静まり返る。

「それなら、ギルドに参加するのに年齢制限はあるのかしら？」

二度目の爆笑。

ああ、馬鹿どもが鬱陶しい。

「ウフフ……ごめんなさいね。そうねえ、年齢制限は無いけれど、

モメノちゃんを入れてくれるギルドがあるかどうか……お姉さんは多分無いと思うわ」

その年でお姉さんは無理があるだろう。

言いたかったが、これ以上馬鹿どもを刺激するのも癪に障るし、堪えた。

「……そう、ならいいわ」

やっと「小さなお客さん」が諦めてくれたと思ったのが、エランは安堵の表情だ。

「ところで……」

「なあに？」

「ギルドとは関係なく人材を求める場合は、その掲示板を使用できないのかしら？」

受付の隣には大きなコルクボードがあり、いくつかギルドの人員募集の貼り紙が掲げてあった。

「うーん、そこはギルド名義じゃないと貼れないから……お手伝いが欲しいなら、クエストオフィスでお願いしてね」

「そうね、そうするわ」

ここにおいても相手をしてもらえないことがわかった。

モメノは一礼して出口へ回れ右、最後にこう残した。

「ありがとう、おばさん」

出てすぐにドアを閉めたので様子はわからないが、少なくとも本日

二回目の爆笑を馬鹿どもが巻き起こしていることは確かだった。

## 必殺・騎士の陰気

「あれ、ケイトお帰り」

「ただいまです……」

昼下がり。

数時間前に気合いを入れて飛び出したクエストオフィスにケイトは戻っていた。

「どうしたんだい？　こんな早くに戻ってきて」

「ああ、いえ、少し……」

へまをしてしまった。

意気揚々と空元気で仕事を探していたケイトは、途中道で男に声をかけられた。

「どうやら道がわからないらしくだったので、懇切丁寧に教えていたら

……

「……スられました、財布」

「あらら……」

そうして警備隊に被害届を出したあと、どうにもこうにも腐ってしまい、こうして戻ってきたのだった。

「コーヒーは？」

「いえ、結構です……」

「そう……」

「どうしようも無いじゃないか。」

もうこの時間帯だとだいたい人手は足りてくる。  
もう今日は無理だ。  
諦めるしかない。

「で、いくら盗られたの？」

「1Gと、11S54C……」

「残りは？」

「はぁ……半分くらい宿に預けてるんですが、それっぽっちのお金で何になると……」

カザンは大きな街だ。

大きな街だけに、それなりに「色々な事」が起こる。  
物価も低くはない。

そんな「色々な事」が、齢十八のケイトの身に降りかかり、心身、そして金銭面でも徐々に疲弊させていった。

正直、限界だった。

「あー私は、私は……」

突っ伏して地団駄を踏む。

自身の無力さやら、スられた悔しさやら、果ては入学を許可したミロスの国全体への憤りまで、様々な負の感情が頭の中で渦巻いている。

もうダメだ、私はどうにもならない。

ケイトには自分の発する陰気がこの建物中に立ち込めていくような気がした。

これを操れば人くらいは簡単に殺せそうな気がする。  
いや、きつと世界征服だって可能だろう。

それもアリかな。

ははははは。

「ははは、ははははは……あー……あ……あ……あー……」  
「まあまあ、万策尽きたって訳じゃないでしょ？」

ボーアがなんとかかなだめるが、悪の巨大組織ばりの陰気を放出するケイトにはなかなか通用しない。

「その策が出て来ないんですよ。こんなところで駄弁つても無駄だとはわかってますけど……」

「動かなきゃ出てこないよ。とりあえずまずは依頼ポストの中身取ってくれる？」

「はいはいはい……」

気だるそうに体を起こし、机の上に乗っている箱を開けた。

この箱はハントマンにクエストを依頼するための箱で、今日も何通か投函されている。

他にも依頼は来るのだが、このポストを介さないものは基本的に特定のギルドへの依頼である。

最近では、王者の剣とか、

ラッキーズとか、

肉球アタッカーズとか、

王者の剣とか、

王者の剣とか、

王者の剣とか、

王者の剣とか、

王者の剣とか、

まあ、人気の集中でそんな感じなのだ。

「今日はどれくらい来たんですかー……？」

「六人くらい入れたかな？ 小さい女の子もいたよ。後はギルド指

名が四件だった」

「はー……」

確かに依頼状は六通あった。

半分の三通をポーアに渡し、もう半分に目を通す。

土木工事、熊狩り、引越し手伝い（男性限定）。

どれもケイトには絶対にこなせない依頼だ。

土木工事は体力的に無理だし、熊狩りなんてそんな戦闘力は無い。

もつとも、普通の騎士ならこなせるだろうけど。

ケイトも一度だけ依頼をこなしたことはあるが、内容は迷子犬の捜索だった。

「……どう？」

「いやー……ははは、ないですね」

「そう……なにか困ったらエランさんに助けてもらえば？」

「あー……」

エランはギルド管理部長で、ケイトも少し、いやかなりお世話になった事がある。

この街に来る前から、ケイトはそれなりに有名人だった。

女性騎士がハントマンになるとのことで、関係者の間では噂されていたのだ。

もちろん、学校の成績も込みで。

そんなこんなで、ケイトを参加させてくれるギルドなど存在せず、それを見兼ねたエランが掛け合ってくれたのだが、その結果は今現在だ。

「……もう、エランさんに迷惑かけられませんよ」

「ハハハ、でもあの人世話焼くの好きだから、あんまり気にし……」

依頼状を眺めていたボーアの手が止まる。

「どうしたんです？」

「……これ、受けてみれば？」

ボーアから手渡された依頼状は、ボディガード募集のものだった。依頼人は女性のようで、男性不可と書いてある。面接によって決めるらしい。

ボディガードの他に庶務雑務など任されるようだが、月給は30Gとある。

「30G……!？」

「依頼というか、雇用に近いね。こういうの、本来なら違う部署なんだけどなあ……」

月に30Gあれば、不自由なく暮らしていける。

それにボディガードの仕事だ。

学んできたことをフルに活かせる。

だが……

「……でも、まさか、私なんか、そんな」

「当たってみなきゃわからないよ？ 騎士学校に志願するときもそうだったでしょ？」

「でも……」

こんな良い仕事、まさか私が採用されるとは思えない。

それに30Gだなんて、三分の一でちょうどいいくらいだ。

「まあまあ、受けてみなよ。何もしないでエランさんのお世話にな

るより、何かしてからエランさんのお世話になる方が気持ちが悪く  
しょ?」

「そうやってボーアさんも落ちる事前提で言ってるじゃないですか

……」

「まあまあ」

陰気の弱くなったケイトをなだめながら、ボーアは依頼状を強く握  
らせた。

「行つてきなよ、六剣亭の301号室だから」

「……わかりました、ダメ元、行つてきます」

これから面接なのだ。

陰気を放出してはいけない。

朝よりも強く頬を叩き、ケイトは再びクエストオフィスを後にした。

「お姫さま」と「騎士」

六剣亭はカザンでも名の知れた旅亭である。

ハントマンや商人からの人気があり、値段は少々お高く付くが、旅人向けのサービスがかなり充実している。

そして何より、地下の酒場で饗されるエビフライが、「事件が起こるほど美味しい」と言われているからだ。

「あらケイトちゃん、どうしたの？」

六剣亭名物の女将さんがケイトを迎える。

彼女もケイトの噂をしていた一人だった。

様子を見るに、今日も繁盛しているようだ。

「ああ、えと、301号室の方から依頼が……」

「301号室は……ああ、女の子ね」

「女の子？」

「そう。お嬢様って感じだったわ。あんなに広い部屋一人で泊まって、どうする気かしらね」

少し悪い予感がした。

もしかして、これは世間知らずのお嬢様が冷やかしかなにかで依頼を出したのではないか？

なんだか色々違う気もするし、どうなのだろうか。

「名前は……モメノさんね。ルシエだったわよ」

「……そうですか、ありがとうございます」

軽く会釈して、階段へ向かう。

「頑張りなさいよ！そろそろなんとかしなきゃいけないんだから！」  
「ああ、はい。頑張ります」

なんとかなればいいのだが。

階段を二階分上がり、すぐ手前の部屋が301号室である。  
六剣亭一の大部屋で、ベッドは四つあるとかなんとか。  
ケイトは泊まったことが無いのでわからないが。

「……」

ダメ元でも、目の前にするとさすがに緊張する。

採用されるかどうかではなく いや、まず受からないだろう

このドアの先にいる依頼人が気になるのだ。

依頼人は「お姫さま」ではないが、それでも「お嬢さま」と聞いている。

そうになると、一度お目にかかりたいのがケイトの性だ。

「……ふう」

深呼吸を一つ。

「お嬢さま」の前で粗相はしたくない。

気分を落ち着かせて、ノックを

「募集を見たのかしら？」

しよつとした瞬間に、部屋の中から凜とした声が聞こえた。  
まあ、ズビズビる。

「いえ！？あ、あああの、そうです！はい！？」

早速粗相を起こしてしまった。

「何を慌てているの。鍵は開いてるわ。中へ来なさい」  
「はい！」

言われるがままにドアを開き、失礼いたします、と一礼。

見るとそこには、四つ並んだベッドのうち一番奥の窓に近い一つに、小さなルシエの女の子がこちらに背を向けて横になって本を読みながらくつろいでいた。

フリルやレースの付いた「お姫さま」な服を着て、傍らには少し奇妙なウサギのぬいぐるみがこちらを向いて座っている。

長い緑暗色の髪は綺麗に二つ結びにされ、ルシエの女性独特の耳は整った形をしている。

素敵だ。

ケイトには「お嬢さま」よりも「お姫さま」との印象が強く映った。いや、ケイトの中では「お姫さま」だ。

何か、夢でも見ている気分だ。

色々ありすぎて現実逃避度合いがMAXに達した結果、こんな夢を見ているのかと思って呆然としていた。

「……………何をしているの。こっちへ」

「は、はい！」

「うるさい」

「はい……………」

しかしこれは現実だ。

すぐに夢から戻された。

「あ、ドアは閉めて。それと帯剣しているならばそこに置いて」  
「はい、畏まりました」

ドアを閉め、すぐ近くに剣を立て掛ける。  
ベッドの近くの椅子を「お姫さま」が指差したので、そこに腰かけた。

「……………名前は？」

「ケイトです」

「姓もよ」

「ケイト・フィルポットです」

「ケイトね……………」

「お姫さま」はむくりと起き上がり、じつくりとケイトを見る。  
整った可愛らしい顔立ちで、目の下に少し隈が出来ている。  
だが、むしろそれがケイトにはさらに可愛らしく見えた。  
痘痕も笑窪、目の隈も……………いや、隈は隈か。

「……………年齢は？」

「え、あ、十八、です、はい」

「気を楽しに。落ち着きなさい」

「はあ……………」

落ち着けるものか。

目の前には幼き頃からの夢がいる。  
恋い焦がれ、手の届かなかった夢がすぐそばにあるのだ。  
いやしかし、落ち着かなければ。  
きちんとすれば、採用してもらえ可能性だってある。  
そうすれば「お姫さま」の傍に置いてもらえるのだ。

「……ケイ」

「はい！」

「落ち着きなさい。話している途中で止めないで」

「はい……」

「ケイト、あなた、何かあなたにしかできない事、あるかしら？」

「え……」

ケイトは迷った。

彼女には虎の子の騎士号がある。

しかしそれは、なんと言うかダメな虎の子だ。

それに言ったところで信じてもらえるかどうか。

しかしこの「お姫さま」はきつとそんな事など知らないだろう。

利用できるものは利用すべきだが……。

「ないのかしら？」

「あ、あります！私は騎士です！ミロスの騎士学校を卒業し、騎士

号を取得しました！誰かを守ることに関しては」

「うるさい。静かにして」

「関しては、若干なりとも自信はあります……」

「そう。騎士ね……」

「お姫さま」は「騎士」を舐め回すように見る。

よくわからないが、ぞくぞくした。

チラリとケイトの剣を見て、「お姫さま」は言う。

「……初っぱなから、良いのが手に入ったわ」

「……え？」

これは、私の事を言っているのだろうか？

いや、まさか。

きつとあの剣……いや、アレはただの中古の安いロングソードだ。

「お姫さま」の思いもよらない言葉に、ケイトは困惑する。

「採用よ。ケイト、あなたを雇うわ」

「い、いやでも私はそんな」

自分でも何を言っているのかわからない。

とにかく何が起こったのかよくわからないから混乱しているのだ。

「あら、辞退するの？」

「いえ違います辞退しません私はあなたをお守り」

「深呼吸なさい」

おかしい。

粗相しか起こしていないのに、採用されてしまった。

なんだこれは。

「お姫さま」の言う通り、深呼吸して落ち着いてみる。

しかし落ち着けば落ち着くほど、なぜ自分が採用されるのか、ケイトには理解できなかつた。

「……申し遅れたわね。私はモモメノ。歳は十一。姓は無いわ。依頼状で知ってたかしら？」

「はい、存じ上げておりました」

「そうね、あなたに頼みたいのは、ボディガードと言うよりかは、初めは私を補佐して欲しいのよ」

「補佐、ですか……」

補佐。

補佐？

「ええ、補佐よ。あなたもハントマンでしょう？だれでもできる事よ」

「いえ私は駆け出しで……」

「駆け出しでもできるのよ。追々話すから心配しないで」

「は、はあ……」

なかなか強引な「お姫さま」はすつくと窓に向かって立ち上がり、大きく伸びをする。

ベッドに開きっぱなしだった本を閉じ、傍らにあったウサギのぬいぐるみを抱き抱えると、凜とした通る声で言った。

「外の空気が吸いたいわ。付き合ってくれるかしら？」

「は、はい！」

これが、騎士としての初仕事だ。しっかりしなければ。守らなければ。

「お姫さま」は鞆から何か紐のような物を取り出し、ぬいぐるみの腕にそれを巻き付けながら言う。

「剣を忘れずにね。あなたの騎士としての腕前が見たいわ」

ああ、終わった。

ケイトには悪い予感しかなかった。

## 姫の証

「あの、何処へ……」

「ついて来なさい。街中で剣を振り回す訳にはいかないでしょう？」

外れへと、ウサギのぬいぐるみを抱えたモモメノは向かう。

そのすぐ後ろに連れられて、鞆を持たされたケイトがついて行く。騎士としての腕前を見ると言っていたが、どこでどのようにするつもりなのだろうか。

ケイトには皆目見当もつかない。

なんにせよ、腕前を見れば「お姫さま」もきつと考えを改めるだろう。

いや、改めさせてどうする。

どうにかしてしがみつかなければならぬのに。

「ところで、ケイト」

歩きながら振り向きもせず、モモメノは唐突に語りかける。

「はい、何でしょうか？」

「あなたはこの辺りの人だから、きつと変な質問だと思っかも知れないけど、一つ聞いてもいいかしら？」

「ええ、どうぞ」

なんだ、土着文化や何かに関する質問か。

ケイトはカザンで生まれ、ミロスで育ち、カザンで腐った人間だ。

そんじょそこの地方出身者よりずっとこの辺りの文化には詳しい。

「お姫さま」がどこから何のために来たのかは未だにわからないが、どんな予想外な質問にも答えられる自信はあった。

「そうね……あなたは騎士だと言ったけれど、女性の騎士は珍しいものなのかしら？」

「えっ……」

予想以上に予想外な質問だった。

「……それは、そのままの意味ですか？」

思わず質問内容を聞いたです。

なんだそれは、世間知らずにも程があるじゃないか。

騎士が男の仕事であることは、カザンやミロスのみならず世界の共通である。

ネバンプレスのルシエは有事には女性も戦うと聞いたが、それは騎士ではないからこれには問題外だ。

だとすれば、一体何を聞いているのかわからないのだ。

「そのままよ。あなたをからかっている訳じゃないから、安心して」「え、あ、はい……。そうですね、珍しいです。私以外には聞いた事がありませんから」

「そう、珍しいのね……」

もしかしたら、温室育ちなのだろうか？

いや、それならばボディガードは初めからついている。

それに行動力がありすぎる。

今ケイトがこの「お姫さま」について知っているのは名前と年齢くらいだ。

謎は深まるばかりである。

「……あなたに話すべきね」

「何をでしょうか？」

少し通りから離れたところで、モモメノが立ち止まり、振り返る。突然の事ですこしドキリとした。

「鞆、渡して。バネうさは持ってて」

「……はい」

バネうさ……ああ、ぬいぐるみか。

鞆を手渡し、バネうさとかいうらしいぬいぐるみを持つ。

手にくくりつけてあるのはなんだろうか。

……鞭？

まさか、そんな。

「あなたは……マレアエアを知っているかしら？」

「……ええ、存じ上げております」

マレアエア群島国。

南海に浮かぶ楽園で、女性のみが入国を許される神秘の国。

歌姫とも呼ばれる女王が聖なる歌を捧げることと魔を祓うと言う独特な文化を持つている国。

もちろんその女王にもケイトは憧れた事がある。

ちなみに「ケイト内、世界のお姫さま・女王さま憧れランキング」の第三位である。

「……ああ、あつたわ」

モモメノが鞆から箱を取り出す。

派手な装飾はないが、そのシンプルさがなにやら高級そうな雰囲気を出している。

「これは……？」

「……そうね、歌姫修行について知っているかしら？ 開けてもらいなさい」

歌姫……。

目の前の彼女が？

いや、そんな。

ぬいぐるみを落とさないように脇に抱え、その箱を恐る恐る開けてみる。

その中身に、答えはあった。

「マレアエアでは歌の力が強く、優秀な娘が王位を継承するの。選考には長い月日がかかるのだけれど、その間歌姫候補達は見聞を広めるために旅へ出る……」

「まさか……」

「ええ、そのまさかよ」

箱に入っていたのは、小さな王冠だった。

恐らくは、歌姫候補に与えられる王冠。

目の前の「お姫さま」は、真正正銘、お姫さまの卵だった。

「私はマレアエアの歌姫候補。修行のためにこの地へ来たのよ」  
「……」

とんでもないお方を捕まえてしまった。

いや、とんでもないお方に捕まえられてしまった。

まさか、諦めかけていたのに。

「返して」

「は……はい……」

「とりあえず落ち着きなさい」

箱とぬいぐるみを返し、代わりに鞆が返ってくる。

ケイトは意外と冷静だった。

逆に実感がわかないのだ。

モメノはしっかりとぬいぐるみを抱くと、また背を向けて歩き出し、そのまま続けた。

「……そんな訳で、少し大陸には疎いのだ。これだけ説明すれば十分よね？」

「……はい」

呆然としながら、ケイトはモメノについて歩くしかできなかった。

## 乙女思考回路はショート寸前

「こんなところかしらね……」

街を出てから程なくして着いたのは、林の中のちょっとした池の畔だった。

動くには十分なスペースがあり、辺りに人も見受けられない。

林の中は野性動物が住んでいて危険なのでケイトは止めようとしたのだが、「あなたが守ればいい」と言われればどうしようもない。

「……ここで何を？」

「あなたの腕前を見るのよ」

そうは聞いたが、一体何をするのか。

普通なら模擬戦とか、狂暴動物の討伐とか、そういう事をするはずだ。

「とりあえず、素振りをして。剣筋を見せて欲しいわ」

「え……はい、わかりました」

まさか、素振りとは。

経験者ならまだしも、素人に見ただけでわかるはずがない。

それに素振りなど、実戦で使う技術とは程遠い。

一閃で勝負を決めるサムライとは違い、騎士は剣で互いに打ち合うのが基本的な戦いかただ。

素振りはあくまで身体と動きを作るためであって、直接戦いのためにあるわけではない。

フォームだけはケイトも得意だが、それが騎士としての強さには関係する事はほとんどないのだ。

「……」

とは言つても、言われたからには仕方がない。

ケイトは騎士学校で習った通りの、綺麗なフォームで剣を振る。非力だったが、これに関しては誉められた事もある。それなりに自信はあるのだ。

「……もういいわ。綺麗ね、基本が成っているわ」

「わかるんですか？」

「あら、『わかるんですか』だなんて。自信があるの？」

「いえ、あの……」

「鎌をかけただけよ、気にしないで」

フン、とモメメノが鼻で笑う。

本当にこの「お姫さま」は十一歳なのだろうか？

ケイトにはとても大人びて見えた。

「じゃあ次。とりあえずアレを一振りで伐り倒して」

言いながらモメメノが指差したのは、大きな広葉樹の木だった。少し、呆れてしまう。

「……それは少し、いえ、かなり無謀だと思います」

「あら、できないの？」

「ええ、無理です」

あまりの世間知らずさに思わずムツとした。

そんなのは、物語の世界でしかできない。

熟練したサムライのカタナなら、厚い鎧をも斬ることができると言

うが、さすがに大木は無理だろう。

「そうね……ケイト、離れてなさい」

「ええ……？」

モメノは抱いていたバネうさの腕にくくりつけられた紐を伸ばす。  
やはりアレは鞭だったのか。  
しかし、一体何を？

「見てなさい」

「は、はい……」

モメノは大木に向かって、ぬいぐるみごと鞭を強く一振り。  
ブオンと大きな音が鳴り、旋風と砂埃が巻き起こった。  
少女が、いや、人間が振ったとは到底思えない強さだ。  
ケイトには鞭の先の軌跡に、何かが光って見えた。  
その眩い光は大きな弧を描き、すぐに消える。  
木の幹には、どうやらかすってもいないようだ。

「疲れるのよね、これ」

モメノが一言そう言うと、木は唐突に傾き、やがてメキメキと大きな音を響かせて、倒れた。

「……」

絶句。

その場にへたり込む。

「まあ、こんなものよ」

「あの……」

「何？」

「……『姫』と、呼ばせてください」

「勝手になさい」

なんだったのだろう、今は。

鞭は斬るものではないはずなのに、あんな大きな木を斬ってしまった。

それも、小さな女の子がだ。

ケイトは切り株とこちらに振り返ったモモメノを交互に見比べる。

もはや、夢なのか現なのかよくわからない状態だった。

「……今は、どうやって？」

「そうね、力ではないわ。マナよ」

「マナ……」

万物の力の根源であり、超自然的な資質であるもの。

それがマナ。

騎士学校で触りだけ習ったことはあったが、原理が難しいらしく、教官でさえ扱うことはできなかった。

そんな記憶がある。

「鞭のヘッドスピードはかなりのもの。そこにマナで更に力を加え

て真空状態を作り出し、鎌鼬を引き起こしたのよ」

「……だから、砂埃が」

「ええ。鞭の先が光って見えなかったかしら？ アレがマナよ」

小さな女の子がそんなものを？

まさか、あり得ない。

……しかし、実際に木は斬り倒されている。

簡単に信じることはできないが、決定的な事実がそこにはあるのだ。

「私のボディガードをするにあたって、とりあえずあなたにはこれくらいこなせるようになって欲しいわ」

「そ、んな、私は……」

モメモノが一步、また一步と未だに立ち上がれないケイトに近付く。今や「お姫さま」に対するケイトの想いは羨望のそれではない。畏敬。

服従。

そして恐怖である。

「お姫さま」にお近づきになりたかった私が馬鹿だった。

身の程を弁えず、素敵過ぎる夢に向かっていた私が愚かだった。ですから、どうか、私をお赦しください。

ケイトは「お姫さま」から後ずさる。

「……逃げてはいけないわ。あなたはボディガードなのよ」

「わ、私には、無理です、姫を、あなたを守るなんて」

不安なのだ。

モメモノの凜とした声は、ケイトの心の奥深くに容赦無く鋭利なナイフを突き立てる。

本人にそんな気があるかどうかはわからないが、人の心に浸透し、揺さぶる声なのだ。

「ねえ、ケイト。どうして私から逃げるのかしら？」

「ああ、あ……」

「ねえ、答えて？」

だんだんとナイフの本数が増える。

一言一言、ケイトの中に響いて増幅し、思考のキャパシティを埋め尽くしていく。  
身体は硬直し、奥歯がガタガタと震えだした。  
もう何も考えられない。

「……そう、偉いわ。あなたは逃げてはいけないの」  
「は、い……」

ついにモメノはケイトのすぐ傍にたどり着き、屈み込んで目線を合わせた。  
ケイトの瞳から一筋の涙が溢れる。  
堪えきれなかったのだ。

「恐れることはないわ。私はただ、あなたに信頼してもらいたいのよ」

ぬいぐるみを抱いていない右腕が伸びる。  
小さな白い指が、ケイトの喉元を優しく撫でた。  
そんな「お姫さま」の寵愛も今のケイトには何にもなり得なかったが、少しだけ緩んだモメノの表情は、ケイトの恐れを少しずつ恍惚へと解きほぐした。

「……私を信頼してくれるかしら？」  
「……はい」

そうだ。  
私はこの方を選ばれたのだ。  
この方を信頼すべきなのだ。  
初めからこうなっていたのだ。  
ケイトの乙女思考回路は凄まじい勢いで再構築される。

ただ、「お姫さま」を想うためだけに。

「答えて？ ケイト、あなたは、誰のものなの？」

「……私は」

考える必要は無かった。

乙女思考回路の再構築は刹那のうちに完了し、定型文として答えは出来ていたのだから。

「 姫の、あなたのものです」

言い切ると、身体中の力が抜けた。

ぐったりと倒れ込み、これ以上無く高鳴る胸で深く息をする。経験したことの無い快楽が身体中を駆け抜け、打ち震える。

「偉い子ね……」

今度は頬を撫でられる。

もはやケイトの頭には、幸福しか存在しなかった。

「服が汚れてしまっわ。あなた、立てるかしら？」

ゆっくりとその場に立ち上がり、モモメノは言う。

「街へ戻ったら、荷物をまとめて私の部屋へ。私の補佐をするにあたって、今夜は話したいことが山ほどあるの」

木漏れ日に照らされながら手を差し伸べる「お姫さま」は麗しかった。

この「お姫さま」のためならば、きっと何だってできるだろう。

恍惚の中、ケイトはそんなことを思った。

## 姫であること

「……陸の上での夜は久しぶりだわ」

「あれ、今日到着されたんですか？」

「そうね、よく考えたら今朝着いたばかりね」

「……相当お疲れでは？」

「少しだけね」

街へ戻り、もとの宿から荷物を持って、モモメノの部屋に置き、クエストオフィスで募集要綱を取り下げ、ボアに大層驚かれ、お腹が減ったと言うので露店街に行き、ケイトはアゴート揚げとろおぱあうどん（メニュー名そのまま）を、モモメノはお子さまランチとコリアロールを食べ、お金が無い（金貨しか持っていない）と言うのでケイトの財布から払い、そんなこんなで宿に戻り、久しぶりに「部屋に備え付けられているシャワー」を浴びて、そんなこんなでやっと落ち着いた。

時刻は午後九時を回っていた。

「この部屋を選んで良かったわ。案外広いのね」

「ええ、もとは四人部屋ですから」

「そうね、もう少し寿司詰めかとおもったのだけど

」

さすが六剣亭一の大部屋だとケイトは思った。

スイートルームと言うほどではないが、シャワーは備え付けだし、大きな窓からは広場とその中心に立つレムス像が望める。

ケイトが昨日まで泊まっていた宿とは雲泥の差である。

まず、部屋の鍵がしっかりかかるところから違うのだ。

「それで、ここに何泊するおつもりですか？」

「そうね、落ち着くまでここにいますつもりよ」

「はあ、そうですか……資金の方は？」

「心配無いわ。少し待って」

モモメノは鞆を取り、その中身を漁る。

そういえば、ネグリジエに着替えて髪を下ろしているのだった。

昼間とは違った印象があり、これもまた可愛らしい。

いやむしろ艶かしい。

特にネグリジエのレースになって肌が透けて見えるような部分など、ケイト的にはお姫さま（ああなんて可愛らしいのだろう抱き締めてしまいたい）度合いMAXだ。

下ろした髪もまだ濡れていて、これもまたお姫さま（抱き締めて私ものにしてしまいたいむしろ抱き締められたい）度合いMAXである。

ケイトは既に、弱冠十一歳の「お姫さま」の虜になってしまっていた。

「ケイト」

「……はいっ！」

「なに大声出してるのよ。これ、通帳」

姫から渡されたのは、アイゼンの貴族が全世界に支店を出している銀行の通帳だった。

もちろんカザンにも支店があり、その規模は世界最大とも言われるページをめくってみると、そこには、一の後ろに零が四つとGがあった。

「わあ……」

10000G

普通のハントマンには、到底考えられないような額である。それなりに大きな家が一括で買えてしまうくらいだ。

「旅となると物入りだから、国の方からもらえるのよ。……何か始めるには十分過ぎる額じゃないかしら？」

「え、ええ……しかし何を？」

不適な笑みを見せながら、モメメノは通帳をしまつ。

一体この大金で何を始めると言っのだろうか。

どうやらこの辺りに根を張るようだし、何か起業をすると言っのが普通の考えだ。

しかしこの姫の考えることはわからない。

修行の期間が終われば、きっと帰らなければならないのに、一体どうするつもりか。

「そうね、とりあえず髪を梳いてくれないかしら。櫛はあるから」

「ええ、畏まりました」

今度は鞆から櫛をだし、ケイトに渡す。

そして膝の上にちょこんと座ったところで、既にケイトのお姫さまカウンターはストップ高に達していた。

見るからにしつとりとしてつややかで、ハリ、弾力もあり、しかもシャンプーのいい匂いもする。

まさに姫ヘアである。

最上級である。

ちなみにケイトの中では「超」「真」「極」と同義同等に「姫」「妃」の字が扱われる。

むしろ上位互換である。

髪だけではない。

その頭にはルシエ特有の可愛らしい耳がある。  
垂れている。

犬耳である。

ああ、触りたい。

触れてしまいたい。

しかし嫌がらないだろうか？

もしかしたら敏感な部分かもしれない。

ここは髪の毛だけを……いや、あえてそのような部分に触れてスキンシップを図り、帰属意識を高めあってはどうか。

いやまだ早すぎる、あまりにも時期尚早だ。

嫌われてしまつては元も子もない。

ここは少しずつ距離を……

「……なに呆けてるの。梳いて」

「へ、へあい！」

一瞬にして現実に連れ戻された。

変な返事も出た。

どうでもいいこと……いや、どうでもよくないが、とにかくそんなことを考えずに姫から与えられた仕事をこなそう。

ケイトはなんとか無心になって櫛を入れる。

しかしながら、それにしてもいい髪だ。

細い櫛のはずなのに全く引っかからない。

サラサラである。

姫サラサラヘアである。

ああ、できるならこの姫サラサラヘアごと抱き締めてしまいたい。  
いやだめだ、考えるな。

今は梳くことだけに集中しろ。

「……それで、私がかザンに来たのは、」

待って下さい姫。

今はそれどころじゃありません。

「ケイト、聞いているの？」

「……」

「ケイト？」

「……聞いています」

「……そ。続けるわ」

だめだ、姫に嫌われてはだめだ。

話はちゃんと聞こう。

その上で姫サラサラヘアーを堪能しよう。

ケイトはなんとか正気を取り戻す。

正確には正気ではないが、狂気の中の狂気は正気なのだ。

「私がかザンに来たのは、あの資金を基に巨大なギルドを作るのが目的よ」

「……巨大なギルド？」

ギルドなんて作ってどうするつもりだろう。

それに、ギルドはその少人数性の身軽さに意味があるのに、巨大にしてはどうにもならないじゃないか。

やはりこの姫は世間知らずなのか？

いや、ここまで大人びているとそんなことは無いだろう。

意味深な発言に、ケイトは戸惑った。

「ええ。最終的には全世界にギルドハウスを展開し、社団性と営利法人性を備えるの」

「お金儲け、ですか？」

「平たく言えばそうなるわ」

あまりにも非現実的すぎる。  
そんなことは出来やしない。

ギルドはあくまでハントマン同士の集まりであって、会社ではないのだ。

「私には、無謀だと思えますが……」

「そうね。普通の神経してるなら、頭の病気を疑われる構想よ」

ありがとう、もういいわ、と言ってモモメノは膝から降りる。

ああ、もう少し堪能したかったのに。

向かい側に座って、今度はケイトの目を見て言った。

「……でも大丈夫。私がいるから。あなたなら信頼してくれるわよね？」

「……はい」

ケイトにも、これは確実にしてやられているとわかる。

それでも信頼できるのは、心を揺さぶられる声と、あの出来事のお陰だろう。

姫のことだ、きつとどんなことでも成功するに違いない。  
実際、心からそう思えるのだ。

「ありがとうケイト。私もあなたを信頼しているわ」

「いえあの……あ、ありがとうございます」

恥ずかしくなって思わず目を逸らす。

そんなことを言われれば、当然と言えば当然か。

しかし、わからない事がある。

「……でもどうして、そんなことを？ 王女になれるかもしれないのに」

何故歌姫の卵と言う立場で、ギルドなどを作るのだろうか。

成功して、富も名誉も手に入れたところで、国に帰ればそれは手放すことになるのだ。

「そうね……」

モモメノはバネうさを抱き締め、言葉を選ぶように続ける。

「……王女になるのが、嫌だったら、そんな理由じゃ、だめかしら？」

「そんな……」

どうして？

どうしてそんな事を言えるのか、ケイトには全くわからない。

自分だったら、絶対になりたいのに、どうして姫はそんな事を？

「どうして……マレアイアの女王は、歌のために、努力して……姫、あなたも、きっと……」

「努力、ね……」

モモメノは上体を後ろに倒し、仰向けになる。

「そうね、努力したわ。……いえ、させられたわ。物心つく前から、ずっと」

「え……？」

「強制的にね」

まさか、歌姫は国の娘の憧れで、誰もが歌を学ばずなのに。この姫は、まるでそれを嫌がっていたような口振りだ。

「私は王宮に住んでいた。そこで次期歌姫にするべく、英才教育を受けていたのよ。私だけ。寝ても覚めても、いつも勉強か歌。自由なんてなかったわ」

「……ご両親は？」

「さあね。海難事故にでも遭って、私だけ島に流れ着いたんじゃないかしら？ 興味も無い」

「も、申し訳ございません……」

「いいわ、興味無いから」

ケイトには、ぬいぐるみを抱き締めながら寝返りを打つ姫が、どうにもいとおしくなってしまう。同情だろうか。

いや、そんな事、きっと本人は嫌がるだろう。

「……歌姫修行から帰ってくる候補者は多くないわ。特殊な事情が無い限り、迎えが来て、強制帰国だけれどね。途中で男に捕まれば、もう帰って来れないのだから。……もつとも、そういう時は『狼に喰われた』と言うのだけど」

「……」

「自由になれるのよ。歌姫候補として世界に出れば、自由になれる。……帰りたくないのよ」

そうか。

帰れば確実に、他の候補を抑えてこの姫が歌姫に選ばれるだろう。

「お姫さま」は決まりきった未来が嫌だったのだ。

「……ケイト、それでもあなたは私を『姫』だなんて呼ぶかしら？ 私を信頼するかしら？」

モメメノはそっぽを向いたまま問いかけた。  
声にも凜々しさはない。

きつとこれは、この少女の本心なのだ。

「姫」と呼ぶかだなんて、そんな事。  
そんな事なら決まっている。

「……ええ、呼びますし、信頼します。私の中では、あなたはマレアアの歌姫などではなく、私の主であり、そしてお姫さまですから」

モメメノはその言葉を聞くと、うつ伏せになって一言「勝手になさい」と返した。

「……なんだか疲れたわ」

「お休みになられますか？」

「そうね、そうする」

毛布をかぶり、丸くなる。

ぬいぐるみは抱いたままだ。

「明日からは、空いてるベッドに寝る人材を集めるわ。灯りはまだ消さなくていいけど、早く寝ることを薦めるわね……」

ここにきて疲れがドツと来たのだろうか、声のトーンが徐々に小さくなっていく。

なんだかんだ言って、体力は子供だ。

「畏まりました。おやすみなさい、姫」

「おやすみ、ケイト……」

明日から、本格的にこの少女を補佐せねばならない。

それはとても、難しいかもしれない。

それでも私なら、いや、むしろ私でなければできないことなのだ。

私は、私だけの「お姫さま」に選ばれたのだから。

ケイトには、そんな確証の無い自信が満ち溢れていた。

## 盾になる

「精肉コーナーの一番上に陳列される夢を見たわ」

「……」

「マナーの悪い主婦がつつくのよ、私を」

「……」

「……ケイト、あなたきちんと寝たのかしら？」

「……あまり」

一夜明けて。

ケイトはモモメノが眠りに付くのを見届けた後、自分も早く寝ようとした。

寝ようとしたのだが、隣のベッドに「お姫さま」がいることを考えるとすぐに眠れるものではない。

細かいことを端折れば、だいたい「姫チークである。プニプニである。姫プニプニチークである。最上級である」だけで説明は付く。

そんな事をケイトは寝ているモモメノ相手に一人でやっていたので、もちろんのこと姫カウンターがレッドゾーンに達してしまった。

レッドゾーンどころかデンジャーゾーンだった。

ハイウェイからデンジャーゾーンだった。

編隊攻撃訓練中にジェット後流に巻き込まれ、操縦不能のキリモミ状態になるくらいのデンジャーゾーンだった。

そんなわけで身悶えているうちに朝がきてしまったのだ。

「……そ。今日は早く寝ることね」

「はい……」

宿で軽い朝食を取り、二人は今朝市に来ている。なんでも、埋もれた人材をスカウトするらしい。

月30Gならば、極々一部のトップ以外、普通のハントマンならだいたい振り向くだろう。

冒険自体に生き甲斐を感じ、好き好んでハントマンをしているベンチャラーならともかく、できれば今すぐにも安定した収入が欲しい貧乏ハントマンにはかなり魅力的だ。

それならばクエストオフィスかどこかに募集を出すか、今からでもギルドを作るべきである。

それはきつと姫も重々承知しているだろうが、それでもスカウトにこだわるのは、何か考えがあるはずだ。

「……あら」

道の途中、突然モモメノが立ち止まる。

何があつたのか。

「どうなさいました？」

「アレ……」

指差す方を見てみると、そこには愛染式飴細工の実演販売の露店があつた。

いかにもベテランらしき、外套をすっぽり被った老婆が、米を挽いた粉を蒸している。

「甘い匂いね」

「アイゼンの飴ですね。蜜に浸けて食べるんです」

「そうね。食べたいわ、アレ」

「はあ、そうですね……」

ケイトはポケットからいくらか小銭を出す。

入っていたのは6S銀貨三枚と1S銀貨、そして10C銅貨が二枚。

残りは宿に置いてきた。

一つ3Sでだいぶボられている気もするが、なんとか大丈夫そうだ。

「買えますけど、あまり余裕ありませんよ？ 私、つい昨日まで全然仕事無かつたんですから」

「……そうね、後で手持ちのを崩さないと。ああ、お金の管理はあなたに任せるわ」

「え……？」

「金銭感覚はあなたの方が鋭いわ。それにこの国の単位って複雑じゃない」

「は、はあ……」

金貨は世界共通の貨幣である。

これはアイゼンが最盛期に世界に広めたもので、国際的な取引に都合がいいので今日でも続いている。

しかし一般市民にとって金貨は価値が高すぎてそのままでは買い物ができない。

日常生活の買い物でそのまま金貨を出せば、大顰蹙を買いことになるだろう。

そのため、金貨の単位「G」の下に、その国に合わせた独自の単位を設け、銀貨や銅貨などを使用しているのだ。

カザンの単位が複雑だと言うのは、1Gが60Sの六十進法であり、しかも1Sが100Cという計算し難いシステムになっているからだ。

他国で通用する貨幣は金貨だけなので、カザンに来て両替した旅人は、まずはこれに戸惑うこととなる。

「……おやお嬢ちゃん、お一つどうだい？」

老婆がこちらに気付き、モモメノを誘い込む。

ケイトは袖を引つ張られ、二人は露天の前に立った。

「すみません、これで二つください」

6S硬貨を一つ出し、老婆の手に置いた。

「あら、一つでいいわ」

「私も食べるんですよ」

「……そ。じゃあ二つね」

「へへ、ありがとね」

蒸し器の蓋を開けると、モメメノは少し驚いた様子を見せた。おそらくあの中に完成品が入っているとでも思ったのだろう。実際には白くて大きなぶよぶよした得体の知れないものがあるのだから無理もない。

「ケイト、これ……」

「まあ、見てたらわかりますよ」

老婆はそのブツを握りこぶしより一回り小さいほどの量を棒で絡めとり、形を整えながらモメメノに尋ねた。

「さ、お嬢ちゃん。どんな形でも作ってあげるよ」

「そこから？」

「そう。お嬢ちゃんの抱いてるうさちゃんだって作れるのよ」

「兎を食べるだなんて野蛮だわ。そうね、どうせなら捕食獣がいいわね」

「それじゃあ、鷹でも作るうか……」

鋏を持つと、それを巧みに操り、切って、伸ばし、整え、また伸ば

し……。

その熟練した手捌きに、モメメノは夢中になる。そして一分もしないうちに見事な鷹の飴細工が完成した。

「はい。まだ熱いから気を付けなね」

「……ええ、ありがとうございます」

「お姉さんの方はどうするんだい」

「あ、私は狐で」

受けとると、それを色々と角度を変えて眺め始める。

心なしか目が輝いていて、感動しているように見えた。

まだ出会って間もないが、ケイトにはこの姫について少しわかった事がある。

口調や振る舞い、行動から大人びて見えるが、中身はそんなことなく、本人も大人ぶっている様子では無いのだ。

むしろバネうさを肌身離さず抱いていたりするので、十一の歳より幼い印象すら受ける。

彼女を取り巻いてきた環境が特殊だったために、少し普通とズレがあるのだろう。

「はい、上がり」

「ありがとうございます」

出来立ての飴細工を受け取り、二人は再び市場を歩き出す。

本当にスカウトする気があるのかわからないが、とりあえずは楽しい時間である。

「姫、これからどちらへ？」

「さあね。動かなければ何も見つからないわ」

とは言えど、特殊な人材なら、それに見合った場所に集まるのが世の常だ。

適当に歩き回るだけでは、徒に時間を消費するだけで何の意味もない。

「どのような人を探すのですか？」

「そうね……」

モモメノは鉛細工をくわえ、少し考えてから言う。

「戦いに優れた者……ね」

「戦士……ですか？」

「ええ。クエストで一番報酬が高く、効率的に名を売ることができるのは、討伐だもの」

確かにそうである。

下手すれば死と隣り合わせになる狂暴動物の討伐はクエストの花形であり、彼の有名な王者の剣や肉球アタッカーズもそれによって一躍有名となった。

しかしあまりにも危険が多く、それなりの強豪ギルドにしかこなせないクエストである。

もちろん、ケイトには到底無理な話だ。

「しかし私に、そのような実力は……」

「そうね。難しいわ」

直接言われると少しガツカリするが、事実なのでどうしようもない。しかしそうになると、ケイトにはなぜ自分が雇われたのかさっぱりわからないのだ。

「それならば、なぜ私をボディガードに？ 自分で言うのもどうかと思いますが、少し頼りない気がします」  
「そうね……」

モモメノは一度振り返り、ケイトを一瞥してから続ける。

「背後からナイフを持った通り魔が」  
「ッ！」

剣に手をかけ、後ろを確認する。  
怪しい人物はいない。

「……もしもの話よ。落ち着きなさい」  
「は、はい……」

もちろんここは市場の道の真中である。  
通行人も多く、だいぶ混雑している。  
赤っ恥である。

「……背後からナイフを通り魔が近付いてきて、私は全く気付いていない。その通り魔は私を狙っている。……さあケイト、ボディガードならどうするかしら？」

「ええと……通り魔を食い止め、姫を退避させます」  
「そうね、普通はそれで正しいわ。これで私の身は守られたわね」  
「はあ、そうなりますね」

モモメノが袖を引っ張りケイトを横に並ばせる。  
それから、目を見てゆっくりとした口調で言った。

「だけど……あなたの身はどうかしら？ 刺されたら無事で済むか

しら？」  
「それは……」

無事では済まないだろう。  
それに、確実に勝てるという見込みもない。

「……私が言いたいのは、あなたは既に私の身を守る盾にはなれる  
と言うこと。ただあなたは、あなた自身を守めることは現状できな  
いのよ」

「……なるほど」

「そうね、マナの扱いはしばらくしたら教えるわ。それまでは私  
の盾になる以上の事は望まない。大丈夫よ」

お得意の不思議な声で、優しいな笑顔を浮かべながら言う。  
よく考えれば助けられないのかと思ったが、まあそんなことはど  
うでもいいのだ。

「……はい、ご指導よろしくお願ひします」

「ええ。あなたの頑張りに期待するわ」

またモモメノはそっぽを向くが、それでもケイトには十分だ。

「お姫さま」の隣で歩いていることが幸せなのだ。

そしてその「お姫さま」の盾になることもできる。

私はなんて幸福者だろう。

そんな事を考えて姫カウターがだんだん上がり始めたとき、ケイ  
トは向こうから何か早いものが来るのを見つけた。

「すまん！退いてくれっ！」

遠くからそんな声が聞こえる。

それはどんどん加速し、気付いた時には二人の目の前に来ていた。このままでは、モモメノにぶつかってしまふ。

「姫っ！」

ケイトは咄嗟に間に割って入る。

直後に、衝突。

仰け反ったが、後ろには姫がいる。なんとか堪えきった。

「いつっ……」

「うう……姫、ご無事ですか？」

「ええ……」

ぶつかったのは、金髪のルシエの少女だった。髪の毛は簪で留められていて、刀を転んでも大事そうに抱えている。どうやら、サムライらしい。

「……ああ！す、すまない！」

「ああ、いえ、こちらこそごめんなさい」

少女は飛び起きて、謝りながら何度も何度も頭を下げる。かなり急いでいる様子で、落ち着きがなかった。

「それじゃ、アタイはこれで！すまなかった！」

少女は走って去ろうとする。

ケイトも姫を守れたことから満足げで、特に何とも思わなかったが、モモメノは違った。

「ちょっとあなた、お待ちなさい」

凜とした声でモモメノは少女を引き留めた。

「姫、咎めることは……」

「違うわケイト。……あなた、『袖振り合うも多生の縁』、アイゼンの諺よね」

「お、おう……」

少女は困った表情で、足踏みをしながら答える。

ケイトには諺の意味がわからず、少し頭が混乱する。

「名前だけでも……と思ったのよ。私はモモメノ。姓は無いわ。あなたは？」

「ナムナ・シユマリ！ ああー！ いいか！？ もういいか！？」

「ええ、ありがとうナムナ。行っていいわ」

「おう、本当にすまなかつた！」

姫がゴーサインを出すと、ナムナと名乗った少女は向こうへと勢いよく駆けていった。

遠くから「今度会ったら何か、何かするから許してくれな！」と聞こえてきた。

嵐のようだった。

しかしケイトは未だに満足げである。

「……さて、ケイト」

「はい、なんでしょうか」

これで姫に認めてもらえるだろうか？

どんな言葉をかけてもらえるだろうか？

もうケイトの中では幸せ一杯だ。  
しかしそれとは裏腹に、  
モモメノの言葉は冷酷だった。

「彼女……ナムナは私を避けたわ」

「……え？」

「そこ、見なさい」

モモメノは地面を指さす。

屈んで見てみると。

そこにはナムナの足跡があった。

「若干外側を向いているでしょう？ それに、重心だって傾いているわ」

「……本当だ」

「それに私だってあれくらい避けれるわ。あなたが割ってこなければ、ぶつからずにすんだわね」

「は、はあ……」

まさかのどんでん返しに、ケイトは萎縮してしまう。

ガックリと肩を落としてうつむいてしまう。

私ではやはり無理なのだろうか？

不安がよぎる。

「……でも、ケイト」

名前を呼ばれ、顔をあげると、すぐ前にモモメノの顔があった。  
目が合う。

「己の身を挺して主人を守るその行動。小さいけれども、称賛に値

するわ」

また、あの声で、今度は誉められた。  
一度落ち込んだ姫カウンターも、一気に高まる。

「あ、あの……ありがとうございます」

「これからも頼むわね」

思わず目を逸らしてしまうのは、やはりケイトが姫の虜であったからだ。

脳内幸福度はMAXに近い。

「……さ、行くべきところがあるわ」

モモメノはおもむろに立ち上がり、ケイトもそれに連れられる。

「銀行でしょうか？」

「違うわ、そうじゃない」

モモメノはまたそっぽを向くと、不敵な笑みを浮かべて言った。

「……あの子を抑まえるわ。二人目よ」

そうしてケイトの袖を掴み、強引に引つ張っていく。

横顔だけだが、その様子はケイトにはまるで捕食者のように見えた。

## 捕食者

「姫、一体何処へ？」

袖を掴まれ、ずんずんと市場を抜けて行く。

モメノが突き進むまま、ケイトはそれについて行くしかない。獲物を見つけた捕食獣は、かなりの貪欲なのである。

「向こう。西よ。彼女が向かった方向」

「しかしそれだけでは……」

「そうね、わかってはいるわ。でも動かなければ何も見つからないじゃない」

袖を引く手が更に強くなり、歩く速度も速くなる。

少し興奮しているのだろうか。

冷静さを欠いているように見える。

「ケイト、この先を進んでたどり着く先はどこ？」

「ええと……中央の大通りです。正門と中央広場を結んでいます」

「宿から見える通りね？」

「ええ、そうです」

「そうね……」

早歩きだった足が急にスピードダウンし、モメノは少しうつむく。どうやら何か考えているようで、少し落ち着きを取り戻したようである。安心して。

「……まず、あの子は、確実にハントマンよね？」

「はい、おそろく」

サムライは平民の中では一番高い身分であり、を名乗れるほどのアイゼン人は、基本的に他国の文化に興味を持たない。世界はアイゼンを中心に貴く、そこから離れれば離れるほど野蛮との考えを持っているからだ。だが、近年では貴族の搾取によってサムライも裕福ではなくなり、その武芸の腕を頼りに出稼ぎに来る者も少なくない。王者の剣のゲンブもその一人だと言われている。

「正門から、あの広場……広場には……馬の……」

「レムス像ですか？」

「あら、レムスと言う名なの？」

「ええ、大統領の愛馬でした。あの下に眠っています」

モモメノはそうねと呟き、足を止める。

ケイトもつられて立ち止まり、どうしたのかと見てみるが、表情からはなかなか読み取ることできない。

「……ねえ、ケイト。あの像目立つわよね？」

「ええ、目立ちます。よく待ち合わせの場所に……待ち合わせ？」

ニヤリ、と笑い、目を見て、ケイトの手を引いた。

「走れるかしら？」

「……はい」

そうか。

彼女が急いでいたのは、おそらくレムス像前で何かの待ち合わせをしていたのだ。

時計が近くに無いからわからないが、すぐに十時の鐘が鳴って朝市

も終わりになるだろう。  
きつと集合時間は十時。

今からでは間に合いそうもないが、それは先に行く彼女も同じだ。

「行くわよ」

右手でバネうさをしっかりと抱き直すと、頼り無い騎士が自分からはぐれてしまわないようにしっかりと袖を掴み、モモメノは走り出す。ケイトも姫からはぐれないようにと、併せて少し後ろを行く。

まともに走ればケイトはモモメノより速いだろうが、このような場合は主に合わせるべきなのだ。

騎士学校で習った事である。

人混みの隙間を縫い、躓かないように気をつけて、大通りへと駆け抜ける。

通行人に肩がぶつかろうが、怒声をかけられようが、そんなことは関係ない。

今は少しでも早く、あの少女に追い付くのだ。

「しかし姫、彼女がすでにギルドに参加していたとしたら!？」

「関係ないわ、引き抜くだけよ。ああ、もう、邪魔ね」

横一列になって歩くハントマンたちの間に、躊躇いもなくモモメノは突っ込む。

ケイトは「すみません」と謝りながら、鞘だけは当てないようにしてそこを抜けた。

広くは無い道を右へ左へ、時には露店の裏を回って障害を乗り越えていく。

姫はなかなか頼もしいのだ。

やっとの事で市を抜け出し、大通りへとたどり着く。

ここから先は道幅が広いので走りやすいだろう。

しかしその時、十時の鐘は鳴り響いてしまった。

「ああ……!!」

「ケイト、まだよ、まだあの子だって着いていないはず……」

息も切れかけだが、モメメノは更に速度を上げる。

空腹の獅子は、一羽の兎を狩るのにも必死となるのだ。

しかしその獅子も体力は子供である。

少し走るうちに、限界となり、ぜえぜえと荒い息を شدした。

「姫、無理をなさらず!」

「いえ……大丈夫……」

そうは言うが、どうにももう無理そうだ。

立ち止まって息を整えようとするが、噎せてしまってもうまくいっていない。

それならばと、ケイトはモメメノの前に屈み込んだ。

「……私の背中へ。これでも騎士です」

ケイトとて厳しい訓練を受けてきた身だ。

体力が無いと言っても、それは周囲の騎士と比べての事である。

そこらの一般女性と比べれば背も高くて大柄であり、運動能力は確実に優れている。

「そうね……お願い……」

モメメノはバネうさをどうしようかと迷うが、とりあえずバネの部分に腕を通すことにした。

ああ、なるほど、なんとも珍妙だが、そんな方法もあるのか。

しかし今はそんな事を気にしている場合ではない。

今から姫を背負うのである。

もちろん胸があたるのである。

胸である。

ブレストである。

姫ブレストである。

ふくらみかけである。

姫ふくらみかけブレストである。

最上級である。

アドレナリンが、エンドルフィンが、ドーパミンが、セロトニンその他のが、溢れんばかりに分泌される。

幸福である。

走っているのに、まるで時間がゆっくり流れるかのように感じる。

恍惚である。

しかし頭は冴え渡っている。

温もりや柔らかさなど、姫の全てを感じるために冴え渡っているのである。

背中の中のかさのなかに、微かな揺れを感じる。

命の鼓動である。

生命の神秘である。

そう、生きているのである。

うなじに荒い息があたる。

艶やかである。

艶やかである。

艶かしくもある。

そして艶麗である。

更には腕で支えているのは太股である。

何より柔らかいのである。

まさに最上級である。

「ケイト……速すぎ……」  
「もつとしつかり掴まってください！」

感じるのである。

姫の温もり、息遣い、何から何まで。

ああ、なんて私は幸福者だろうか。

今は馬だ。

姫の馬だ。

速く駆け、風を切る馬だ。

何処にでも行けてしまいそうだ。

私は騎士だけでなく、馬にもなれるのだ。

これ以上の幸せは無い。

しかし、ああ！　なんて現実残酷なのだろう！

見よ、あのレムス像を！

私は姫のために、迅く捷く駆け抜けたがため、もう目的地に到着してしまっただのだ！

「姫のため」が災いし、存分に堪能できぬまま、馬としての役割を終えてしまったではないか！

ああ、なんたる事であろうか！

「ありがとうケイト、もう大丈夫よ。降りして」

はい、畏まりました！

ここで私は馬としての役割は終わるが、その駆け抜けてきた道は煌々と輝いているだろう！

さらばだ！　馬としての私よ！

またいつか、姫に必要とされるまで！

「……いないわね」

モメノは辺りを見回すが、ナムナの影は見当たらない。間に合ったのか、それとも。

「ここで何の集合があったのか知りたいわね……」  
「ええ……」

何があったのかわかれば、ここから次にどこへ行けばいいのかわかるだろう。

クエストの集合だったならば、クエストオフィスに行けば記録が残っているはずだ。

本来なら開示はできないが、ポーアならなんとかしてくれそうだ。

「とりあえずクエストオフィス……ん？」

姫に行動を促そうとしたとき、ケイトは見覚えのある顔を見つけた。大柄でガタイの良い男だ。

「……ケイト、どこへ行くの？」  
「知り合いがいたんです。何か知っているかも」

近付いていくと、向こうもケイトに気付いたようで、互いに歩きながら敬礼する。

「アレス、久しぶり」  
「おー、仕事は見つかったか？」  
「まあ、なんとか」

アレスと呼ばれた男は後ろから追ってくる小さな存在に気付き、一礼した。

「ケイト、勝手に離れないで」  
「えあつ！……も、申し訳ありません！」  
「ハハ、変わってないな」  
「儀礼はアンタよりできてたわよ……」  
「そうだったか？ で、そちらは？」  
「ケイトの雇い主よ」

このアレスと呼ばれた男、ケイトと騎士学校の同級生であった。こちらも相当な落ちこぼれだったが、ケイトとはベクトルが真逆だ。はじめからハントマンになるために騎士になったと言っているので、特に心構えとしての騎士道はあまり必要なかったらしい。戦いの腕は教官といい勝負だったことをケイトは記憶に留めている。

「……ケイト、あまり時間はないわ」  
「ああ、そうでした……。アレス、さっきこの辺で集まりはなかった？」  
「あー、集まりなあ。さっき像の前でルシエのハントマン達が集まっていた」  
「ルシエ？ルシエだけ？」  
「ああ。肉球アタッカーズが募集かけてるって聞いたから、それじゃないか？」

肉球アタッカーズ。  
ルシエのメンバーだけで構成された名門ギルドである。  
名前こそ学生のノリだが、実力は王者の剣に次いで二番目との声も強い。  
神出鬼没な活動をしており、行動範囲は世界中を広くカバーする。  
特定の拠点を持たず、常に移動をしているので、カザンにとどまらず募集をかけるのはなかなか珍しい事だ。

「その中にサムライの女の子いなかった？」

「わからん。オーデイションらしいからかなりいたからな……。あ、一人遅れて来たのがいたな、サムライで」

モメノの耳がピクリと反応する。

ケイトはそれを見逃さなかった。

眼福である。

しかし今はそうではない。

「姫」

「そうね……」

「アレス、その子どこへ行ったか知らない？」

「あー……はつきりは知らんが、大統領府の方だ。オーデイション遅れたから、諦めて他のギルドでも探しに行ったんじゃないか？」

姫と騎士は互いに顔を見合せて頷いた。

大統領府方面には、ギルドオフィスとクエストオフィスがある。

次の行き先が決まった。

「ありがとうアレス、助かったわ」

「ああ、一体何がなんだかわからんがな」

「捕り物よ」

「姫、違います。勘違いされたら困るのは私たちですよ」

「そうね」

「それじゃ、またな」

「また今度」

大収穫だ。

かなりの手がかりである。

ナムナがフリーであることを知れただけで、だいぶ大きな情報だ。

「引き抜く手間が省けたわね」

「ええ、次はどこへ？」

「決まってるじゃない、ギルドオフィスよ」

モメノの横顔が再び捕食者のそれになる。

なんとも頼もしい横顔だと、ケイトは思った。

## 忙しさはすぐに止まず

「どうしたんですか姫、入らないんですか？」

「……私、あの受付嫌いなよね」

ギルドオフィスの前。

今まで聞いたこともない程に生気の無い声でモモメノは呟いた。

その声は動植物を腐敗させ、思考は停止し、日の光は遮られ、ケイトに「私の陰気が負けた!？」と錯覚させるほど負の力が強かった。全身からドロドロした何かよくわからない紫色の障気のようなものが見えてしまいそうだ。

「……エランさんですか？」

「そうね、その女。……もう『お姉さん』は無理があるから、年相応の格好をして、香水は減らすべきよ」

「ま、まあそうですね……」

事実、ケイトもアレはどうかと思うときがある。

美人で大人の色気もあり、とても若々しいのだが、もう少し落ち着いていた格好をすべきなのは間違いない。

本人は二十七を自称するが、実際の年齢はわかったものではないし、昔から「受付のお姉さん」だったことを考えると、やはり首を傾げてしまうのだ。

「でも良い人ですよ。私も助けてもらったことあるんですから」

「……私の方があなたを助けることができるわよ」

「……感謝しています」

モモメノの垂れた耳がしょげて更に下を向く。

ああ、眼福だ。  
ちよつと拗ねてしまったのだろうか？

「でもどうにもならないのよね。とにかく入らないと」  
「ええ、そうしましょう」

ケイトがドアを開けて先に入ると、中にはやはり香水乳年増とムサ  
い男達がいた。  
エランはすぐに気付いてくれたようで、迎え入れてくれる。

「ケイトじゃない、ふふ、いらっしやい」  
「あ、どうも……」

ああ、香水だ。  
香水の匂いだ。

「おー！ケイトちゃん！」  
「ケイトー！仕事は見つかったのかー!?」  
「えへ、まあ、なんとか」

男達がケイトに声をかけた。  
それに応じて軽く挨拶をする。  
女性騎士という物珍しさがあつてか、ここで昼間から油を売ってい  
るようなハントマンの間ではわりとアイドル的存在なのである。  
しかし薄情なもので、誰一人としてケイトをギルドに誘おうとはし  
なかつた。

商売に関しては基本的にドライなのが普通のハントマンなのだ。

「……あら？」

ドアの外に佇んでいる「小さなお客さん」にエランは気付いた。

「姫、中へ」

「わかっているわ……わかっているわよ……」

渋々ながらモメノが後を追って入ってくると、男達がクスクスと笑いだした。

昨日もいたバカどもだと、モメノはすぐに理解した。

「おいケイト！仕事つてのはガキの御守りかー！」

「セイウチのケツにド頭突っ込んでおっ死ねよおっさん」

今まで言ったこともない言葉がケイトの口から漏れた。

おおよそ、騎士道を学んだ身とは思えないような内容である。

真顔である。

なかなかの迫力である。

笑い声が止まった。

それでも咄嗟に口から出てしまったので不可抗力である。

誰も責められないのである。

ケイト自信も「あ、言っちゃった」「くらいは後悔したが、それ以上で得体の知れない快感が強かったためにわりとどうでも良くなっ  
た。

「ケイト、良かったのに。ああいうのはほんの少し脳がアレなだけだから、気にしなくて良かったのよ」

「いいえ、姫。私の使命でもありますから」

静まり返った中、エランが引き吊った笑顔で言う。

「そ、それでケイト、今日は何の用かしら？」

「え、ああ、ちょっと人探しなんです」  
「そ、そう、そうなの……」

モメメノはずっとそっぽを向いている。  
どうやら本当に気に入らないようだ。

「……モメメノちゃん、だったわよね？」  
「……そうね、その通りよおばさん……」

障気である。

紫色である。

姫は昨日ここへ来たと言っていたが、おそらく何かあったのだろう。  
エランは紙に何か文字を書くと、それをモメメノの額に貼り付けた。

「……何かしら、これ」  
「剥がしちゃダメよ。意味は後でケイトに聞いてね」

その紙には、「おばさん」と書かれていた。  
ああ、昨日も今日も姫は禁止ワードを使ってしまったのか。  
ケイトはなんとなく理解する。

「それで、どんな人を探しているの？」  
「ええ、サムライのルシエの女の子で、ナムナって名前の子なんです」  
「ナムナ……？ちょっと待って」

すぐ後ろに掛けられているコルクボードを下ろし、そこからお目当てを探す。

ギルド参加希望者用の掲示板であり、そこに顔写真とプロフィールを貼っておけば、どこかのギルドが声をかけてくれる仕組みだ。

もつとも、ケイトは貼ったところでなんの意味もなかったのだが。一方モメノは額の紙がきになってしょうがないのか、既に剥がして「おばさん」の文字を凝視していた。

「ケイト、何かしらこれ」

「それでも言うならせめて忌詞を使え……って事ですね」

「……そ。気を付けるわ」

辿っていたエランの指が止まり、やがて無数の紙の中から一枚を剥がして取り上げた。

「ナムナ・シユマリ……ついさっき来た子じゃない。合ってる？」

手渡されたそれには、あの少女の顔写真が載っていた。

二人は頷き合う。

「はい、その子です」

「それで、このナムナって子がどうしたの？」

「いえ、その、まあ、探していて……。エランさんどこへ行ったかわかりませんか？」

「さあ、エラン『お姉さん』は知らないわね……」

「……ナムナに伝言を残すことはできるのかしら、『お姉さん』」

「うーん、ここはギルドオフィスだから、ちょっと無理かなー」

「……そ。ならいいわ」

モメノはケイトの袖を強く握りしめ、出口へ向かって引っ張る。一刻も早く去りたいのだろう。

「ケイト、長居は不要だわ」

「そうですね。エランさんどうもありがとうございます」

「随分わがままなクライアントね。お仕事頑張って」  
「ありがとう。お姉さん」。またくるわ

モメノの障気がそろそろ本格的に草花を枯らし始めそうな気がしたので、さっさと外に出てドアを閉めた。

新鮮な空気が美味しい。

あの香水の匂いを嗅いでいると、すこし具合が悪くなるのだ。

だが、あそこで酒とタバコをやっているムサイ男達の臭いに比べればどうってことはない。

あの香水は、エランが自分の匂いを保つために必要なのだ。

「……やっぱり『お姉さん』は無理があるわよ」

「本人の前で言わないであげてくださいね」

それにしても、手がかりがなくなってしまった。

次にどこへ行くべきか、全くわからないのだ。

ギルドオフィスには帰ってくるだろうが、きっとモメノは嫌がるだろうし、まずもってこの姫が動かないなんてことは無さそうだ。

「……姫、どうしますか？」

「そうね、少し疲れたわ……」

さっき走っていたのもあって、さすがに姫もお疲れのご様子だ。

少し休むのもいいだろう。

「……お茶にでもしましょうか」

「あら、どこで？」

「すぐ近くですよ」

二人は大通りを横断、徒歩二十秒で隣のクエストオフィスに到着す

る。

「ここはカフェではないわ」

「カフェです」

「ケイト、あなた疲れているのよ」

「疲れているからカフェなんですよ」

ドアを開けると、いつものようにボーアがわりと暇そうにして受付に立っていた。

飲み物と仕事を提供してくれるカフェである。

後者を提供する事は珍しいが。

もう朝の混雑は終わったようだ。

「やあケイト、仕事は順調かい？ ……あれ、モモメノさんも一緒なの？」

「ええ、少し」

「ごきげんようボーア書士官」

「こんにちは。どうです？ 彼女は」

「まあまあかしらね」

昨日の夕方、募集の取り下げ以来、モモメノとボーアは知り合いである。

ケイトを斡旋したことをわりと良く思われたようだ。

「勝手に淹れちゃっていいですか？」

「うん、お湯は沸いているから勝手にやっちゃって」

「姫、コーヒーと紅茶、どちらにします？」

「お茶がいいわね」

「あ、僕のも頼むよ」

ここはクエストオフィス。  
ケイトがお得意様のカフェである。  
もっとも、客はほとんどいないが。

「……で、モメノさんは何をしに？ 彼女の他にもうひとりボディーガードが欲しいとか？」

「当たらずとも遠からず、かしらね」

「なるほど、そうですね」

ボーアも受付から待ち合い用のテーブルへと移り、完璧に仕事をサボってお茶会に参加する様子である。

どうやらこの二人、なかなかウマが合うらしい。

ボーアがモメノに対して、きちんと依頼人に対する対応をしているのが要因の一つだろう。

「どうです？ もう一度募集をかけてみませんか？」

「いいわ。めぼしいのは見つかっているから」

「そうですね、それは残念です」

とても十一歳と公務員とは思えない会話を聞きながら、ケイトは茶葉とお湯の入ったポットとカップを用意する。

粗末だがわざわざソーサーまでは必要ない。

というか、無い。

ハントマンや商人相手に、そんなものは必要ないのだ。

「ボーアさんはどうです？ 依頼とか」

「あーそれがね、最近なんか、ミロスの方からオオシシの大群が湾を渡って来てるらしくてさ」

「湾を？」

「うん」

オオシシはミロス地方の森林地帯を生息地域としており、普通ならばカザンへはこないはずである。  
気性が荒く、力も強いので、ミロスでは度々討伐の対象となる動物だ。

「わざわざあんなところを渡ってくるわけだから、ロラツカ森林あたりで何かあったんじゃないかな」

「はー……」

少し妙である。

こんな事例は今まで聞いたことがない。

森が焼けたか、それともバケモノでも出たのか、どちらしてもぞつとしない。

「まー、それはミロスの騎士団に任せるらしいけど……それに関して、ロラツカ山洞の小門近くでオオシシの群れが商人を襲ってるらしくてね」

そろそろ蒸れただろうか、ポットから紅茶を注ぐ。  
いい匂いだ。

「お、ありがとう。それでクエストが来たんだよ、追っ払えってさ」

「誰か受けたんですか？」

「あー、それがねー……」

淹れられたばかりの紅茶を一口飲んでから、困ったようにポーアは続ける。

「なんか、ついさっきルシェの女の子が来てね、受けちゃったよ、」

たった一人で」

砂糖を多目に入れ、かき混ぜていたモモメノの手が止まる。  
少し、来るのが遅かったか。

「ボーアさんその子、サムライですか!？」

「う、うん……そうだけど。夕方までに帰ってこなかったら救助を要請するよ。死ぬほどではないけど大ケガは避けられないね。身の程知らずだなあ」

「……悠長にお茶会なんてしてる場合じゃなさそうね」

「うん……?」

「ありがとうボーアさん!」

カップを置き、立ち上がる。

目的地が出来た。

すぐにでも向かわなければ。

「ケイト、君が行っても怪我人が増えるだけだよ?」

「その時は三人分の要請をお願いします! お邪魔しました!」

「邪魔したわね」

ドアを乱雑に開け、二人は駆け出す。

「姫、次はどこへ!？」

「まずは宿に鞭を取りに行くわ。あなたも鎧と盾が必要ね。その後、昼食を買ってから現場へ。徒歩でどれくらい?」

「ええと……一時間も歩けば着きます!」

「十分ね」

これから戦いに行くと言うのに、ケイトに疲れや不安は無かった。

目的ができて、それを叶えるべく走るのに精一杯なのもあるが、一番はモモメノを支えたいからであった。  
姫を補佐できることが、何よりの根源となっていた。

## 浪人剣客

ナムナ・シュマリはアイゼン領サイモン村からの出稼ぎハントマンである。

サムライの家系であるが、ルシエ族であるため身分は低く、帯刀をしている他は、暮らしも仕事も農民と変わらなかった。

ナムナはそんなシュマリ家の長女である。

弟妹は数多く、弟が二人、妹が三人である。

学こそ無いが、体力と気概に優れており、殊勝な性格で人当たりも良く、村でもなかなか評判があり、周囲から愛され、お転婆ながらも真っ直ぐに育った。

幼き頃より父と共に畑を耕し、母と共に家庭を支え、良き娘、頼れる姉として、なんとも健気に働いていたのだった。

そんなナムナに支えられ、襤褸は着てても心は錦、貧しいながらも、家族八人、幸せに暮らしていた。

だが、現実是非情である。

子が大きくなれば何かと物足りになると言うのは世の常だ。

下の子達が育つに従い、シュマリ家の家計はだんだんと逼迫してきていた。

二つ下の良くてきた次女も、プレロマで勉強をしたいと言い出し、食べ盛りの弟妹達を養う余裕は既に無くなっていったのだった。

そうなれば、年長者が働かねばと、ナムナは出稼ぎに出ることを決意する。

自らに学がない分、妹にはどうかして良い学校へ通わせて、プレロマに留学させたいのだ。

ハントマンとして稼ぎを得る自信はあった。

何度か、村へ降りてきた熊を父とともに追い払った事があるのだ。

そうして齢十五の成人を機に、父から刀を賜って、ナムナは船で力

ザンへと旅立った。

しかしそう上手くいくものではない。

街へ来て数時間も立たないうちに、有名ギルドのメンバー募集を見付けたまでは良いのだが、選考試験の当日となる翌日、不運にも寝坊をしてしまい、急いで集合場所へと走ったものの、結局間に合わず、試験には参加できなかった。

だが、ただでは転ばない。

日銭を稼ごうと訪れたクエストオフィスに、ちょうど野性動物の駆除依頼が舞い込んで来たのだ。

報酬は15G。

それだけあれば、これからの暮らしはかなり楽になる。

そして実績を作れば、きつと強豪ギルドに参加できるだろう。

迷わずナムナは引き受けたのだが……

「くそっ……！」

ナムナは森の中を逃げ惑っていた。

まさか、ここまで大きな群だとは思っていなかったのだ。

少し群から離れた一頭に少し手を出してしまったがために、数十頭ものオオシシに追われる事となってしまったのである。

一頭ずつならなんて事は無いだろうが、ここまで多いと身が持たない。

まず第一に、サムライの剣術は複数の敵を相手するようにはできていないのだ。

「ううっ……！ 来るな、来るなあーっ！」

逃げながら叫ぶが、そんな言葉がオオシシに伝わるわけがない。

仮に伝わったとしても、仲間を傷付けられたのだ、ただでは済まないだろう。

森の中の道無き道を、藪の中を、木の間を、ひたすら駆ける。追い付かれれば、この身が危ない。

幸い、脚には自信があるし森や山には慣れっこだ。

このまま逃げ続けられれば、きっと奴らも諦めるだろう。

……そう思ってから既に三十分は追いかけて回されている。

世界で一番長い時間を走れる動物は人間だが、そろそろ体力は限界に近づいていた。

「ぐう……」

もういい加減こんな追いかけっことは止めたいが、どうにも向こうはまだまだ続ける気らしい。

どうすれば良いものか。

川に飛び込んでみてはどうか？

いや、奴らは海を渡ってきたと聞いた。

随分泳ぎは達者なだろう。

不本意だが、街へ逃げ帰ってはどうか？

いや、それはどれだけの人に迷惑がかかるかわかったものじゃない。

賠償やら諸々で、仕送りどころでは無くなってしまふ。

「ううう……」

振り替えれば、すぐ後ろには怒りの形相をしたオオシシがいる。

頭から木にぶつかって止まる者もあるが、今度は後ろにいた者が先頭に立って追ってくる。

まさに猪突猛進だ。

「あーもうー！」

朝からあんなに走って何一つ報われていない。  
もうこんなのは御免だ。

ナムナは近くにあった少し大きめの木に登る。  
相手は蹄なのだ、上がってこれまい。

しかしこれで怯むオオシシ達ではない。

今度は頭突きを始めた。

木が揺れ、葉が落ちる。

枝の間に腰かけていたナムナにも大きな振動が伝わる。

「もう帰れよお！痛いだけだろお！」

そんな言葉もお構い無し。

木を囲んで一斉に頭突きをする。

逃げ場の上を選んでしまったがために、逆に詰んでしまった。

「誰かあー！！誰か助けてくれえー！！！」

叫んだところで、誰か来てくれるだろうか？

そんな考えが頭をよぎるが、今はただ、叫ぶしかないのだ。

「頼む！誰か、誰かいないのかあーっ！！！」

もちろん、返事をする者はいない。

いや、案外そうでもない。

下で無数のオオシシ達が唸り声と頭突きで返事をしてきている。  
人気者である。

「マズい……！！！」

オオシシ達の熱烈なファンコールのお陰で、木の揺れ幅がだんだん

と大きくなってきた。  
おそらく根本の地面が緩んできたのだろう。  
このままでは長くは持たない。  
倒れる前に他の木に飛び移るべきだが、どの木に移れば良いものか。  
あの木は……幹が細すぎる。  
あれは……遠すぎる、危険だ。  
向こうのは……良さそうだが、枝が細くて折れてしまう。  
しかしオオシシ達は待ってくれなかった。  
群のなかでも一際大きな者が助走を付けて頭突きをすると、木はゆ  
っくりと傾き、倒れ始めた。

「いやっ……わあああ!!！」

あまりにも突然だったため、何もできずに落ちてしまう。  
なんとか着地には成功したが、高すぎたために足を挫いてしまった。  
激痛が走る。

「つつう……!!！」

倒れ込み、足を押さえる。

どうやらもう、逃げるのは無理なようだ。

顔を上げると、オオシシの大群。

万事休す、ここまでか。

……ナムナがそう思った時、目の前に何かが投げ込まれた。

「耳を塞いで」

決して大きくはないが、凜としてよく響く声が届いた。  
言われた通りに耳を塞ぐと、その何かが連続して破裂し始める。  
オオシシ達は大きな音に驚き、ナムナから距離を置く。

ナムナも思わずたじろぐが、それが爆竹だとわかると、一気に安堵の表情に変わった。

「ケイト、あの子の前に。盾になるのよ」

「しかし……」

「しばらくは何もしてこないわ。その間、ずっと群の長を睨むのよ。常に威圧感を出すの。恐れは隠して、感じ取られるわ」

「は、はい……」

鎧を着込み、盾を持った、騎士姿のケイトが目の前に立つ。

ああ、朝にぶつかったあの人か。

ナムナは理解する。

とすれば……

「ナムナ、足を挫いたのね」

「ア、アンタは……」

「見えるように出して」

モモメノはナムナの足に手を当てると、患部にマナを送り込んだ。すぐに痛みが引いていくのがわかる。すぐにでも歩けそうだ。

「な、なにを……！？」

「嗜みよ。まだ動かないで」

不思議と安心するような優しい声で、モモメノは微笑みながら言う。ああ、助かったのか。

ナムナは一つ大きなため息を吐いた。

「……………」

「ケイト、大丈夫よ。あなたならできるわ」

しかしまだ事態は終息していない。

どうにかこのオオシシ達を追い払わなければならないのだ。

爆竹による混乱も徐々に収まってきており、新たに陣形を組んでこちらを睨んでいる。

おそらく群の長であろう一番大きな者を先頭に、その他が少し距離を取って横一列に並んでいる。

「……必要なのは想像力、そして集中力よ。突っ込んで来た時、その時に盾を作るの」

「……」

「……出来るわ」

しばらく騎士と猪とのにらみ合いが続く。

辺りは異常な静寂と緊張感に包まれ、さえずる鳥さえいない。

さながら、サムライ同士の決闘である。

「……」

やがて痺れを切らしたオオシシが、雄叫びと土煙を上げてケイトへと突っ込んで来た。

「今よ！」

衝突の直前、ケイトの構えた盾の前に光の壁が現れた。

そして、オオシシがそれにぶつかる。

途端に巨体は跳ね返され、後ろに半回転して倒れた。

「出来た……」

マナを使った本人が一番驚いているようだが、実際は驚くどころではないレベルなのがナムナだ。  
なんだ今のは。

足と言い盾と言い、一体彼女らはなんなのだ。  
初めてモメモノの鞭捌きを見たときのケイト程ではないが、軽く恐怖感すら覚えていた。

「よくやったわね、ケイト」

モメモノは労いの言葉をかけるが、あまりそのような余裕はなかった。

既にオオシシ達は、長に続けと突進の準備が完了していた。  
数十の雄叫びが上がる。

「あなたの役目は終わり。下がってなさい」

「姫！」

マナは精神を多大に浪費する。

素人がそう何回も使えるものではない。

それに緊張感が無くなってしまった今では、まず扱えないだろう。

ケイトの制止を振り切り、モメモノは二人の前に立つ。

バネうさをしっかり握ると、鞭を地面叩きつけた。

バシンと大きな音が鳴り、深く地面が抉れる。

爆竹にすら怯えるようなオオシシ達は、モメモノの殺気の前にすくんだ。

所詮は雑食動物。

「お姫さま」の皮を被った捕食者の前では、オオシシ達に為す術は無いのだ。

「……ここではあなたたちの命に一切の価値は無いわ。もし私の『部下』に手を出したら、どうなるかしらね」

逆にケイトとナムナが震え上がってしまうような威圧感のある声で、モメモノはオオシシ達を威嚇する。

言葉の内容が問題ではない。

声によって、本能的な恐怖感を与えるのが目的だ。

様々な声を使い分けるとは、流石は『元』歌姫の卵である、とケイトは思った。

「さあ、あなたたちに与えられた道は二つに一つよ。大人しくここから去るか、さもなければ、死か」

もう一度鞭を強く叩き付けると、横たわっていた長がムクリと起き上がる。

そのまま踵を返すと、群の者達を引き連れて、そのまま森の奥へ消えていった。捕食者の勝利である。

方角的には湾へと向かったことになる。  
きつと元の森へ帰るのだろう。

「はあ……なんとか、ですね」

「あら、もう少し骨があるかと思ったわ」

「そんなだったら私が嫌ですよ……」

何はともあれ、上手くいった。

それに本命の獲物は、すぐ近くで恐怖に震えているのである。

「あ、あの、アタイ、その……」

「ナムナ、足の具合はどうかしら？」



十五歳の少女に、これは少し刺激が強すぎたのだろう。

「ごめんな、ざい、ごめんな、ざい！！」

「どうしようかしらね……」

「ほら泣かないの、もう怖くないから、大丈夫」

早く帰らなければ、ボーアに心配をかけてしまう。

ああ、銀行で両替もしなければ。

モメノにとっては新しい部下だが、ケイトにとっては厄介な荷物が一つ増えたのと変わりなかった。

## 規制のできるエビフライ

「本ツツ当に申し訳なかった！本ツツツ当に！」

「……美味しいわね」

「……久しぶりなので涙出てきました」

「お二方にはものすごく感謝してる！心から！」

「……流石、事件の起こるエビフライね」

「……ええ、身が締まっていて、食感もいいですしね」

「命の恩人だよ！もうアタイはアンタらにならどこへだつてついていくよ！」

「……うるさいわね、ここのエビフライは静かに味わうものよ」

「姫、しっぽ食べないならください」

一通りクエストの完了手続きなどを済ませた三人は、六剣亭地下の酒場でエビフライ定食を食べていた。

受理時にはナムナ一人だったため、今回の報酬は全てナムナの物となった。

しかしそれでは助けられた身として申し訳ないとのことで、とりあえず夕食を奢ると言う事になったのだ。

「何を言ってるの。しっぽは最後に味わうために残しているだけよ」

「そうですか……。ナムナは？しっぽ食べるの？」

「え？あ、あーいや、アタイはその、先に感謝の辞を……」

「至極どうでもいいわ。冷める前に食べなさい」

「ひでえ！」

「しっぽどうなの？」

恩人に諭され、ナムナは仕方なくエビフライを一口。

「……！」

爆発である。

口の中でエビ本来の旨味が爆発したのである。

いや、まさか、ただのエビフライがこんなはずはない。

二口目を頬張る。

「……！！！」

二度目の爆発である。

噛み締めるとサクサクとした衣が良い音を立てて崩れていく。

断面を見ると、衣は薄いがきちんとエビに付いている。

間違いない、これは本物だ。

本物のエビフライだ。

ナムナはその味の虜となり、無我夢中で口へと運ぶ。

エビフライだけではない。

付け合わせのスパゲティもそこらの物とは比べ物にならない。

一切の妥協を許さなかった料理人の思いがこれを産み出したのだ。

もはやナムナのグラウンド・ゼロは感動と言う名のクレーターだらけである。

「それで、ナムナ」

「姫、もう少し待ってあげましょう」

「……そうね」

やがて、すぐにナムナはエビフライ定食を完食した。

もちろんしつぽも残さず平らげた。

食べ終わったナムナは半分口を開きながら幸せそうな表情で恍惚と呆けている。

若冠十五の田舎娘にはあまりにも刺激が強すぎたようだ。

「……ナムナ、話をしてもいいかしら？」

「あー……」

「今はさすがに無理ですよ。あ、カリユさん、ハチミツウーロン三つお願いします」

ケイトは少し離れたところで両手いっぱい料理を持ったウェイトレスに追加注文をする。

看板娘のカリユと言うルシェで、その美貌はハントマンの間でも定評がある。

しばらくナムナの放心状態は続きそうだし、すこし長くなりそうだ。

「ごめんねケイトちゃん、ちょっと今忙しいから遅くなるかも……」

「あ、いえ、急がなくていいですから、前見て、前」

それにしても、この店は客の数に対して店員が少なすぎる。

よく入るだけに、ウェイトレスがカリユ一人では間に合わないのではないかとよくケイトは不安になるのだ。

「……恐ろしいわね、ここのエビフライと言う名の麻薬」

「あー……」

「見なさいケイト、彼女は完全にどこか遠いところへ旅立ってしまったわ」

「しばらくしたら戻ってきますよ、大丈夫です」

しかしまあ、なんとも奇特な二人目を選んだものだ。

昨日今日ハントマンになったばかりの、素性も実力もわからない少女を雇おうとは、普通思わない。

それに関しては、まあ、ケイト自身が雇われた事にかんがりの不自然さを感じているので、もはや考えるのが野暮だろう。

「……どうして、彼女を選んだのですか？」  
「なに？」

「いえ、そのトンドるのですよ」

確かに、一頭とは言えオオシシを仕留めたと言つのはなかなかの腕だ。

それに長時間森の中を逃げ続ける事のできる脚力は一流のハントマンも顔負けだ。

ケイトに同じ芸当を求めるのはまず無理だろう。

しかしどうにも、この口を半分開いたまま頭の中のお花畑を「ウフフフ」と笑いながら駆けている少女がその様な腕を持っているとは想像も付かない。

偶然なのかもしれないが、どうしてこんな人材を見つけられたのがケイトにとっては不思議でたまらないのだ。

「……そうね、伝えるのが難しいかしら」

「勘、ですか？」

「違うわ。……いえ、そうじゃないわ。違つと言えば嘘になるわね」

思わず「はあ？」と首を傾げる。

「どついつ意味です？」

「そうね……」

モモメノは俯き、考え込む。

確かに感覚的な物事は伝えにくいだろう。

そのまましばらくジツと自分の手を見ているが、どうも答えが出てくるようには見えない。

「お待たせしましたー、ハチミツウーロン三つです」

「あ、どうも」

「ケイトちゃん、ごゆっくりー」

そうこうしている間に、追加のドリンクをカリユが持ってきた。

このハチミツウーロンと言うモノ、不思議な香りで女性客からの人気が高いらしい。

「あっ……………」

モメノが何かに気付いたように、グラスを見て反応する。

なにかわかりやすい例えが出たらしい。

「……………そうね、ケイト。あなたの手を、そのグラスに近付けてみて」

「えっ……………あ、はい」

とりあえず、その通り手を近付けてみる。

手のひらに冷たい空気が触れ、少し心地よい。

「そうしたとき、あなたは何を感じるかしら？」

「えっと……………冷気、ですね」

「そう、それよ」

ストローで一口飲み、「あら、存外美味しいのね」と呟いてから続けた。

「……………そのような感じで、マナがわかるのよ」

「……………マナですか？」

「ええ、そうね。熱いとか、冷たいとかでは無いけれど。大きさや、強さ、どんな感情を帯びているか……………。歌姫育成カリキュラムの賜

物が、生来のものはわからないけれどね」

「マナ……」

確かに、今日盾を作った時に、なんだか作ったそれから不思議な力を感じた。

圧迫感のようなそれは、オオシシの迫力からくるものだとかケイトは思っていたが、どうやら違うのかもしれない。

「ナムナが走ってくる時、走っていく時、それから、逃げている時。彼女はマナを使っていたわ」

「……え？」

「脚に作用させて、力を得ていたわ。もっとも、自覚はしていないだろうし、意識して使うことも不可能だろうけど」

所謂、天才と言うものなのだろうか。

まあ、確かに、この口を半分開いたまま頭の中のお花畑（花言葉・危険な快楽）を「捕まえてご覧なさい」と笑いながらエビフライと追い駆けっこをしている少女が、姫のように教育を受けてきたとは思えない。

「……感情が昂った時や、極度の緊張状態に陥った時、人は知らず知らずのうちにマナを放っているわ」

「それじゃあ、ナムナは急いでいたから……」

「そうね。追い詰められると思いがけない力を発揮する事であるじゃない？自己防衛のために本能的にマナを使っているのよ。彼女は少し、それが出やすい体質なのかもしれないわね……」

ああ、それなら納得が行く。

見るからに単純そうで、あまり細かいことを考えてなさそうだ。火事場の馬鹿力というやつを存分に発揮しそうな感じである。

「……それで、そのマナを意識して操るのが、私とあなた。盾を作ったとき、あなたは自分の周囲のマナを面に集中させたわ」

「知らないうちに、そんなことを……？」

「ええ、そうね。あのオオシシを前にすれば、きつとあなたの本能が働くと思ったのよ。目論見は正解だったわ」

「へええ……」

しかし、なんとも実践的な教育方法だ。

理屈を並べられるよりははるかにわかりやすいが、危険に晒されるのは如何なものか。

だが、いきなり「まずは切羽詰まった状態になれ」と言われて切羽詰まる人間などいない。

感覚の物事を教えるにはそれを実際に味わわせるしかないのだ。なんだかんだ言っつて、この姫は自分より何枚か上手なのだ。

「しかし姫、あなたは平然としながら扱えますよね？」

「ああ、アレね。そうね……」

アレとは恐らく、木を斬り倒した時の話だろう。

ストローで少し下に溜まっているハチミツをかき混ぜながら、モモメノは言う。

「あなたはまだできないけれど、私くらい扱いに慣れたら、いちいち状況を作る必要は無いのよ」

「ええ……」

「慣れよ。あなたもそのうちできるようになるわ」

とは言うが、不安である。

次もできるかはわからないし、ケイト自身、あまりハッキリとした

現実感もないのだ。

「……でも、私がオオシシに対して語りかけたとき。アレは実際に感情を昂らせていたわ」

「堂々と立ち振る舞っているように見えたが……」

「見かけはね。でもマナは騙せないのよ。野生動物は、ほかの動物が出す不安とか恐れとか言った感情を帯びたマナを感じ取れるの」

「姫と同じようにですか？」

「ええ、恐らくね」

野生の勘と言うモノか。

確かに、自分を狙っている相手の殺気を読み取れば、生存に繋がる可能性が高くなる。

弱肉強食の世界で生きるには必須だろう。

「あの時、私は一帯に威嚇の感情を張り詰めたの。二人守りながら、あの数を相手にするのは私でも無理だとわかったから。でもそれだと、感付かれて突進されて終わり……」

「では、なぜ？」

「自己暗示、ね……」

「えっ……じゃああの言葉は……」

オオシシに向かって放ったあの言葉。

アレが威嚇だと思っていたが、本当は自己暗示だったのか。

「あら、会話でもしていると思っていたの？」

「いえ、流石にないですけど……」

「……まあ、アレは自分自身に語りかけているということ。もっともらしい御託を並べ、心を奮い立たせるの。あなたはもう気付いていると思うけど、時折私が声色を変えるのもその一つよ」

「……では、私やナムナは、本能的にそれを感じ取っていたと?」  
「そうね。人間相手だと言葉が通じるし、鞭を使わなくても操れるから、楽だわ」

そう言いながら、モメモノは不敵に笑む。

並々ならぬ恐怖を覚えたが、これはきつと、そんなマナを張り詰めて様子を見ているのだろう。

「……さて、そろそろこの子に戻ってきて欲しいわね」

ため息を吐きながら、相変わらずこの口を半分開いたままの少女を見て言う。

お花畑でのエビフライとの追い駆けっこは終了したようだ。

そろそろ大丈夫だろう。

「ナムナ、話があるわ」

「ん……ああ、なんの話だ?」

よかった、ちゃんと帰ってきた。

トリップのできるエビフライとして話題になってしまったら国が規制してしまうだろう。

「そうね、雇用についての話よ。あなたを部下にすると決めたからには、不安の無いようにしておきたいのよ」

「なーに、アンタらのためならアタイはどんなに安月給でも大丈夫だよ」

ものすごいお人好しっぷりである。

ああ、姫が捕まえてよかった。

街に放してしまったら、この子はすぐに悪人に騙されてしまいそう

だ。  
もっとも、この姫が半分悪どいのだが。

「あなたの能力を正當に評価し、できるだけ高く支払うわ。……そうね、寝食は経費で負担するから、10Gでどうかしら？」

「そ、そんなに!？」

「姫!」

それは酷すぎる。

自分よりも遙かに腕の立つ者に対して、1/3しか支払わないのは明らかに不当だ。

しかも彼女は地方出身で、モノの価値が把握できていない。

寝食の保障はされると言えど、彼女だってお年頃だし、いろいろ欲しいものがあるだろう。

「ケイト、あなたには関係ないわ。口を出さないで」

「しかし……」

「それだけあれば家族の暮らしが楽になる……!」

「あら、ナムナあなた、仕送りが必要なの？」

「ああ、出稼ぎだからな」

「そ。それなら扶養手当が必要ね。20G上乗せで30G。10

Gはあなた自身のために使いなさい」

「……本当に、本当にか!？」

「ええ」

「……」

呆気を取られる。

いや、流石といったところか。

ナムナは指を使って、10Gあればなにが買えるかを夢中で考えている。

「……姫、はじめからこのつもりだったでしょう」

「当たり前よ。この方が都合がいいもの」

「はあ……」

騙しているには違いないが、何がどうと聞かれたら難しい。

人の上に立つからには、こう言ったことも必要なのかもしれぬ。

「ナムナ、これで文句は無いかしら？」

「ああ、はじめから文句は無いよ！」

何はともあれ、本人が満足そうなのでこれはこれで良かった。

「あ、ところで……」

「あら、どうしたの？」

「いやその……『姫』って、アタイも呼ぶべきなのかい？」

ああ、そういえばナムナにはどうして「姫」なのかわからないのだった。

「……ああ、そんなこと。ケイトがちょっとおかしな子なだけだから、別にどう呼んでも構わないわ」

「酷っ！」

しかし反論はできない。

なぜならケイト自身、変態であることを自覚しているのだから。

「ええと……じゃあ、『ボス』でいいか？」

「……」

「……」

こっちも負けず劣らず、なかなか強烈である。

「……ダメか？」

「あ、いや、いいんじゃない？かな？」

「……どうして『ボス』なのかしら？」

「なんか都会って感じがするんだよ。ほら、アタイが住んでたのって田舎だから、『親分子分』の関係なんだ……」

「ボス」で都会的ときた。

どの辺りで都会を思い浮かべるのか訊きたい気持ちは山々だが、まあ、それは酷だろう。

「……まあ、いいわ。好きに呼びなさい」

「おう！よろしくお願いするよ、ボス！」

そういえば、今朝ギルドオフィスで「御守り」と馬鹿にされたっけ。案外、当たっているかもしれない。

なんだか見ているとこちらが不安になってくる。

しばらく私が「姉」として面倒を見なければならぬようだ。

明るい笑顔を振り撒く目の前のその「妹」を見ながら、ケイトはこの先のことに思いやられていた。

## 鈴と姉と姐

部屋に戻りシャワーを浴びると、モメノはすぐに眠りについてしまった。

あれだけ走れば無理もない。

「はー、ぐっすりだなー……」

バナうさを抱いたまま眠る姫のプニプニチークをつつきながらナムナは言う。

考えることは同じか。

ああ、私もしたいのに。

「あー……精肉コーナーに陳列されるから、やめてあげて」

「お？」

「だいぶ疲れてるから」

「ああ、そうだな……」

つつんしていた手を止め、肩まで毛布をかける。

案外、面倒見は良いのかも知れない。

家族のためにこの歳で出稼ぎに来るのだから、もともとそのような性格なのか。

「それにしてもなー……こんなちっさい女の子が、ギルド作るうとするんだもんな。流石、都会だよ」

「都会でも流石にこんな例は珍しいけど……」

「そうかー……」

ぴっちりとしたあの中着をたたみながら、ナムナは少し驚いたよう

に言う。

ちなみにあの中着、金属製の小さな鎖が編み込まれているようで、防刃性能はそこらの鎧の比じゃないらしい。

「なんにしてもたいしたもんだよ。まだ十一歳だろう？」

「そうよね。やっぱりいろいろ、わかると思うけど、育ちが普通じゃないから……」

「ああ、随分いいとこの嬢さんみたいだな。ま、ぬいぐるみが大好きなのは六つ下の妹と変わらないよ」

「あら、妹いるの？」

「ああ、妹三人、弟二人。みんな可愛いんだよ。なむ姉、なむ姉つてなあ」

ナムナの顔が綻ぶ。

ああ、弟妹が多いから、食い扶持をどうにかしなければならなかったのか。

自らこの道を選んだとすれば、行動力と決断力は見上げたものである。

ただ単に考え無しに行動してしまうだけかも知れないが、そのひたむきさはケイトも見習うべきところが多い。

「でなあ、アタイの家あんまり広くないから、妹たちとアタイは同じ部屋で寝るんだけど、そのぬいぐるみ大好きな妹、ああヒリイって名前なんだけどな、そのヒリイが……」

目を輝かせて、妹の可愛らしさについてナムナは語る。

しかしケイトはそんな話を聞けるような状態ではなかった。なぜなら、寝間着に着替えたナムナが非常に魅力的な少女だと気付いてしまったから。

「つてな感じで、もー可愛いのかなのでなあ、『姉ちゃんいるから大丈夫だぞー』つて頭撫でてやったら、すーぐ泣き止んで、本当、アイツは泣き虫で……」

なんて綺麗な肢体なのだ。

全体的に無駄がなく、締まっている。

スラツと伸びた白い脚などは、もはや「惱殺」で片付けることのできるようなモノではない。

他の部分も申し分ないつくりだが、特筆すべきは、その胸だろう。

あの中着を着ていた時からわかつていたが、なんなのだ、あの凹凸の少ない胸は。

姫とも大差ないようなそれは、ケイトの脳髓を直接的に刺激する。

なんて素晴らしいのだろう。

なんて魅力的なのだろう。

なんて可愛らしいのだろう。

なんて扇情的なのだろう。

「でもやっぱり弟たちも性別が違うだろう？お年頃だからか、変に恥ずかしがつてなあ、別にどうとも思わないのに、距離感置かれて……」

下ろした髪も、その大人びた雰囲気か逆に胸のあたりの貧相さを強調する。

一欠片の屈託の無い笑顔も、さらに幼さを増幅させる。

ああ、綺麗だ。

可愛らしい。

思わず庇護欲に駆られてしまう。

できることなら、私が守ってあげたい。

「でもまあ、みんな仲良いし、良い子だからなあ、喧嘩はあんまり

しないんだよ、もう、おかしいんじゃないかってくらい仲良くて、アタイが……」

可愛い。

純粹に全てが可愛い。

もっと近くで見たい。

触れたい。

「……」

「あ、あの……」

「……！」

「どした……？」

「い、いや、うん、なんでもない、なんでもないの」

なんて事だ！

これはあと少しで実際に唇で触れてしまう所だったではないか！

それによく考えたら、いや、考えなくても私は変態ではないか！

長い騎士学校生活のお陰でいまだに麻痺しているのか！

そうだ、そうに違いない！

私は騎士と成るべく、「可愛い私」を捨てたが故に、その反動とし

て可愛い者を求めてしまうのだ！

そしてその可愛い者をどうにか吸収し、自分のモノにしてしま

いたいと願ってしまうのだ！

それ故この感情は変態的なモノではなく、私が騎士であるために必

要なのだ！

あ、そうか、それなら問題ないじゃん！

可愛い少女を更に求めてよし！

「隣、座るか？」

「え、あ、いや、大丈夫、大丈夫」

でも無理。

やっぱり無理。

ケイトには良心が痛むのである。

と言つか、越えてはいけない一線が実際に見えるほど変態として冴えてきていた。

そこはやはり、騎士としての心得か。

「あ、それでな、妹たちが、出てくるときにこんなものくれたんだよ」

雑囊の中を漁り、何かを探すナムナ。

数が多いからかも知れないがここまで続けられると親バカならぬ姉バカとしか言い様がない。

やがて雑囊から出てきたのは、大きな黄金色の鈴であった。

「鈴？でもどうして？」

「熊避けに……って。アタイの故郷、よく熊が出るから、出掛けるときは音が鳴るものを身に付けるんだよ」

「へええ……」

「でも、カザンに熊なんて出ないからねえ。姉ちゃんの身を案じてくれるのは嬉しいけど、少ない小遣い、自分らのために使えばいいのに……」

ナムナは少し困った表情で微笑む。

どうやら弟妹たちからの信頼は篤かったようだ。

随分良いお姉ちゃんだったようだ。

「どんな音、鳴るの？」

「そりゃもう、本当に良い音さね。なんだったか、『ろなむ』とか

言う素材らしいよ」

軽く振ると、カランと乾いた音が鳴った。  
綺麗な音だ。

心の中まで染み込んで、解きほぐすような感覚に陥る。  
なんだか、姫の声のようだとケイトには思えた。

「……ん」

「あれ、起こしちゃったかい？」

しかし寝ている本人には、眠りを妨げる邪魔な音でしかない。  
すこし離れたところで、モモメノがうなされる。

「ケイト……」

「どうしました、姫」

「ここは、カザンよね……？」

少しおかしい質問に、ケイトはなんとなく意味を考える。  
大方、マレアイアの頃の夢でも見ていたところに、鈴の音の拍子で  
目覚めてしまったのだろう。

「……ええ、カザンです、安心してください」

「……そうなの、なら、いいわ」

そう呟いてモモメノは、頭まで布団をすっぽり被ってしまった。  
そしてまた、安らかに寝息を立てはじめた。

「どうしたんだ、家出かなにかなのか……？」

「違うけど……本人にとつては、それに近いかもね」

「ほー……あんまり、帰りたくないのかねえ……」

あまり感心しないように呟きながら、ナムナは極力音を立てないようにして鈴をしまう。

今度は櫛を出して、髪を梳くようだ。

髪を。

あの髪を。

「……………ねー、ナムナ」

「うん？どした？」

「……………私が梳こうか？」

あの髪を、梳きたい。

金髪という明るい色でありながら、嫉妬しそうなほどまっすぐなあの髪を。

「いや、いや、いきなり、どした」

「あ、嫌なら、嫌なら別にいいの」

「別に嫌じゃあ無いんだけどねえ……………」

髪を前に持ってきて、手櫛を入れながらナムナは言葉を詰まらせる。すこし恥ずかしがるような、困っているようなその表情が、また可愛らしい。

多少強引に押すべきか、それとも少し引いて自らの口で言わせるべきか、迷うのである。

ああ、早く梳きたい。

「……………少し傷んでもかもしれないから、優しくお願いするよ」

ベッドの腰かけている部分の隣一人分のスペースをぽふぽふと叩いている。

ああ、行くよ、今行くよ。  
梳いてあげるよ、堪能してあげるよ。  
もはやケイトは変態を通り越して狼となっていた。

「あら、言っほど傷んでないけど……」

「そうか……？」

「うん、綺麗」

想像していたより、ずつとなめらかだ。

もう少し櫛が引つ掛かると思ったが、なかなか良く通る。

流石に姫には及ばないが、それでもかなり上等だ。

アイゼン人は男女問わず髪の毛を大事にするので、それもあるかもしれない。

誰かにしてもらっていたのだろうか。

「向こうでは、妹たちにしてもらったの？」

「いや、自分だね。妹たちにはアタイがしてあげてたよ」

「ふーん……」

ああ、それじゃあつまり今私は「お姉ちゃん」なのか。

お姉ちゃん、なんて素敵な響きだろう。

けー姉もいいかな、けー姉。

けー姉に髪の毛梳いてほしいよ。

うん、いいよナムナ。

けー姉なんだか眠れないよ。

こっちのベッドで一緒に寝ていいよ、ナムナ。

素敵である。

とんでもなく素敵である。

ケイトはもはや、「騎士」だけでなくその他にも興味を持つ雑食性を手に入れつつあった。

「……あ、そうだ」  
「なに？」

「いや、アンタのこと、どう呼ぶべきか……って」

けー姉！

けー姉一択！

「けー……」

「あ？」

「あ、いや、何でもない。ケイトでいいよ」

恐ろしい。

なんとも恐ろしい。

心の叫びがそのまま出てしまいそうになった。  
ダメだ、現実と妄想を混ぜてはいけない。

「でも、アタイはアンタに助けられた身だろう？それじゃあ申し訳  
ないよ」

「いいのいいの、実際は姫が全部やってくれたみたいなものだし」  
「うー……しかし、なあ……」

ああ、お願い、そんな表情をしないで。  
そんな顔されると、断るに断れない。

「だったら、好きに呼んでいいよ」  
「いいのかい？」

「うん、あんまり気にしないし」

「うーん、それじゃあ……」

一体どんな呼び名が付けられるのだろうか。

気にしないなどと口走ったが、わりと興味はある。

「ボス」の前例がある分、少し心配ではあるが。

「……じゃあ、『姐さん』って呼ぶことにするよ」

ナムナはいろいろな意味で期待を裏切らなかつた。

ああ、姉さんだなんて、素敵すぎる。

「よろしくな、『姐さん』」

「よろしく、ナムナ」

ああ、手に入れてしまった。

私には姐がありながら、妹まで手に入れてしまった。

しかし、私が守ることによって二人を求めることができるのなら、それは後ろめたいものではなくむしろ誇るべきだろう。

私は守りたい。

可愛らしい者を守りたい。

騎士だけでなく姉（姐）にもなったケイトが、更に守備範囲を拡げていくのは、まだまだ先のお話である。

## 孤高狡狐

ナムナが加わってから、一週間ほどが経った。

「三人目を探す」とのこと、ケイトがお上りさん二人を連れてカザンのいろいろな場所を回っていたのだが、どうやらそう簡単には見付からないらしい。

と言うか、半ば観光ツアーになっていた。

しかしながら、ナムナは事あるごとに「流石都会だ」と感銘を受けてくれるし、モメモノも満更ではないようだったので、コンダクタもわりと楽しんでいた。

昼は外を見て回り、夜は六剣亭地下の酒場で将来構想についてモメモノが講義するのが恒例となっていた。

「それで、その買い取った物件をギルドハウスに改装して、その街での拠点とするの」

「いろんな街にか?」「ええ。世界的に名が知れたら、カザンに留まっていることはできないもの」

「でもギルドハウスって、そんな簡単に建てられる物じゃないだろう?宿を使った方が良いんじゃないのかい?」

「そうね。初期投資は馬鹿にならないわ。でもランニングコストの方が重要なのよ」

「ああ……?」

「姫、もう少し言葉を易しくしてあげてください」

もつとも、受講者の一人がついてこれないため、あまり進まないのだが。

「宿にずっと住み続けるのと、家を持つのだったら、どちらが安上がりか……って事よ」

「あー、なるほどねえ。だけど、あちこちに建てたら宿の方が安くなるんじゃないかい？」

「……ケイト、チエーンとロイヤリティ、フランチャイズについては、昨日説明したわよね」

「ええ」

「……分かりやすく説明してあげて」

そう言つて、モモメノは匙を投げる。

どうにもこの二人は両極端過ぎて噛み合わないところがあるようだ。

「えつと……姫の命令で動くのは私たちだけじゃなくて、他の小さいギルドとか、ナムナみたいな出稼ぎハントマンとか、そういう人を集めて契約するの。ちよつとした会社みたいな感じだね」

「お？」

「そして、みんなでクエストを分担する。個人単位でできるものとか、ギルドがいくつも協力しないと出来ないものとか。そのクエストでもらった報酬は、一旦会社のものになるの。それから、給料みたいなものとして支払うんだけど、これだけだと別に勝手にやつてればいいでしょ？」

「ああ、普通にギルドでやった方が面倒くさくないな」

「だから、会社の方が生活を保障するの。住む場所とか、武器とか、食べるものとか、必要最低限のお金とか。保障する分、報酬の一部をもらったり、会費みたいなのを支払つてもらったり……それで保障を賄つて、会社を動かしていく。もちろん会社は巨大になるだろうから、情報とか、クエストの依頼だつて直接多く飛び込んでくるでしょ？会社の一員だつたら仕事にもあぶれないし、保障もあるから安心だし、どんどん参加者が増える。そしたら、会社にお金も集まる。……理解できた？」

長々と説明してナムナの方を見ると、ものすごく申し訳なさそうな

顔でこちらを見つめていた。

「あー……」

「あ、いや、無理しなくていいから、ゆっくり覚えればいいから」「そうか……」

なかなか、天才少女と普通（より少しだけ頭の弱い）の少女の間のギャップを取り持つのは難しい。

モメノはそこまで気にしていない様子だが、ナムナの方は若干負い目を感じているようで、なんとかついて来ようとするのだが、その結果はあまり芳しくない。

「……まあいいわ。ナムナ、あなたは覚えなくても特に問題は無いから」

「うう、そうか……」

「原理なんて知らなくても、結果がわかれば問題ないのよ。私の補佐はケイトで十分だから」

「あ、あ、あ……」

「……姫、逆効果になってます」

一応、気に掛けてくれているのか、モメノもフォローするのだが、実際のところ上手くいってはいない。

特に何も意識していないときのモメノの声や振る舞いは非常に無愛想なので、時おりドライで辛辣な印象を受けてしまう。

これがまた、ナムナの心に傷を付けてしまうのだ。

「あー……ナムナ？姫が言ってるのは、ナムナはナムナにできることがあるから、それをしなさい……って事だから、適材適所、うん」

「でも、でもアタイ役に立って……」

「ほらほら泣かない、大丈夫だから」

今まで弟妹たちから慕われる立場にいたためか、環境が変わってどうにも情緒不安定らしい。

いや、もともとの性格なのか。

なんにせよ、そんなナムナの面倒を見るのがケイトの仕事になっていた。

「うー……姐さん……」

「まだナムナの仕事は始まってないだけで、これから役に立てるか、大丈夫」

ああ、泣き顔も可愛い。

なんて考えている場合ではない。

「あれ、ケイトちゃん今日もその子泣き上戸なの？」

「あーいえ、カリユさん、アルコール頼んでないです」

世話焼きなウェイトレス（酔っぱらい対応のプロ）が嗅ぎ付けてくるから、泣き止んで欲しかったのに。

夕食時を過ぎると酒場も少し落ち着くので、よくカリユは客と世間話をしに来るのだ。

今下手に誰かが口を挟むのはさらにナムナの心に傷を付ける可能性があるから危険だ。

姫もそれをわかっていているようで、しばらく黙っている。

ちなみにアイゼンの法律だと十八歳未満の飲酒は罰せられるらしいので、ナムナきつと飲んだこともないのだろう。

「そっか……なにか注文あるかな？」

「ハチミツウーロン三つお願いします」

「うん、今日も同じのだね。ちょっと待ってて」

意外とカリユは空気をブチ壊してしまうことがある。

しかし本人は気付いていないようだし、もともとドジが多いうえ、彼女がいなければこの店のエビフライは存在しなかった（まかないをメニュー化した）とも言われているので、あまり憎めないのだが、やはり今回はあまり近づけない方がいいだろう。

「姐さん、アタイは必要なのかい……？」

「何言ってるの、姫がナムナを必要としたんだから、胸を張っていいよ」

案外、ナムナに姉貴分として慕われているようなので、ケイトもそこまで面倒だとは思っていない。  
むしろ幸福である。

「お姫さま」と「妹」を同時に支えなければならぬシーソーゲームが楽しすぎるのである。

ああ、そろそろ姫が退屈し始めてるな。

どこかそっぽを向いちゃってる。

あんまりナムナにはかり構いすぎると、拗ねちゃうかな。

ケイト、あなたは一体だれのものなのかしら？

大丈夫ですよ、私の全ては姫のものです。

けー姉、アタイはどうなっちゃうんだい？

大丈夫だよ、私がちやんと面倒見てあげる。

ケイト、眠れないわ。

一緒にベッドで寝ましようか。

けー姉、眠れないよ。

一緒にベッドで寝よっか。

ああ、どうしよう！

私は一人なのだった！

私たちはミロスの国民ではないから、平等になんてできない！  
いや、それでも私は二人を平等に愛すべきなのだ！

そうだ！右腕に姫を、左腕にナムナを抱き付かせればいいのだ！  
ベッドが狭くなるが、密着すれば何ら問題は無い！

しかし問題は「おやすみのちゅー」だ！

どちらを先にするかで迷ってしまう！

この場合は立場的に強い姫が先か！

それとも姫に譲ってしまうであろうナムナが先か！

ああ！いつそのこと二人いっぺんに私の頬にちゅーをさせる手もあるではないか！

私は天才か！

もはやケイトは天才とかそういったレベルではなくなってきた。  
魅力的な少女二人に囲まれていれば、まあ仕方ない事だろう。  
むしろ実際には手を出さないことに拍手を送るべきかもしれない。

「おまちどおさま、ハチミツウーロン三つです」

「いつもの」を持ってカリユがやって来る。

「ウェイトレス、そこ邪魔だわ」

「えっ……？」

モモメノが見ていた何かを遮ったらしく、カリユはグラスを置くと  
少し退ける。

ああ、何かに気付いたからそっぽを向いていたのか。

「何を見ているのですか？」

「……あそこよ、カウンターのルシェ」

目線の先には、白髪の若い女性が座っていた。

小柄だが、歳はケイトと同じくらいか。

何やらゆったりとした外套を着ていて、腰には綺麗なオーブを付けている。

見たことの無い格好だ。

「アレは……？」

「メイジね。マナの専門家よ。プレロマで学士課程を修めれば、腰のオーブが与えられるの」

「マナってなんだ……？」

「ナムナ、あなたは知らなくても問題ないわ」

「うう……」

「あ、いや、姫が言いたいのは、ナムナにとっては大して重要じゃないって事だから、うん」

女性はマスター（エビフライ創造神）に何かを注文する。

紅潮した顔を見るに、既に何杯か呑んでいるようだ。

「ウエイトレス、彼女はよく来るのかしら？」

「ううん、初めて……だと思う」

「……そ。ケイト、ナムナ、アレを捕まえるわ」

「えっ……」

あまりにも唐突過ぎる。

いや、ナムナの時もそうだったか。

マナの専門家となれば、モモメノが食い付くのは当たり前か。

「……どうしますか？」

「まずは様子見ね。カザンにいるからハントマンだとは限らないでしょう？」

注文された酒がグラスに注がれて出てきた。

どうやらストリートウイスキーらしい。

彼女は腰のオーブに手を掛けると、唐突にグラスの中に落とした。突飛な行動に、店内は静まり返る。

グラスの中ではウイスキーとオーブが不自然に光っている。マナだろうか。

一体何をしているのか。

隣の常連っばい酔っぱらい客が堪らず怒号をかけた。

「おいねーちゃん、ここの酒に変なモン入れるとはいい度胸じゃねえか！」

しかし彼女は一瞥しただけで、全く怯える様子もない。

「人の呑み方に口出すなんて、モグリだね」

「ああん！？誰がモグリだよオイ！」

「キミ」

「……この店で出されるモンをバカにする奴ア、女だからって容赦しねえぞ？」

「やめておけ」

「……止めるなマスター」

マズい。

常連客の方は歴戦のハントマンのようで、体格もかなりいい。

対する彼女は、どう見てもひ弱としか取れない。

「姫……」

「面白いじゃない、なかなか……」

ああ、ダメだ。

面白がっている。

「へー、容赦せずに殴れば？」

「……こんのニア！」

男が拳を繰り出した。

ケイトは思わず目を瞑る。

しかし打撃音は聞こえてこない。

恐る恐る目を開けると、男の拳は見えない何かによって途中で止められていた。何故だか、向こう側が揺らいで見える。

「クツ……！」

「……これだから酔っぱらいは。不快だよ」

彼女はニヤリと怪しく口角を上げると、ツンと男の拳を指で一押し。突風か何かに煽られたように、男は仰け反り、椅子から転がり落ちた。

「やるわね……」

「すげえ……！今の、今のなんだ！？」

「圧縮空気の層を作ったのよ。それで拳を受け止めたんだわ」

「ああ……？」

「ナムナはわからなくても問題ないわ」

「あ、いや、姫が言いたいのは、その……」

スペシャリストのマナの扱いを目の当たりにした三人は、全員が目を輝かせる。

モモメノなどは、今まで無いほどに興味津々の様子だ。

しかし突き飛ばされた本人は、何が起こったのかさっぱりわからない様子で彼女を見た。

「なっ……!?!」

「……だからやめておけと言っただけだよマスター」

「だ、だけどよマスター」

「モグリはお前だよ。ストンロック、知らないのか？西大陸じゃポピュラーな飲み方だ。好きな鉱石を氷代わりに酒の中に入れるんだよ」

「マスターは話ができるね」

「すまんな嬢さん。で、あんたは何の石を？」

「……ロナム硝石」

ロナム？

聞き慣れないけど、それって確か……

「アタイの鈴の……」

ナムナが反応する。

こんな人が持っているんだからさぞかしすごいに違いないのだ。基本的にナムナの思考パターンはそんなものである。

「姫、ロナムとは……?」

「そうね、特殊な鉱石よ。マレイアやプレロマ周辺で採掘されるの。……マナを溜め込む性質を持っていて、引き出したり、音を増幅させたりできるわ」

「え?あ?」

「とにかくすごいってことよ、ナムナ」

彼女はグラスの中身をまるでアルコールなど入っていないかのように一気に傾ける。

なんて呑みっぷりだ。

呑み終わった彼女はグラスからオーブを取り出し、シャツの袖で乱雑に拭くと、元通り腰につけ直した。

「マスター、迷惑料含めていくらになんの？」

「30Sだ」

「あいあい、丁度ね」

「毎度」

支払いをして席を立つ。

男の方は腰が抜けたのか、相変わらず床にへたりこんでいた。

「……追うわ。ケイト、ナムナ、支払いはお願い」

「姫！」

呆気にとられているナムナと、制止するケイトを残し、モモメノは酒場を抜ける。

盾のケイトと剣のナムナは手に入れたのだ。

今度は頭脳をと思っていたが、これはまたと無いチャンスだ。

なにせ獲物はプレロマの学士。

そして戦力にも成り得る実力者だ。

階段を駆け上がり、入口に目を遣る。

いた。

今まさに出ていこうとしている。

いや、外の方が都合がいい。

幸い、鞭はバネうさに付けたままだ。

いざとなればこれで平和的解決が望める。

モモメノは六剣亭の外へ。

すぐ離れたところに、彼女が歩いていた。

「あなた、待ちなさい」

ダメ元だが、声を作ってみる。

きっと相手はマナを感じ取るだろう。

ケイトやナムナと違って、ほとんど意味は無い。

「……さつきからこそそして、どーしたの？」

立ち止まり、振り向かずに彼女は答えた。

酒場にいた時から気付かれていたか。

まあ、どうでもいい。

今はアレをどう落とすかだけだ。

「そうね、見事なマナの扱いだっただわ」

「そりゃどーもね」

「あなたが欲しくなったわ。安定した生活と報酬は用意するけど、どうかしら？」

「あそ、興味無いね」

「瞥して、「ばいばい」と手を振りながら歩いていく。逃がさない。」

「まあ、話だけでも聞きなさい」

モモメノは鞭を振り上げ、彼女の右腕を絡め取った。

そしてマナで圧迫し、締め付ける。

これで彼女は逃げられない。

「……いいね、強いマナを感じるよ。キミもなかなかやるね」

「そうね、自信はわりとあるわ」

「マナの使い方といい、声といい、差し詰め、キミはマレアイアの歌姫候補かな？」

「よくご存知ね」

「そういうのの研究員だったからね、ボクは」

振り向く。

顔は酒で紅潮しきっているが、油断はならない。

「申し遅れたわね。私はモメモノ。姓は無いわ」

「ほー。勝手に名乗られても、ボクは名乗る気は無いよ」

「……そ。別にどうだっていいわ」

問題は、如何にして引き込むかだけなのだ。

「私他に、才能ありそうな子が二人。あなたが加わればN O : 1  
ギルドも夢じゃないのよ」

オーブに左手をかざす。

マナを集中しているのだ。

一体、何をしだす気か。

「……残念ながら、ギルドには興味無いんだ」

彼女の前髪が何かで揺れる。

マナの塊をぶつけてくる気だ。

モメモノはバネうさを脇に抱えて身構え、神経を研ぎ澄ます。

相手がマナを放つ瞬間、その瞬間が勝負だ。

「……じゃ、放して」

彼女が左手を上げると同時に、マナの弾丸が飛来する。  
なんて事はない。

私にならできる。

「……………」

モメノはマナを手元に集中させ、弾丸を受け止めた。こちらにもマナをぶつければ、相殺できると踏んだのだ。目論み通り、上手くいった。

「……………そうね、小さな女の子には手加減するべきよね」

彼女の本気はこんなものではない。  
モメノは感じ取っていた。

「……………面白いね、キミ」

「あなたもね」

互いに、ふふふと笑い出す。

もう鞭は必要ない。

右腕を放した。

「ふふ……………立ち話もなんだし、私の部屋に来ないかしら？」

「そうだね、そうさせてもらうよ」

やがてしばらく二人は「ふふふ」と笑い続けていた。

その異様な光景は、遅れてきた見る者（若干二名）を際限無い恐怖へと陥れたと言う。

## これ以上なく素晴らしい朝

ケイトの朝は早い。

騎士たる者、主よりも早く起きなければならぬためだ。

それ故、毎日必ず六時には目が覚め、どんなに眠かろうと起き上がる。

これは六年間の騎士学校生活で徹底的に体へ叩き込まれ、習慣化されたものである。

主のベッドを横切る。

まだぐっすり寝ているようだ。

そのまま窓辺へ行き、カーテンを開くと、眩しい朝の光が射し込んできた。

空は青く、雲も少ない。

少し遠くの中央広場には、朝市の準備に追われる商人たちが忙しく動き回っていた。

大きく伸びを一つ。

今日もいい朝だ。

「んっ……」

後ろで呻きが聞こえた。

どうやら姫も起きたようだ。

振り向くと、顔に当たった朝日を避けようとバネうさを抱いたままもぞもぞと動いていた。

なんとも可愛らしい。

「眩しいわ……」

「朝ですよ、姫。起きましょっ」

もう少し寝かせておいてもいいのだが、騎士たる者、主の身の回りの世話をする事も必要だ。

特にケイトの場合、その対象が十一歳の少女なのだから。

モモメノはしぶしぶながらゆっくり上体を起こし、目を擦る。

「おはよう、ケイト……」

「おはようございます。よく眠れましたか？」

「まあまあね……」

さて、一人目は起こした。

問題は次である。

今度は、姫のようにはいかない。

「……ナムナ、朝だよ」

「……」

「起きないと、ほら」

ナムナはすぐには起きない。

かなりの寝坊癖があるうえ、神経も凶太い。

「ナムナ！」

「んう……」

「……はあ」

しかし対処法は簡単だ。

とりあえず毛布を引っ剥がせば、目を覚ますだろう。

ケイトは毛布の角を持つと、勢いよく引き上げた。

「……」

「んーヒリイ、姉ちゃんまだ……」

「……姫、どうしましょうこれ」  
「どうしたのよ一体……」

毛布の中には、下着姿の昨日のメイジとその頭を胸元に抱き寄せ  
るようにしているナムナ。

密着していて、互いに放れないようしっかり抱き合っていた。

ケイトにとってはかなり刺激的な画である。

ああ、そういえばいたんだった。

昨日、姫とメイジの「ふふふ」合戦は部屋に辿り着くと同時に挑戦  
者の方が倒れて眠ってしまったため、姫の不戦勝となった。

その後、なんとかナムナと二人で服を脱がし、一番端のベッドに寝  
かせておいたのだ。

ちなみに胸は小さめだったが、ケイトが欲情するほどではなかった。  
それにしてもナムナの小さな胸に顔を埋めるだなんて、なんて羨ま  
しいのだ。

「……どうもこうも、起こすしかないわよ」

「そうですね……」

モモメノはぺちぺちとナムナの頬を軽く叩く。

「ナムナ、起きなさい」

凜々しい声で起こそうとしてみるが、二人とも覚める様子はない。  
それにしてもどうしてこんな状態になっているのか。

ナムナの方は妹だと思って抱いているのだろうか、もう片方はさっ  
ぱりだ。

……妹？

「……姫、ものはためしに『なむ姉』で起こしてあげてください」

「『なむ姉』……?」

「ええ。それから、出来る限り彼女の六つ下の妹になりきり、可愛らしい声でお願いします」

「……ええ、わかったわ」

モメノは妙に納得した表情をすると、ため息を一つ。

そしてナムナの耳元で、優しく囁いた。

「なむ姉、起きてよお……わたし、なむ姉が起きてくれないと動けないよお……」

ああ、私は一体主人に何を言わせているのだ。  
私は気付いてしまった。

姫に「けー姉」と呼ばれて起こされたらイチコロだと。

けー姉、起きて、朝ごはんできてるよ。

もう少し寝かせて、モメノ。

ダメだよ、冷めちゃうよ。

じゃあ、おはようのちゅーしてほしいな。

仕方ないなあ、けー姉は甘えんぼさんだね。

いや、ダメだ、「おはようのちゅー」が「永眠のちゅー」になってしまう。

これは危険すぎる。

「ヒリイ、わかった……」

モメノの声はケイト以外にも効果絶大だったようで、ナムナは幸せそうに妹（ではない何者か）を抱き締めたまま、ムクリと起き上がる。

「おはようなむ姉」

「ああ、おはようヒリィ……」

寝ぼけたまま、ナムナは頬擦りをする。  
しかし彼女はすぐに違和感に気付く。  
白い。

これはヒリィではない。

「……ヒリィ？」

「ナムナ、そろそろ夢から覚めなさい」

「え、ちよつとま、え!？」

ナムナは事態を把握できずに、メイジを引き離そうとする。

しかし抱き付いている方は未だにすやすや眠っていて、なかなか離れてくれない。

「ア、アンタ、なんでアタイの布団に!？」

「んー……」

ナムナが激しく動けば動くほど、妹（ではない何者か）は現へと戻ってくる。

頑張れナムナ、もう少しだナムナ。

「……あー」

「おはよう。よく眠れたかしら？」

メイジが目を覚ます。

ナムナに抱きついたまま、寝ぼけ眼で部屋を見渡すと、何か合点がいったようで一人うんうんと頷いた。

「……やー、モモちゃん、いい朝だね」

「そうね、素敵なお朝だわ」

「モモちゃん!？」

「いいから放してくれ!アンタはなんなんだ!」

なんだこれは。

昨日とは全く違い、覇気と言うか、そんなものが一切感じられない。態度はあまり変わらないが、なんだか根本的な部分が別人だ。まだ酔いが覚めていないのだろうか？

「あなた、名乗りなさい。会話に支障がでるわ」

「んー?」

こんなときでもモモメノが落ち着き払っているのは、彼女の人が変わっていることなど些細なことだと考えているからか。なににせよ、流石である。

「あー名前?イクラクン。ラにアクセント。以上。で……」

物凄く簡単な自己紹介を終えると、イクラクンと名乗るメイジはケイトの方をじいっと見つめる。

なんだか吸い込まれていくような、不思議な青い目だ。

「……ああ、これはケイトよ。それで、あなたが抱き付いているのがナムナ」

「沙悟浄猪八戒孫悟空?」

「大正解よイクラクン」

「うっせー。本当はモモぞーケイちゃん南無三なんだろー、覚えたぞー」

「南無三!？」

「ナムさん」

ダメだ、会話がおかしくなる。  
きっとこれは巻き込まれたらいけない人種だ。  
むしろ本来なら関わってはいけない人種だ。  
しかしモモメノにはそんなものも関係無い。  
自分が必要なことを聞き出すだけだ。

「それで、イクラクン。あなたは どうしてナムナのベッドに？」  
「イクラクンさん、トイレで夜中吐いた。戻る。ベッド間違える。  
ナムたんぎゅー。そゆこと」  
「……そ。酔いは醒めたかしら？」  
「うい、まどもあぜる」  
「……」

嘘だ。

絶対に嘘だ。

シラフでこれだと病院に連れ込むしかない。

「そんなのいいから、アンタはいつまでアタイに抱き付いてるつもりだよ！」  
「うん？」

そうだ、そんな返事などどうだっつていい。  
今は私のナムナから離れるべきだ。

「私の」ナムナから！  
イクラクンは抱きついたまま、ナムナの叫びを無視してモモメノを見る。

「モっちゃん、そんで、協力すればいいの？」  
「ええ。詳しい話は朝食を摂りながらがいいわね」

「アタイは無視か！離れろー！」

ほー、と呟きながら、イクラクンは真正面、ナムナの顔を見る。

「な、なんだよ、なんだよアンタ」

「あい？」

そして、そのままナムナを押し倒す。

空気が凍る。

さすがのモメノも、これには驚きを隠せない。

いや、呆れが九割八分だ。

「な、な……」

「ナムたん、昨日は激しかったね。あ、モモ様シャワー浴びていい？」

「……ええ、構わないわ」

モメノが答えると、あっさりナムナの元から離れ、シャワールームへ入っていった。

なんだ、これは。

「ア、アタイは、なにもしてない！なにも！」

顔を真っ赤にして否定するナムナ。

しかしそんなことはケイトはわかりきっていた。

なぜならナムナは私のものだから。

そしてモメノも。

「落ち着きなさいナムナ。彼女は反応を確かめているだけよ」

「……姫、本当ですか？」

「……申し訳ないけれど、そう聞かれるとなんとも言えないわね」

姫でさえ断言できない。

そういうことになる、かなりの不審者だ。

あまりお関わりしたくは無いが、相手はあれでも相当な実力者である。

嫌でも、これからうまくやっついていかなければならないのだ。

「……私が相手するから、あなたたちはスルーに徹しなさい。わかつたかしら？」

「わかりました……」

「頼むよボス……」

やっとこれで全てのベッドが埋まると思えば、物凄い事態になってしまった。

これまで以上に、先行きが不安になるケイトだった。

## メイジである

「雇用条件等についてはこんなところよ」

「んー……」

「ほら、また寝てますよ！」

「ああもう危なっかしいねアンタは！」

姫からスルーしろとの命令が下ったが、二人はそんな事などできなかった。

寝足りないのか、イクラクンは朝食を食べながら船を漕いでいるのだ。

そんな様子を、子供二人を御守りしているケイトと良き姉であったナムナが放っておけるはずがない。

「ほらパン屑ボロボロ落ちてますって！」

「コーヒーはシミになるからこぼすんじゃないよ！しっかり持ちな  
！」

「うんー……？」

ケイトが払い、ナムナが手を添える。

眠いながらも一定のペースでかなりの量を平らげるその様は、どうにもおかしく見えた。

「何か質問は？」

「無駄ですよ姫」

「コイツ、半分寝てるんだよ？」

「あー……」

イクラクンは目をしばしばさせながら、じっと一点を見つめている。

まだ手付かずのモモメノのトーストだった。

「あー……」

「欲しいのかしら？」

「ねーモモちゃん、30G固定給だと辛いよ。だってすっげかわいい女の子だから目一杯おしゃべりたいもん」

「起きてた！」

「欲しいのかしら？」

「歩合制にしてくれればイクラクンさん文句ないよ」

「欲しいのかしら？」

「ギルド運営費はバカにならないだろーけど、月にいちおくまんGも稼ぐようになったらどーすんの？」

「欲しいのかしら？」

「欲しい」

「……そ。素直ね」

会話が噛み合っていない。

というか、二人とも我が強すぎて噛み合わせようとしていない。

向こうのペースに乗せられたらグダグダになると両者共に理解しているからか。

モモメノがトーストの半分をイクラクンの皿に乗せる。

そしてそれをすかさず頬張る。

「そうね、歩合制については段階を見て移行していくわ」

「らんかいつくえ」

「飲み込んでからにしてくださいよ」

「行儀悪いねアンタ……」

「あいあい」

ナムナが牛乳の注がれたグラスを出すと、その中身でトーストを流

し込んだ。

食と睡眠に関してはかなり貪欲なのかもしれない。

「ほらほら、牛乳でヒゲできてるよ」

「またパン屑ポロポロ落としてますって」

ナムナが拭い、ケイトが払う。

「えへへ、至れり尽くせりだねモモちゃん」

「それであなは何を言いたかったの？」

「ちょお快適。みんなだいすきちゅっちゅ」

「それであなは何を言いたかったの？」

「ケイちゃんナムたんありがとね。これからよろしくね」

「きちんとしてください」

「アンタはもう少しきちんとするべきだよ」

「それであなは何を言いたかったの？」

「モモちゃんもだいすき。トーストの分だけ愛してるよ」

「やつす」

「安いねえ」

「それであなは何を言いたかったの？」

「段階ってどんな」

「あなたの両隣。まだまだなのよ」

「両隣」が顔を見合わせる。

ああ、確かに。

「ギルド単位で動く以上、あなたと私だけでクエストをこなしても仕方がないわ。この子達が使えらるようになるまで、それまでしばらくは我慢して欲しいのよ」

「ほー」

「まあ、三ヶ月くらいね。ケイト、今のリーディングギルドはどこかしら？」

「え？えつと……」

確かこのあたりでは、王者の剣が五ヶ月前に肉球アタッカーズを抜いたはずだ。

ギルド規模や行動範囲などはそこまででもないが、少人数のギルドとしてはおそらく右に出るものはいない。きつとあの人たちも姫のようにマナを使えるのだろう。

「今は王者の剣ですね。……カザン領内の討伐依頼については約四割を占めていると、ボーアさんが」

「そうね、王者の剣……。月平均報酬は？」

「1000Gくらい……だったと思います」

「そう、両手ね……」

モモメノは自分の両手を見つめる。

なにを考えているのかケイトにはわからないが、しきりに指を折り曲げたり伸ばしたりしているのを見ると、きつと何か計算しているのだろう。

隣で勝手に追加注文しているメイジに突きつけるための何かを。

「おいちゃんおいちゃん、ラム酒ある？」

「おー、あんぞ」

「じゃーボトルで」

「アンタ、朝から酒はやめなよ……」

「あ、じゃー無し。ビッグアブラゲと紅茶ね」

「あいよー」

「……」

「あ、やっぱりナムたん食べたそうだからアブラゲは二つね」

「アブラゲ二丁なー」

「ア、アタイはいいよ別に」

「どーすんだいねーちゃん」

「ふたとうー」

なんとも自由である。

だいが食べているが、これでは食費で潰れてしまうのではないか。食費に経費で落とせる限度額を設定すべきかどうか。月30Gも与えるのなら、そうした方が良いのでは。財布を管理させられているケイトには頭の痛い問題である。

「……油揚に夢中の二人、耳だけでいいからこっちに向けなさい」

厨房の方を向いて油揚を楽しみにしている二人が両耳を器用にモモメノへと向けた。

なぜだかわからないが、その様子がケイトの心にグツと来た。

ああ、全くこの子達は、食い意地ばかり張って。

モモメノの方は呆れながらその様子を見ている。

どうやら計算は終わったようだ。

「そうね、半年。半年くらいね」

「何がです？」

「わからないのかしら？」

半年で王者の剣と並ぶ？

いや、まさか。

そんなことできるはずがない。

「……月1000Gでしょう？」  
「二倍は欲しいわね」

まさかの方向で裏切られた。  
さすがにナムナも驚いて体ごとモモメノの方を向く。  
2000Gを稼ぐのにどれだけのクエストをこなせばいいか知っ  
ているのだろうか。  
討伐依頼を毎日一つずつこなしても難しい額である。

「この程度が達成できないようであれば……そうね、解散でもしよ  
うかしらね」

「無茶です！同意しかねます、姫！」

「そうだよ、一人あたり500Gだなんて……」

「なんて妥当な設定なのモモちゃん。痺れちゃう」

三者がともに否定的な反応をする。

一人は微妙な線だが、口角が微妙に上がっているのを見るに、皮肉  
で言っているのだろう。

「あら、あなた達は始める前から諦めるのかしら？」

「イクラクンさんは妥当だと言ったさ」

「ちよつと黙ってください」

「うっさい」

「しょんぼり」

「無理だと言うなら、具体的に何が無理なのか言ってみなさい」

ため息を一つ。

ケイトは失望と呆れのあまりうなだれる。

所詮子供は子供という事か。

自分の力を過信しすぎている。

確かに様々な面で能力は普通ではないが、井の中の蛙だ。

「……いいですか？ 現状、カザンの討伐依頼の四割を王者の剣が

占めているんですよ？ それで1000Gです。もともと、その他のクエスト報酬も含めてですが」

「あら、カザンだけで考えられても困るわ」

「そうは言いますが……」

この姫はミロスまで行く気なのか？

馬を何匹か潰して乗り継いでも一日半はかかる距離だ。

そんな所まで手を伸ばせるはずがない。

「……あなた達、何か勘違いしているようね」

「へ？」

「まさか、四人でその額を稼ぐと思っているの？」

だが、部屋の四つのベッドは埋まった。

しばらくはここに留まると言っていたはずだ。

……しばらくは？

「……参加者の目標は半年で20人。吸収合併で規模を拡大するのよ」

「そうか、それなら……」

「モモちゃんのこと話してん？」

「後から説明するわ。今はあなたの両隣のために噛み砕いて飲み込ませるのが先」

「うーい」

まさか、全世界への展開を目標に掲げるギルドが、四人で全てを運営するわけがない。

これからの構想があまりにも夢物語すぎて早とちりしていた。

子供ではなく、一人の野心家だと言っことを忘れていた。

「おお……一人頭100Gなら、アタイにも……」

「そうね。でもあなた達は私直属の精鋭部隊として、四人で1000Gが目標よ」

「へ？」

「もちろん、達成できなければ解散でもなんでもするわ」

撤回。

子供である。

先程よりは幾分かマジだが。

「……姫、王者の剣の1000Gは、大統領府や業者等のコネがあつての額です。半年で手に入れられるものではありません」

「『普通』はね。でもその程度ができないのであれば、吸収したギルドを統べることなんて不可能でしょう？」

「確かにそうですが……」

そうではあるが、それを達成できるような実力が無いではないか。

姫が四人いるのなら別だが、特にケイトはハントマンとしては最下層の腕である。

残りの運ばれてきた油揚を幸せそうに頬張っている二人はそれなりに戦えそうではあるが、実際のところハントマンとしては未知数だ。「普通」ではないことは確かなのだろうが、どこに自信満々に言えるような根拠があるものか。

「まだ何か？」

「相応の能力が……」

「心配ないわ、私が鍛えるもの」

「しかし……」

否定的な返事をする、モモメノは心底呆れたようなため息を吐い

た。  
そして「まだ気付いていないのかしら」と呟き、冷めたコーヒーで唇を潤してから続けた。

「ケイト。私以外に、あなたを選ぶ人間なんて居るとでも思ってた？」

「……居ないが故に能力不足だと言えるのです」

「もったもな回答ね。飽き飽きだわ」

「……」

「それでも私はあなたを選んだ。他の候補なんて探そうとも思わずに。なぜだかわかる？」

「それは……」

それがわからないのだ。

ナムナだつて（今は油揚げに夢中だが）それを気にしている。

腕の立つハントマンならそこらにゴマンといるのだから。

強いて何か理由を付けるとすれば、それは……

「……姫が普通ではない、と？」

「当たらずとも遠からず、かしらね……」

「仰る意味が……」

「いいわ、そのうちわかるのだから。それに……」

「……！」

唐突に、テーブルの下で裾を握られた。

「……それでも選んだのだから、あなたにとって私は特別な存在。

それはわかっているはずだから、問題ないわ」

「は、はい……」

姫は……いいや違う、これは「ああいう」ものではなく、意図的な

ものだ。

…… そうだとしてもこれは何を意図しているのか？

いつもの催眠じみた方法で操ろうとしているなら、普通の人間相手なら他の方法のが効果的ではないか。

やはり姫は「ああいう」…… いや、そんなはずはない。

だとすれば、何か、「ああいう」感情を私が持ち合わせていることに気付かれているのか？

言うほど広くはない脳内で、さまざまな憶測が飛び交う。

無論、「ああいう」こと無しには考えられないのがケイトである。

「…… さ、おしまい。客人に聞かなければいけないことだつてあるのよ」

「はぁ……」

そう言つて、裾から手を離す。

ああ、またトラップに引つ掛かったのだなと思いつつ、ケイトは食事中の二人を見た。

客人とはイクラクンの方だろう。

それにしてもデカいなこの油揚。

食パン一斤はありそうなサイズである。

「ほら油揚共、耳だけ向けなさい」

「その総称はひどいと思います……」

「特に白い方、あなたには聞くことがあるわ」

「おふぁ……」

口に油揚を満載したまま喋ろうとした白い方の肩を黄色い方が強く叩いた。

行儀が悪いと言いたいのだろう。

ああ、ナムナはすっかりお姉ちゃんになっちゃったんだね。

けー姉寂しいよ。

「んっ……お話終わり？」

「ええ。なかなか飲み込まないから口移しで強引に、ね……」  
「ふーん」

こちらをニヤニヤと怪しい笑みで見つめる。

いや、例えだから、「ああいう」のじゃないから。

「モモちゃん何か聞きたいの？」

「ええ、あなたはゲストなのだから」

「ひどいやひどいや、まだ仲間扱いしてくれないなんて、えーん」  
「当たり前よ、まだどこの馬の骨かわからないのだから」

まあ、当然か。

胡散臭いと言うか、それ以前の問題と言うか。

本性がわからないと言うか、掴めないと言うか。

「ボクはボクでイクラクンさんなんだよ」

「職業は？」

「メイジちゃん」

至極当たり前に答えた途端に、モモメノの表情が変わった。

いや、意図的に変えたのだろう。

口角を上げ、ニヤリと微笑む。

しかし目は笑っていないのだ。

「あらあなた、メイジなのね」

「どっからどーみてもメイジちゃん」

「えあ？ボス、最初からメイジって……」

「……ナムナ、姫にはなにかあるんだから、邪魔しちゃダメ」

メイジであることに鎌をかけた？

まずもって「メイジ」がわからないケイトとナムナにとっては、何を言いたいのか全くわからない。

「あなた、メイジならオーブを持っている筈よね？」

「もち、肌身離さずうー」

イクラクンは腰につけていたオーブをテーブルの上に乗せる。

昨日、ウイスキーの中に突っ込んでいたアレだ。「触ってもいいかしら？」

「あー……」

イクラクンが目だけをどこか明後日の方向に逸らす。  
なんてわかりやすいんだ！

「……降参、していいかな？」

「まだダメよ、二人が理解できないじゃない」

「モモちゃん意地悪だね、キライ」

「どうとでも言いなさい」

皿やグラスの間を転がってきたオーブを、モモメノはつまみ上げて灯りに透かす。

ロナム硝石だったか。

偽物なのだろうか？

「ボス、それって、『ろなむ』なんだろう？」

「ええそうね、正真正銘のロナム硝石よ」

「だったら、何がヘンなんだい？」

黄色が興味津々に食い付く。

自分もロナム製の「宝物」を所持しているのだから、当たり前か。  
一方白い方はバツが悪そうにぶつぶつなにか呟いている。

「そうね、これには核がないのよ」

「かく？」

「ええ、核よ。プレロマで課程を修めたメイジは、ルビー、サファイア、トパーズいずれかが、このオーブの中心に入った物を授けられるの」

「……？」

「ナムナには、紅玉、蒼玉、黄玉と言えば良いかしら」

「ああ、宝石なあ……」

「どーしてモモちゃんそんなこと知ってんのさ」

「どこの国も後継者の教育には金をかけるものよ」

そういえば、子供の頃に聞いたことがある。

魔法使いは、赤、青、黄色、三つの色の宝石を使って、炎と氷と雷を操ると。

……じゃあ、メイジとは？

「それぞれ、マナを与えると、熱、冷気、電気に変換するのよ。つまり、操れるの」

「すげえ……まるで魔法使いじゃないか!？」

「そうね、まだマナ学が学問として体系化されていなかった時代は、『魔法使い』だったわ」

ナムナがイクラクンを見る目が、疑いから尊敬へと変わった。

いや、でも、しかし……ナムナの想像する尾ひれの付いた「魔法使い」とは、まるで違うのだろうか。

「でも、この子が持っているオーブ……中に触媒となる核が入っていない」

「核がない、ということとは、魔法は使えないと？」

「そうね。でもマナ自体は扱えるのよ。むしろオーブなんてなくても。昨晚、見たでしょう？」

では、イクラクンは一体？

マナを扱えるのだから、きっとプレロマで学んだはずである。

「どうして、彼女は？」

「さあ、それは本人が説明してくれるんじゃないかしら？」

「ねえ？」とイクラクンに目を遣ると、不満そうに唇を尖らせてそっぽを向いていた。

「モモちゃんキライ、大キライ」

「あら、私は大好きよ」

「えへーうれしいな、大スキ」

「軽っ」

「軽いねえ」

景気付けにえへんと咳払い。

イクラクンが口を開く。

「干された」

「軽っ」

「軽いねえ」

「軽いわね」

四文字は軽すぎる。

「そもそも何をしてなんですか……」

「まーいろいろいる。やっちゃいけない研究三つと、偉い人の触っちゃいけないところに触ったの」

「自業自得じゃないですか……」

らしい、と言えばらしいか。

こんな人物がトラブル無しにプレロマを出ることなど考えられない。

「それで、あなたはこのオーブを使っているのね？」

「そうそう。そろそろ返してね」

「そうね、返すわ」と手渡されたオーブを腰に付け、ため息を一つ。まさか、暴かれるとは思っていなかったのだろう。

「……さて、メイジの資格のない者がメイジを騙っている……この事、プレロマ本国に通達すれば、どうなるかしらね」

「ギロチン」

「軽っ」

「軽いねえ」

「あら、そんなに？」

「イクラクンさん多分個人的に怨み買われてる。おっかない」

俯いて悲しそうに言うあたりあまり信用できないが、少なくともそれなりのことをしてかしての追放なのだろう。  
凄まじい人材を捕まえたものだ。

「……まあいいわ。一応、これであなたの弱味を握ったわけでしょうっ」

「そゆことでいーよ」

「じゃあ、文句はないわね」

きつとそうだったことはこの二人にはわりとどうでもいいのだろうが、双方納得できる建前上の「契約」として必要なだろう。二人とも、何を考えているのかさっぱりわからない。

「さ、油揚二人は早く食べてしまいなさい。忙しくなるわ」

「今日はどちらへ？」

「ギルドオフィスよ」

「おお、ついにか……！」

ようやく、といったところか。

ケイトは安堵のため息を吐く。

一応、これで形にはなるのだと考えると、なかなか苦勞した気もする。

気のせいだが。

「いよいよですね」

「これからは仕事が多くなるわよ」

最初はただのお遊びかと思っていたが、そうではなかった。

もしかしたら、いや、ほぼ確実に、私はとんでもない人に雇われたのかもしれない。

ようやく動き出したモモメノの計画が、ケイトにははっきりと見え  
ていた。

## 戦女神の名

エランは一ギルドオフィスの受付嬢《露出狂乳年増》であり、ギルド管理部の長でもある。

浮浪者や奇人変人、たまには物好きな貴族など、変わり種の多いハントマンを相手にするだけあり、「そういった」モノの扱いには慣れていた。

しかしこれには、流石の彼女も驚きを隠せなかった。

「……本当に、ギルド作るだなんて」

「とりあえず、これで相手をする気になったかしら、『お姉さん』？」

「してやったり」を秘めた笑顔で首を傾げてモメメノは聞く。

その後ろには、「あの」ケイトと、ルシエのサムライの子と、素性のよくわからないルシエがもう一人。

たむろしながらヤジを飛ばしていたオヤジどもは、ケイトのF・W満面ordの笑みで静まり返っていた。

これ程までに厄介、というか特殊なハントマンたちを相手にしたことがあつただらうか。

「はあ……」

ため息を一つ。

ここまでされたら、エランも認めるしかない。

「そうねえ、モメメノちゃん。……だけどあなたがギルドを作れないことは、わかっているでしょ？」

「心配ないわ。その辺りは優秀な右腕に全て委せるもの。……ケイ

「ト

「優秀……?」

一歩前に出て、騎士とエランは互いに苦笑い。

「……まあ、そんなところだそうですね。私なら年齢もどうにかかなりますし。これ、印紙代の3Sです」

「ふふ、意外とハードワークなのね」

銀貨を受け取り、代わりにエランは印紙と書類を渡した。

これに必要な事項を記入、提出し、ギルド管理部の審査を通して認可されれば、晴れてギルドの設立となる。

もつとも、余程の理由がない限り審査で引っ掛かることはないので、心配する必要は……ある、というのがケイトの心境だ。

一国の次期後継者候補と、プレロマでなにやらやかした者がいるのだから、各々の本国に問い合わせればすぐにわかってしまうだろう。

いや、考えすぎか。

カザンは自由の国なのだ。

というか、新規ギルドの一つなど気にかけてもしないだろう。どうとでもなる。

「それじゃ、この書類に氏名のサイン、年齢性別血液型、持っているならカザンのハントマン登録番号を記入ね」

「はい」

ペンを取り、自分の名前を滑らせる。

「ギルドリーダー」の欄に書いているのが気にかかるが、リーダーがリーダーだけにこうしなければならぬのだ。

記入を終え、モメモノにペンを渡す。

「……ケイト」

「どうしました？」

「書きにくいわ」

ああ、そうか。

この受付は子供の背には少し高すぎて、手元が見にくいようだ。

「椅子が何か……」

「いいわ、抱き上げて」

「え……あ、はい」

「ナムナはバネうさを」

「はいよ」

なんてこった。

だっことは、刺激が強すぎるのではないか。

しかしこれは命令だ。

そういうのではない。

ケイトはモモメノを抱き上げる。

ああ、なんて軽いんだろう。

それに細い。

大切に守らなければ、壊れてしまいそうだ。

この脆さは、少女が女性へと生まれ変わる前の繊細な繭である。

そして胸元のかすかな柔らかさは、今まさに成長しようとする羽である。

それを今、私は後ろから抱き締めている。

なんてこった、幸せだ。

けー姉、だっこして。

もー、モモメノはいくつになっても甘えんぼだなあ。

いいもん、けー姉と結婚するから。

えー、どうしようかなー。

あっ……。

モメモノ、どうしたの？

ううん、けー姉って、結構胸、おっきいね。

えへ、そうかな？

「無ければ？」

「ああ、モメモノちゃん……っていうより、ケイト以外は登録して無いから、今度証明写真持ってきてね」

「無いのは姓よ」

「そうねえ、普通ならお父さんかお母さんの名前をファミリーネームにするわねえ。でも本人と認識できればいいから、なんでもいいわよ。なんなら仮名でも問題ないしね」

「……そ。ケイトのを借りればいいわね。……血液型は何のために？」

「大ケガしたときに必要でしょ？」

「ああ、そういう仕事だったわね……」

あーっ、ずるい、アタイもだっこしてほしいのに。

ナムナ、順番ね。

えー。

我慢しなさいって。

いいよ、別に、勝手に抱きつくから。

ちよっとナムナ、後ろから抱きつかないでよ、もー。

はー、けー姉に抱きつくとやっぱり落ち着くなあ。

なむ姉ぎゅー。

うわあ、いきなり抱きつくなよ、アンタは。

えー、そんなあ。

なむ姉は今けー姉に抱きついてるんだから、後でだよ。

こらこら、喧嘩しないの。

「ただけー姉……。  
もー、仕方ないなあ、みんな抱き締めてあげるから、けー姉の胸においで。」

「『お姉さん』、これでいいかしら？」

「……うん、大丈夫よ」

「ケイト、もういいわ、降りして」

「……」

「ケイト……？」

「ああ、なんてこった。  
幸せだ。」

「……ケイちゃん、護衛対象を不埒な目で見ちゃダメだよ」

「はいいい！」

突然現実には引き戻されるような耳打ちをされ、ケイトは我を取り戻す。

「……というか、何故バレた。」

「……何を耳打ちされたのよ」

「い、いえ、大したことでは」

「あなたって罪深いのね、モモちゃん」

「……？とりあえず、降りして」

丁重に降ろすと、モモメノはナムナにペンを手渡した。

イクラクンはニヤニヤしながらケイトの背中をつついている。

「……なんですか、いったい」

「大丈夫だよケイちゃん、メタ発言は古くから手法として確立され

てるから」

「……はあ？」

「イクラクンさんが天才過ぎるだけだから、理解できなくて普通」

ああ、この人はまともに相手をしてはいけなかった。

すっかり姫の忠告を忘れていた。

だって「役割」としての私が、突っ込むことを望んでしまうのだから。

負けず劣らずのメタ思考である。

「……そういえばイクラクンさん、何歳なんですか？」

「じゅーきゅー」

「……はあ」

「なしたん」

「……いえ、一応敬語使っておいて良かったな、と」

「えっへん」

「ほら、次はアンタだぞ」

「りょーかい」

油揚黄色から白へとバトンタッチ。

出会って間もないが、なんとなくこの二人の関係は出来上がったらしい。

片方は一番素直なりアクションをとる相方を気に入ったようだし、もう片方は危なっかしくて心配なようだ。

ケイトからしてみれば、ベクトルは違えどどっちもどっちなのだが。

「あれ、モモチん、これどーしよ」

「あら、なにか？」

書類をつまみ、モモメノの目線へ置く。

「ギルド名どーすん？」

……そこが一番重要ではないか。

「ああ、伝え忘れていたわね。でも抜かりはないわ」

「……そういうの、ちゃんと教えて欲しいよボス」

「私の内では構想は決まっていたのよ。少し、話し合いが足りなかつたわね」

まあ、さすがにこの姫に限って考えてないなんてことは無いだろう。それに、油揚二人の意見を聞くのは、見えている地雷を踏みに行くようなものだ。

「肉球アタツカーズ」のような名前を付けられれば、もうどうしようもない。

「それでー、モモちゃんなんて名前」

「そうね、あなた達に気に入ってもらえるかどうかはわからないけど……」

紙とペンを受け取り、モモメノはケイトを一瞥した。

持ち上げる、とのことらしいので、先程のように丁度良い高さまで抱き上げると、すらすらとペンを滑らせた。

「ヴァルキリー……ですか？」

「ええ、そうよ」

「なんだそれ……？」

聞き慣れない言葉だった。

ナムナとケイトはハテナ顔だったが、学のある二人は満足げだ。

「先史の戦女神の名よ。ぴったりだと思っわ」

「女神……なんか、すげえなあ……」

「モモちゃんプレロマいたことでもあるの?」

「プレロマ帰りが教育係だったのよ。先史の文化については、よく習ったわ」

戦女神。

少し神々しすぎる気もするが、この姫はゆくゆく多くのハントマンを統べる事になるのだから、そこまで不釣り合いではない。なかなか素敵だ。

「異議は?」

「ありません」

「アタイもないよ」

「おっけおっけ」

「……では」

書き上がった書類を、エランに差し出す。

「『お姉さん』、お願いするわね」

「ええ」

受け取ると、『お姉さん』はサインを入れる。これが認可されれば、ギルドの完成だ。

「……確かに受理したわ。『ヴァルキリー』」

「ありがとう、『お姉さん』」

御守り役三人と、その内一人に抱き抱えられた少女。

ギルドオフィスという場所も相まって、端から見ればなんとも珍妙な光景だが、こうしてようやくモモメノの計画が形になってきた。

もちろん、それが上手く物事が行くような保証はない。

しかし、部下らにとってモモメノの不敵な微笑みは、それを忘れ去るには十分すぎるものだった。

## 英雄王

「バラツカ……？ 看板だけではあまり良さそうには思えないのだけど」

「店主さんが行商人の出なんです。もともとは本当にバラツク小屋だったって話ですよ」

二人は中央広場から程近い武器店に来ていた。

店名はバラツカといい、カザンでは結構な名店である。

油揚げの二人はもとの宿から荷物を取ってくるとの事で、別行動をしている。

と言うか、イクラクンを一人にしておく事がナムナにできなかった。

「……商人としては、なかなかの腕と言う事ね」

「ええ。一代でこれだけの店を構えられるだけありますよ」

モモメノはショーウィンドウに近付き、展示されている商品をまじまじと見つめる。

派手な装飾の付いた大鎧であり、ケイトにはとてもではないが扱えない代物だ。

「姫、中の方がよろしいかと」

「そうね。この鎧、あなたには少し華美すぎるわ」

ドアを押して店内に入ると、壁から天井近くのわずかな隙間まで所狭しと武器や防具が陳列されていた。

世界各地から集まるハントマンを相手に商売するには、刃物から鈍器まで、様々な武器を取り扱わなければならない。

そのため、あまり広くない店内に大量の品物を詰め込む必要がある

のだ。

「……物騒ね」

「そうでしょうか？」

確かに、異様にも見える光景かもしれない。

靴の爪先に装着する小さなダガーから、モメメノの背の二倍ほどもあるような長剣。

弓、猟銃、その弾薬。

これほどまでに武器の類いが自由に市販されている国はカザン以外には無いだろう。

ネバンプレスの闇市なら同程度に売買は可能だろうが、国としてならばカザンが随一だ。

「お、ケイトちゃんか、いらっしやい。親父さんは元気かい？」

知り合いの娘の来店に店主は気付き、笑顔で挨拶をする。

ケイトの父もハントマンであったため、昔から馴染みなのだ。

「最近帰ってませんが、まあ元気だと思えますよ」

「そりゃよかった。で、仕事のほうはどうなんだい？」

「ぼちぼちです」

そんな一連のやり取りをしていると、後ろからモメメノがケイトの服の裾を引っ張った。

もしかすると、この姫案外、私が誰か姫の知らない者と親しげにしているのがあまり好きでは無いのかも知れない。

そんなことをケイトは考えるが、まさか、違っだろう。

そうだったら非常に嬉しいが。

「ケイト、知り合いかしら？」  
「ええ、まあ」

なにやら聞き慣れない少女の声が聞こえたため、店主はハテナ顔になる。

どうやら商品の影になっていて、姿が見えていなかったようだ。座っていた椅子から立つと、ようやくその声の主を捉えることができた。

「今、雇われなんです」

ケイトのその一言で、店主は納得して「ああ」と声を漏らした。詳しく言わずとも理解できるのは、流石ハントマン相手の商人である。

「店主、この子に合う鎧が欲しいわ」

「下取りは？」

「あ、はい、持ってきてます」

持ってきた雑囊ごと、店主に手渡す。

二年ほど前からお世話になったが、元が中古のためにそろそろ買い換え時だ。

「はい、鎧の下取りは一律30\$。きちんとした女性用の鎧は特注するしかないが、どうするね？」

「大丈夫です。時間もないし、背だつてわりと高い方ですから」

「そうか。じゃあ適当に選んどくれ。女性のサイズはよくわからん」  
「はい」

さあ選ぶか、と思って振り返ると、モモメノがなにやら少し俯いて

いた。

何か考えているように見えるが、どうなのか。

「姫、鎧はあちらです」

「……ケイト、あの鎧」

「ああ、中古のボロですよ」

「そう、中古なのね。それならいいわ」

「どうしたんです？」

モメノはなぜかため息を一つ。

すこしガツカリしたような表情で言った。

「いや、ね……。あの鎧、あなたが使い古したモノだったら、一部のマニアかなにかに高値で売れるんじゃないか……。って」

ちよっと待て。

「……何を言い出すんですかあなたは」

「冗談よ。まさか本気にしたのかしら？」

「そうではないです、そうではないですけど……」

そのような話には、あまり良くない経験がある。

ケイトとて女性、騎士学校時代にはなかなか苦労していたのだ。

「まず、買ってどう使っんですか……」

「マニアかなにかに聞きなさい」

「マニアかなにかって……絶対変態じゃないですか。イクラクンさんみたいなの」

「イクラクンは変態のベクトルが違うわよ」

そういう話ではない。

まずもってそのような知識を十一の少女が知っていて良いものか。マせているのもまた一興だが、「年相応のこともつばさ」と言うギヤップが姫の魅力（主にケイトに対する）を産み出しているのは確かだ。

初めから知っているのであれば、教育愛（背徳的な行為についてではなく単純に世の中についてのことだと自分に弁解することによってケイトはそれに対する疚しい気持ちを脳内から締め出しているため全年齢向けでも問題はない）が湧き出て来ないだろう。

ケイトの中では純粹無垢な少女こそが憧れであり、至高なのだ。

「でも需要は高いと思うのよ」

「……供給を拒みます」

「そ。ならいいわ」

モモメノは近くにあった鎧に手をかける。

シンプルなデザインであるが、わりと重厚で、大柄な者が好んで着込むような商品だ。

思いの外重かったのか、持ち上げるとよろけてしまった。咄嗟にケイトが手を貸す。

「大丈夫ですか？」

「ええ……。これはどうなのかしら？」

「大きすぎますね。無理があるかもしれません。成人男性のサイズを基本にしているので、小さめのが私の体には合います」

「そう」と呟きながら、モモメノはゆっくりともとに戻す。

「でもあなた、胸があるじゃない」

「……」

そうだよモメノ。

「けー姉大きいのは背だけじゃないんだよ。着痩せするから少し目立たないけどね。気付いてくれて嬉しいよ。」

「……ケイト？」

「えあ、あ、はい、鎧を着るときはサラシ巻いてるんでだいじょうぶです」

「そんなものなのかしら？」

「男性の胸囲って案外広いので、鎧であまり不自由したことは……」

「そうね、それなら問題ないわね」

辺りに沢山並べられている鎧一つ一つをモメノは見回す。

凝ったデザインの物、装飾が目立つ物はあまり気に食わないのか、すぐに飛ばしてしまう。

ケイトもあまり好きではない。

「……でもどうして、突然鎧を？」

「そうね……」

モメノは一つの鎧の前で立ち止まり、その胸板を指先でなぞりながら言う。

「ナムナがオオシシに襲われかけた時、彼女は騎士姿で盾となるあなたを見て何を思ったかしら？」

「え……？」

それは恐らく、「カッコいい」とかだろうが、そんなこと、言えるはずかない。

「あなたがナムナの立場だったら？」

「いえあの……」

「謙遜は要らないわ。ナムナが感じた事実なのだから、誇りなさい」「格好が良い、というか、なんとというか……」

「そうね。あの時ナムナはあなたに対して憧れに近い感情を抱いた筈だわ。あの子のあなたに対する接し方と、イクラクンに対するそれを比べればわかりやすいわね」

「あ、ありがとうございます」

「ナムナに言いなさい」

呆れたようにため息を一つ。

モモメノは続ける。

「……これから多くの人間を配下とするにあたって、説得力が必要なのよ」

「説得力……」

「ナムナには実力を見せて納得した上で参加してもらったけれど、これからは必ずしもその段階を踏んでからとは限らないわ」

カリスマ性、と言うものか。

「……とは言え、なぜ私が？」

「あなたは私を補佐する立場よ。基本的には、常に私の傍にいてほしいのよ」

不意打ちである。

突然の危険発言である。

強襲である。

そして幸福である。

けー姉、あのね、わたしね。

どうしたの？

けー姉にずっとそばにいてほしいの。

大丈夫だよ、言われなくても、離れないからね。

「……私は子供であるがゆえに、いくら実力を見せつけ、いくら理論を展開しても、説得力が足りない。だからあなたが隣に立ち、対象にある種の安心感を与える必要があるの。私が暴走しないために、きちんとお目付け役がいる……とね」

けー姉がいないと寂しいよ。

私もモメノと一緒にいないと寂しい。

けー姉がいないとね、寂しくておかしくなっちゃうよ。

大丈夫、おかしくならないように、ずっとそばにいてあげるからね。

「だからこそ、あなたには見映えを気にしてほしいのよ。ナムナやイクラクンと違って、あなたには特別な使命があるのだから」

あのね、けー姉はわたしにとって特別だよ。

どんなふうに特別なの？

一番好きだよ。だから特別なの。

じゃあ、私にとってモメノも特別だよ。

えへ、両思いだね。

「デザインについて言えば、できるだけシンプルな物がいいわね」

「……」

「……ケイト？」

「は、はいわたしもあまりかびなそうしよくをほどこされたものはあまりすきではありませんしひょうも」

「……一応、頭には入ってるみたいね」

費用も嵩むので良くはない。

「あなたの好みや、費用が問題ではないわ。対外的にはあなたはお目付け役なのだから、目立つ物を身に付けるのは不適切なのよ」

「なるほど……」

「それと、あなたは私と対照的であればあるほど効果的ね。互いに引き立て合うことができるもの」

流石だ、とため息が出た。

自らの欠点を正確に捉えているし、なによりそれを補う方法をきちんと考えてある。

「お姫さま」を夢見ていた十一歳のケイトとは月とすっぽんの差だ。

「自分で言うのもどうかと思うのだけど、天才少女と女性騎士の組み合わせ、画になるし、話題性とインパクトは十分じゃないかしら？」

そう言って悪戯っぽく微笑むモメノに、ケイトは「ええ」と答えて笑みを返した。

計画が成功し、巷で大きな話題となれば、きっとマレアアだっこの姫を諦める。

そうすれば、ずっと傍らに置いてもらうことだってできるのだ。

と、ケイトが妄想モードに突入しようとしていた時、店内に野太い男の声が響いた。

「店主！店主はいるか！」

妙に聞き覚えのある声に、ケイトは振り返る。

入口にいたのは、白髪頭の見るからに屈強そうな……

「お待ちしてりました」

「注文の品はどうか？」

「ええ、良いのが入りましたよ。こちらへ」

男は招かれてカウンターへと向かう。

いや、違う。

まさかこんなところに来るはずがない。

「……ケイト、知り合いかしら？」

裾を引つ張られながら訊かれる。

少なくとも、知り合いではない。

本人だとしても、こちらが一方的に知っているだけなのだから。

「いえ、違います……」

「……そ。なんだか、並々ならぬ感じがするのだけどね」

確かにあの人間離れた雰囲気は、「英雄王」に相応しい。

だけどまさか、ここに一人で顔を出すだろうか？

普通なら側近の一人や二人、連れてくるはずだ。

よく街へ抜け出してくるなんて噂も聞くが、まさか、そんなはずは……。

「名剣、『ダインスレイフ』をルシエの匠が鍛えなおしました」

「ほほう……」

男は店主より柄の部分に円形の装飾が付いた剣を受けとると、鞘から少しだけ抜く。

離れた位置から眺めている二人も、それがただならぬ剣だということとはわかっていた。

「切れ味はアイゼンの刀にも優りますし、強度もかなりのものです」

「素晴らしい。流石はルシエだな」

「お気に召していただけましたか？」

「うむ、ただこつ」

男はガチリと鞘にしまうと、胸元から小さな革袋を取り出し、カウ  
ンターへ置いた。

中身はきつと、すごい額の金貨だろう。

「指三本、どうか？」

「こんなに……！？ さ、流石に多いかと」

「いい、受け取れ。いつも無理を言っすまないな」

「ありがとうございます」

茫然と男と店主のやり取りを眺めていると、強く裾を引っ張られた。  
見ると、少し不機嫌そうな表情で自身の垂れた耳をいじっているモ  
メノが睨んでいる。

耳を貸せ、ということが。

「……あなた、あの男について知っているのね？」

「……下手すれば、世界中の人が名前を知ってます」

「……そ」

「偶然なんてあるものね」とモメノは呟くと、もう一度男の方を  
眺める。

大体、どのような人物か特定したのだろう。  
しかしまだ、本人とは決まっていない。

「ところで……発注の件、聞いているか？」

「ええ、もちろん。メナスさんから伺っております」

……メナス？

メナス補佐官？

ああ、確定した。

確定してしまつた。

「用意できるか？」

「流石にアレだけの数ですと時間がかかりますが……入荷したものに  
については、順次納品する準備は整っております」

「そうか、よろしく頼む」

思考が停止し、立ちすくむ。

どうしてあの人がこんな所に。

「……戦争、なのでしょうか？」

「いや、勘だ」

「勘……」

「気にするな、俺の勘は良く当たる。……もつとも、今回は当たつ  
てほしくはないがな」

「……そうですか」

頭が真っ白になり、何故か冷や汗が出てくる。

「英雄王」が目の前にいるのだから、無理もない。

それにこんなに近付いたのはケイトもはじめてだ。

「……邪魔したな。例の件、よろしく頼むぞ」

「はっ、了解致しました」

男は剣を腰に携えると、踵を返して出ていこうとする。

ケイトにはそれをただ眺めるしかできなかった。

……が、モメノは違った。

軽やかに立ち尽くすケイトの脇を通ると、男に向かって歩き出す。

「姫……？」

そして、そのまま。

あからさまに、わざとらしく、モメノは鞘に当たった。

「……すまないな、お嬢さん」

男は一言謝って、すぐに外へと向かう。

しかし、ここで獲物を逃がすようなモメノではない。

「殿方。鞘当てをしておきながら、名乗りもせず去るだなんて、少々礼節が足りないのではなくて？」

「姫、何を！」

「黙ってなさい。いつからあなたは私の保護者になったのかしら？」  
「しかし……！」

しかし、相手は「英雄王」だ。

わかっているのか、この姫は。

だが、ケイトの心配とは裏腹に、男の対応は紳士的であった。

「申し訳ないな、お嬢さん。俺はドリス・アゴートと言う者だ」

「あら、どこかで聞いたことのあるお名前ですわね」

「そうだな。世間では、大統領などと大層な肩書きで呼ばれている」

何が「お目付け役」だ。

暴走を始めたこの姫を、抑えることなどできやしない。

しかも暴走ですらない。  
全ては計算ずくなのだから。

「あら、大統領閣下でしたのね。先ほどのご無礼、謝罪致しますわ  
「なに、謙遜しなくていい」

「申し遅れましたわね。私はモメモノ。姓はございませんわ。見て  
の通りの若輩者ですが、ハントマンを生業としておりますの」  
「ほう……その歳でハントマンか」

ドリスは呟くと、視線を少し奥、ケイトへとずらす。  
ああ、目があつてしまった。

「そちらは？」

「私の優秀な右腕ですの。ケイト、閣下へ自己紹介を」

「ああああああの、ケイト・フィルポットであり、あります！」

「ケイト……ああ、女性騎士だな」

「うあ、あのどうしてて、てて、それ」

「あら、ご存知ですの？」

「カザンは俺の国だ。知らないことはない。……噂、耳に入ってい  
るぞ」

まさか、大統領に名前を……。  
いや、それよりも。

噂って、それって、ほとんど悪評なのではないか。

「こ、こう、光栄、コーエー、Koeiであります」

「ご覧の通り、少し抜けているところはございますが、腕は確かで  
すわ」

「そっか」

「の、信長の野望」

メタボケをスルーし、ドリスは続ける。

「すまないが、戻らなければならぬ。モモメノお嬢さん、活躍に期待してるぞ」

そう言いながら、モモメノの頭をわしゃわしゃと撫でる。

普段のモモメノならあまりいい気はしないだろうが、今回は「してやったり」だった。

「それではな、お嬢さんたち」

「ごきげんよう、閣下」

颯爽と出ていくドリス。

にこやかな笑顔で見送り、満足気なモモメノ。言葉のでないケイト。

面白いものを見てしまった店主。

「これで名を売りやすくなったわね」

「……姫」

「なにかしら？」

「……無双ばかり知名度が上がって、歴史三部作や提督の決断シリーズが世に広まらないのは、悲しいことです」

「英傑伝やウイニングポストもね……」

この姫は、自分には手に負えないとケイトは悟った。

## あの男

「すまない……アタイが、アタイが目を離したばかりに……！」

「で、できあがってらっしやる……！」

「バツカスはネプチューンよりも、かしらね」

中央広場。

レムス像前。

そこにはシラフが三人と、葡萄酒のボトルをラツパ飲みする白いの  
が一人。

英雄王との邂逅など、話せるような空気ではなかった。

「違うねモモ。朝酒は門田を、だよ。ボクはまだ死んでない」

「マトモになっちゃったんだよ……！憎いよ、憎いよ……！イクラク  
ンをどこかへやった酒が憎いよおお……！」

「ほら、ほら泣かないの。イクラクンさんは戻ってくるから、大丈  
夫だから」

鎧を新調した後、待ち合わせ場所で待っていたのは、像に寄りかか  
って酒を飲む白い方と、必死で涙を堪えている黄色い方だった。

聞けば、少し目を離れた際にイクラクンが葡萄酒をどこからか取り  
出したらしい。

ナムナもはじめのうちにはたかが酒だと油断していたのだが、酔いが  
回るにつれて、次第にマトモで知的な行動と言動が目立つようにな  
り、雰囲気まで豹変してしまった。

眠たげだった眼は冴え、顔はアルコールで紅潮し、なんだか威圧感  
のようなモノすら感じる。

昨日酒場で見かけた時と同じような、そんな感じた。  
凜々しい、というが適当だろう。

これが神からの授かり物、酒のチカラなのか。

「酒はいいねえ。酒は中枢神経を潤してくれる。大物主大神が生んだ文化の極みだよ」

「姐さんダメだ！なんか変なこと言い出してるよ！」

「大丈夫、変なのはかわってないから、ね？」

「モモ、古代アイゾ地方の宗教文化については？」

「オリエンタルは教わらなかったわ」

「そう。キミならわかると思っていただけだね」

少し鼻で笑ってから、イクラクンは葡萄酒を更に煽る。

シラフの時とはまるで人が変わったような……いや、違う。

おそらく根本的な部分は変わっていない。

むしろ上っ面のふざけた部分が取り払われて、相手にしやすいかもしれない。

もちろん、姫並みに人の扱いが上手いことが前提条件であるが。

「カヲル……間違えたわ、イクラクン。確認をしたいのだけど」

「うん？」

「あなた、本当に酔っているのかしら？」

「支え無しに床に寝られるなら、まだ酔ってはいない……なんてね」

顔こそ赤いが、像にもたれかかっているとは言えしつかりと地に足をつけて立っている。

ナムナ曰く、この状態でちゃんと歩いてきたらしいので、特に問題は無いらしい。

もしかすると、この状態が「イクラクン」本人であって、あの状態は仮面を被っているのではないだろうか。

そうであってほしい。

「アルコールが回っているときと、そうでないときで記憶が無かったりはするのかしら？」

「解離性同一性障害か何かだと疑ってるの？」

「ダメだ姐さん漢字が多い！」

「大丈夫だから、心配しないで」

「そうね。酒を飲むと言う行為で人格が代わるのなら、それで納得がいくわ」

「残念ながら、そんなわくわくするような病気は持ってないよ。ボクはあくまで普通の人間だね」

「姐さん普通になってる！」

「落ち着いて、ほら」

ナムナが膝から崩れる。

ああ、イクラクンはいつたいたいどこに。

イクラクンの面倒を見ることが自分の存在意義だと思ったのに、いつたいたいどこに。

普通になってしまったら、もうどうしようもないじゃないか。

ああ神様、たくさんいる内のどなたでもいいので、イクラクンをもとに戻してください。

もう一度使命をお与えください。

「……案外、疲れるのね？」

「まーね。キミも無理しない方がいい」

怯む凡人二人を尻目に、天才二人はどうやら合点がいったようだ。互いに見合って、怪しく微笑む。

「……どういう事です？」

「この通り、彼女らが困惑しかねないから、昼間からの飲酒は控えることね」

「わーっ たよ」

勝手に話が進んでいくが、もちろん二人は取り残されたまま。なんの事だかさっぱりだが、とりあえず昼からは呑まないことに決まったようなのでひとまずは安心か。ナムナも少し安堵の表情を見せている。

「ケイト、ナムナ。心配する必要は無いわ。酔いが醒めれば戻るのでから」

「本当に、本当にか……!？」

「本当だから、ちゃんと立って、涙拭いてよ。ボクが泣かせたみたいに見えるから」

そう言つて、跪いているナムナへ手を差し伸べる。

立場がまるつきり逆になっているのが、見ているケイトからしてみれば面白い。

差し伸べられた手をしっかりと握ると、羽織の袖口で涙を拭いながら立ち上がった。

「……で、ケイト」

突然こちらに注意を向けられ、少し驚く。

しかも「ケイちゃん」ではなく「ケイト」だ。

眼光が鋭く、声色も庄のあるものだったため、思わずドキリとした。もし、今のこの状態が彼女の本性だとすれば、プレロマでの過去もなんとなく頷けるだろう。

「な、なんででしょうか……」

「どんな鎧買ったか興味ある、見せてよ。女性騎士なんて、そうそっういるもんじゃないし」

「え、あ、はい」

言われるがまま、肩から下げた大きな雑嚢を渡す。  
一式が入っているため結構重いのだが、姫のようにバランスを崩しはしなかった。

「……案外軽いね。全部入ってる？」

「ええ。一応、軽めのを選んだつもりなので」  
「ふうん」

意外な反応だった。

何かで鎧を扱った経験でもあるのだろうか。

普通、騎士の鎧を初めてさわる人間は、必ずと言っていいほどその重さに戸惑う事となる。

プレロマの産み出した新素材のおかげで四半世紀ほど前より格段に軽くなっているらしいが、それでも頭から爪先まで着込むと全体で10kg程になる。

「普通の物だと、私が動けなくなりますから」

軽くおどけて見せるが、それでもケイトの体力は女性としてはかなり優れている。

普通の街娘が鎧を装備したならば、すぐに体力を使い果たしてしまうだろう。

ケイトが恵まれた体格で産まれてきたと言う事ももちろんだが、鎧を着込めることにはやはり騎士としての誇りがあるのだ。  
しかし、現実はなかなか厳しい。

「性差は乗り越えにくい……ってことかな」

イクラクンの何気ない一言は、正直なところ、あまり他人には指摘されたことの無い部分だった。

いや、ケイトの影では、わりと耳打ちされていた事なのかもしれない。

そんなことは、ケイト本人が一番良く知っている事だ。

「……………そうですね」

少し気分が沈む。

きつと悪気は無いのだろうが、あまり触れては欲しくなかった。

「あれ、姐さん意外と地味な模様の選ぶねえ」

雑囊からブレストプレートだけを取り出して、ナムナは少し驚いたように言う。

「でも……………」とイクラクンが付け足して、縁を指差しながら言った。

「パツと見、目立たないだけで、案外凝った装飾だよ。綺麗にまとめてある」

「そうなのか？」

「デザインは私が選んだわ。もう少しシンプルにするはずだったのだけど、年頃の娘には似合わないと思っ直したのよ」

「少しだけ使用人虐めみたいに聞こえるね」

「あなたと違ってケイトは質実剛健が売りなの。私の中ではね」

ナムナは雑囊の中から何かを取り出しては、宝物でも見つけたように目を輝かせる。

よくわからないが、楽しらしい。

「姐さん、これなんだ？」

鎧の一部を手に取り、ニコニコしながら聞いてくる。  
なんだかんだで、慕ってくれる人はいるのだから、あまり重く考えない方がいいかもしれない。

「ああ、ヴァンブレイスって名前で、二の腕につけるの」「ほおー……」

ナムナは部品一つ一つをじっくりと触って確かめる。

そういえば、自分もはじめて鎧を買ったときはこんな風にじっくり回していたっけ。

少年用の鎧だったが、これで夢に近づけると思うととても輝いて見えたものだ。

少し微笑ましい気持ちでナムナを眺めていると、ケイトはその後から近付いてくるルシエの少女に気付いた。

背中に身の丈に合わないような大きな剣を背負い、桃色のショートヘアには左側だけ白い髪飾りが着けてある。

歳はモモメノと同じくらいといったところか。

どうやら幼くしてハントマンのようだが……待て、アレはなんだ。スパッツではないか。

素晴らしい。

ブーツとの間に見える健康的な太ももかなりの高評価だ。

「あの、あのー……」

「うわあっ!?!」

唐突に死角から声をかけられナムナは驚いて腰を抜かす。

振り返ると、弟妹達と大差ない子がいることに気付き、すぐに落ち着きを取り戻した。

「はあ、ビックリした……どうした？ なにか用か？」  
「えっと、おねーさん、ナイト？」

まさか自分のことを言っているのかとケイトはビックリしたが、それはナムナに対しての質問だとわかった。

「いや、姉ちゃんはサムライだ。ナイトはあのおねーさん」

「え、じゃあ、おねーさんナイト？」

「そうだけど……どうしてわかったの？」

「それ、騎士の鎧でしょ？」

少女は指差して言う。

むしろ騎士の鎧だと知っているのなら、女性には声をかけないはずだが。

「そうだよ」と答えると、顔がぱあっと明るくなった。

そつえば、血と獣の臭いがする。

おそらく、討伐でも済ませてきたのだろう。

歳のわりに腕は立つようだ。

「人探ししてて、どっか行っちゃって」

「どんな人？」

「アレスって言って、ナイトで、デカいの」

待て。

なぜアイツがこんな魅力的（ケイトに対して）な子と関係を持っている。

なんとも妬ましい。

「あら、ケイト。それって……」

「ええ、そうです……。お名前、なんて言つのです？」  
「アレスだよ」

「ああ、えとそうじゃなくて、あなたのお名前」

「ハルカラだよ。おねーさんは？」

「ケイト。歳はいくつ？」

「じゅーいち」

「あら、同い年ね……」

「そーなの？」

「ええ。私はモモメノ。ケイトの雇い主よ」

「うわあ、なんかすごい……！」

自分の主と、目の前の迷子ハントマンとを交互に見比べる。背は大差ないが、育つ環境によってここまで変わるとは。

「ケイトの同期生……でいいのかしら？」

「ええ。ハルカラちゃん、私、アレスと一緒にの学校だったよ」

その返事を聞くと、ハルカラと名乗った少女は驚いた様子で「本当に？」と何度も確認する。

肯定すると、嬉しそうに耳をピクピクさせた。

ああ、可愛らしい。

姫のように繊細で綺麗な可愛らしさもいいが、この子の活発で純真な可愛らしさも負けていない。

それからやはりスパッツが素晴らしい。

近くで見ると意外と肉付きが良く、かなりピッチリしている。

きっと将来は素敵なレディ（ケイトとしては残念だが、少女の内に秘めたる発展の可能性を無下にすることは道を外れた行為と見なし  
ているため問題はない）になることだろう。

下からのアングルでまじまじと見たい。

じっくり見たい。

是非見たい。

「姐さんの知り合いかあ」

「じゃあ、じゃあ、どこにいるかわかる!？」

「うーん……ちょっとわかんないかな、ごめんね」

「あー……」

ああ、そんなにしょんぼりしないで。

そんな顔されると、おねーさんまで悲しくなっちゃうよ。

ごめんね、ハルカラちゃんの力になれなくて。

「あー、えっと……アレスとどこではぐれたの？」

「んー、わかんない。アレスが勝手にどっかいった」

なんて酷い。

こんな可愛い子を一人きりにするだなんてアイツは鬼か。

「アレスあの歳で迷子になるんだよ？ 多分頭おかしい」

勘違いも可愛い。

きつと自分からはぐれてしまったんだらうけど、ハルカラちゃんが言うんだったらそうに違いはないよね。

アレス後で訓練手伝え。  
死ぬまで。

「ハルカラちゃん、アレスと一緒にいたんでしょ？」

「うん。……あ、ユスタスとランも一緒だった」

「同じギルドの人？」

「うん」

ラン、ユスタス。

前者はアイゼンの女性によくある名前だ。

後者の方は、ケイトにとって少し違和感があるような、おそらくはルシエなのだろう。

ギルドに属しているとなれば、オフィスに連れていけばなんとかなりそうなのだが……。

「姫、どうします？」

「あなたに任せるわ」

……オフィスにはエランがいるのだ。

姫もあちらも互いに苦手意識があるように思えたので、できれば近づきたくはない。

「どうでしょうかね……」

「姐さん、この子ギルド入ってるんだらう？ だったらオフィスに

……」

「嫌よ」

地雷を踏むナムナ。

「いや、でもやっぱりこじこじなのは……」

「嫌よ」

静かに爆発するモモメノ。

「いやあの、でもナムナの言ってることは……」

「嫌よ」

動揺するケイト。

「あ、でもさつきでつかい鳥倒してきたから、後でクエストオフィスに行くってアレス言ってたよ」

ここにきて重要な事を言い出すハルカラ。

「……」

そして、最初から興味を示していないイクラクン。子供は苦手なのだろうか。

「ああ、なら隣に行けばいいな」

「ポーアなら問題は無いわね」

「ついでにお茶でももらっちゃいませうか？」

一変、和やかになる三人。

お茶汲み係として大人気のポーア。

さて、行き先は決まった。

「ハルカラちゃん、クエストオフィスに行けばきつとアレス来るよ」

「ほんと？ アレス頭おかしいから、迷わず来れるか心配……」

「ギルドの人と一緒になんでしょ？ 大丈夫だよ」

「そっか、ランがいるならなら安心」

ケイトは雑嚢を再び肩にかけ、準備を整える。

年下三人はなんとかした。

あとは白いのだけだ。

「イクラクンさん、移動しますよ」

「うん？」

「クエストオフィスです」

しかし、そっぽを向いたまま動かない。  
気付けばワインも底をつきかけていた。  
いつの間にか。

「……………行きますよ」

「いや」

「いやじゃなくて、行くんですってば」

イクラクンはその言葉を無視し、最後の一口を飲み干すと、「あれ」とすこし遠くを指差した。

「……………騎士で、デカくて、三人組」

見ると、金髪のデカいのが。

ああ、ヤツだ。

来てしまった。

後ろにはサムライの格好をしたきれいな黒髪の女性と、長いマフラーをして弓を携えたルシエの男がいた。

「ラン」と「ユスタス」なのだろう。

「……………あつ、来た！」

ハルカラが気付き、彼らに向かって一直線。

ああ、ハルカラちゃん、おねーさんもつとお話したかったな。  
いっぱいハルカラちゃんの事知りたかったな。

「アレスどこ迷子になってたの！心配したんだよ！」

「ハルカラ！お前、待ってるっつただろ！」

でもハルカラちゃんはアレスたちといるのを選ぶんだね。それなら、おねーさんは止めたりしないよ。

感動の再会を引き立てるエキストラになってあげる。でも忘れないで。

おねーさんの事、忘れないで。

「ケイト、すまん、なんか迷惑かけたみたいで」

「ううん、別にいいわよ。それより、保護者役ならちゃんと面倒見なさいよね」

「うちのお前の雇い主さんみたいにいい子じゃねえんだよ。あ、ども、ケイトが世話になってます。後ろの人ははじめまして」

「アンタが言うセリフじゃないでしょうが……」

やはり、こんな男にハルカラちゃんを引き渡すのは少し気が引ける。

……いや、後ろの二人がきつとちゃんと面倒見てくれるはずだ。

「ハル、この人たちにお礼言っとけな」

ほら、現にルシエの男が面倒見ているではないか。

「おねーさん、ありがと！」

「どういたしまして。これといったことはしてないけどね」

「良く言った」と頭をくしゃくしゃ撫でられる。

ああ、狡い。

私もハルカラちゃんの頭を撫でてあげたい。

……あれ、今気付いたが、この人……。

「あの、すみません、ユスタスさんと合ってますか？」

「んー？ そうだが、どうして知ってんだ？」

「ハルカラちゃんから聞いたんです。……なんだか、以前あなたに会ったような気がして……」

互いに顔を見合って思い出そうとするが、なかなか思い出せない。そんなに昔ではないし、むしろ最近会ったはずだ。

「ユスタス、知り合いか」

サムライの女性、おそらくはランがたずねる。

「いや、違う」そうではない。

どこかで接点があったはずだが、ごく短い時間だったはずだ。

「……あ！」

しばらくのにらみ合いの後、先に声を上げたのはユスタスの方だった。

「何か、思い出せましたか？」

「あ……いや、何でもねーや、スマン」

なんてわかりやすいんだ！

なんか隠してる！

非常に怪しい。

「ハルカラについては礼を言う。ありがとう」

「あ、いえいえ」

今度はランが一步出てきて挨拶をした。

どうも頼り無さそうな男性陣に比べ、こちらは信用できそうだ。

「手をかけてすまなかった。失礼する。バカども、ハラ減ったからさっさとメシ食いに行くぞ」

なんだかとても前言を撤回したい気分になったが、きつと大丈夫だ、きつと。

ハルカラちゃんならきつといい子に育ってくれるはずだ。ケイトは自分にそう言い聞かせることにした。

「おねーさんじゃーね、ありがと！」

四人は去っていく。

しかしケイトの胸の内にはモヤモヤしたものが残った。

ハルカラのこの先。

そして、ユスタスについてが晴れぬままだった。

姫から一度家に帰れと言われた。

どうやらあまり帰っていないことを気にされたみたいで、命令とあれば従わないわけにもいかないし、とりあえず帰ることにした。

と言っても、今日一日フリーになっただけなので、夜には六剣亭に戻るんだけど。

ちなみに三人は、登録用の証明写真を撮りに行っている。

ナムナ一人であるの二人の面倒を見られるかどうかはわからないけど、あんまり心配しすぎもいけないかな。

あの子だってお姉ちゃんだったんだから、わりとしっかりしてるし。で……

「……」

私は今、実家の前にいる。

カザン中心街から徒歩15分ほど。

別に豪華でもなんでもない、むしろ少しだけボロの来ている普通の家だ。

だいたい、半年ぶりくらいかな。

父とは折り合いが悪いから、あまり帰りたくなかった。

でも姫の命令だし、母さんには一応挨拶しておきたいし。

騎士号の証明書……というか、卒業証書もここにあるから、やっぱり一度帰るべきだったんだろうなあ。

でも……

「うう……足が重い……」

いや、重いのは足じゃはなくて、全身だ。

というか、アレだ、精神だ。

「全身が重い」だと、ピンポイントに私の弱点を突くようで嫌だ。ローレル指数か体脂肪率でみんな考えればいいのに。

……なんて、今は人より重いか軽いかを気に病んでいる場合じゃない。

数歩踏み出してドアを開ければ実家だと言つのに、それができない事をもつと気に病むべきだ。

あ、いや、どっちにしろ気に病むな私。

そんな思い悩んでないでさつさと行動に移ればいいのに。

近所の人に見られたらどうなる。

「あら、フィルポットさんとこの娘さん、一人で家の前で何やってるのかしら」なんて思われる。

尾ひれがついて良くない噂が流れたら、ますます父さんに合わせる顔がなくなる。

むしろすでに残機ゼロ。

……さつさと入らないと。

「はあ……」

とりあえず、ドアの前には行こう。

心頭滅却、少しずつ近付く。

なんだかいい匂いがするのは、母さんが昼食でも作ってるんだろう。どうせ私の分は無いんだし、さつさとやることやって戻ろう。

私はドアを開け、一言「ただいま」と……

「……」

「……帰ってくるなら連絡くらい入れたらどうなんだ」

最大の敵とエンカウト。

「……いや別に、騎士号、仕事で必要になったただけだから」  
「どうせロクな仕事では無いんだろっ」

そんなことはない。

確かに違和感はあるけど、やっと見つかった誇れる仕事だ。  
なんて反論したかったけど、父さんは聞く耳なんて持ってないだろ  
うな。

こんな状態にしてしまったのは私だし、仕方ないのだけど。

「邪魔だ、退け」

「ん……」

どこへ行く気だろう。

母さんがなにか作っているのに。

一歩横にずれると、そのまま通って、振り向きもせず街へと向か  
って行った。

まだ、認めてもらえないのかな。

「ケイト、帰ってきたの？」

奥の方から母さんの声が聞こえる。

「ただいま、ちょっと荷物取りに来た」

いつも通り、エプロンで手を拭きながら、玄関まで来てくれる。  
あんまり変わってないな。

半年じゃそこまでわからないか。

「おかえんなさい。あら、お父さんは？」

「わかんない。どっか行っちゃったよ」

「もうすぐお昼出来上がるのにねえ……」

出来の悪い娘の顔なんて見たくもない……ってことかな。

見たところ、別段なにか予定があったようではないし、私が帰るまで街で時間潰しにでもいったのだろう。

「元気でやってるの？ ご飯はちゃんと食べてる？」

「んー、お陰さまで今はボディガードの仕事やってるよ」

「あらあんたが？」

「もう少し自分の娘に誇り持ちなよ……」

「なに言ってるんだかねえ」

はい、ごめんなさい。

「まあいいや、父さんの分残っちゃうから、あんた食べていきなさい」

いやいや。

「いや、大丈夫。荷物取りに来ただけだし」

「時間ないのかい？」

「ううん、今日は夜まで入ってないけど、父さんがアレだし……」

「ほっとけば帰ってくるわよ」

……妻がそんなのでいいのか？

「冷めるから食べるよ。はやく手洗っちゃいなさい」

「あー……うん、わかった」

まあ、母さんなら普通に話せるし、なんやかんやで話さなきゃならない事もあるし、いいかな。

キッチンで手を洗い、食卓へと向かう。  
何にも変わってない。

趣味の悪い自作のバグベアの剥製も、猛る野獣を葬ったとかいうポ  
ロボ口の両手剣も、私が母さんのお腹の中にいたときに大統領から  
もらったらしい表彰状も、そのままだ。

騎士学校に入る前から、何にも変わってない。

ハントマンを引退した時から、何も変えていない。

きつと、次は自分の娘が同じように飾っていくと思っていたんだろ  
うけど。

「せつかく好きなの作ったのに、食べないなんてねえ」

ポトフの入った深皿とパン籠を持って、母さんが食卓に入ってくる。

ローリエは入ったまま。

「だから母さん、ローリエは普通食べないんだって……」

「お父さんは食べるからいいじゃないの」

「そうだけど、私は食べないし」

ローリエを皿に入れたまま食卓に出すと嫁に行くのが遅れるなんて  
いうけど、既婚者はどうなるんだろう。

でも、相手がローリエを好んで口にするような人なんだから、大し  
た事ないのかな。

「昔はお父さん稼ぎ悪かったから、ローリエですら……」

「大丈夫、何回も聞いたから」

長くなりそうなので手短に断りを入れて、ローリエをよけてから口  
に運ぶ。

なんだか少し塩っぱくなったかな。

私の舌が変わっただけか。

「ボディーガードの仕事、どんななんだい？」

「んー、なんていうか、ボディーガードらしいボディーガードしてない」

「はあ？」

「だって守る必要ないし」

むしろ私が守られる側だし。

「そんなこと言ったってあんた、ボディーガードじゃないの？」

「ボディーガードなんだけどね……雑務とか会計とか、なんか執事みたいな感じかな。でもそれもしてない」

「じゃああんた何やってるのよ」

「あー……」

何と聞かれると、少し困る。

対外的にはお目付け役とかなんとかだけど、そんな訳じゃないし。今のところハントマンとして動いてる訳じゃないから、ちよつと難しい。

「……まさかへんな仕事とか、してないわよね？」

「へんって」

「夜のお世話とか」

「ないない」

むしろ姫の夜のお世話が出来るのならこっちがお金払うレベルだつて。

……なんて親の前で言えるか。

「雇い主、十一歳の女の子だよ?」

「あら、そうなの。どこか名家のお嬢さん?」

「まあ、そんなところなのかなあ」

姫の事を、あんまり詳しく喋るのはあんまり良くないかな。

姫自身も、ナムナにはどんな身分か明かしてないし。

いや、ナムナがきちんと理解できないからあえて教えてないのか。理解できても、なんか無駄に改まっちゃいそうだし、あの子。

「なんかね、社会勉強のためにハントマンになるんだって。まだちゃんと活動してないけど、ギルドも作った」

「へえ、社会勉強ねえ……見上げたもんだよ」

「頭もいいし、ハントマンとして腕も立つし、しかも可愛くていい子でさあ」

更には肌と髪の毛はシルクのような肌触り。

大人びているが、時々見せる子供っぽさにギャップ萌え。

全身のいたるところがぶにぶにで、胸は発展途上の小さなつぼみ。ぺったんこ。

とにかく魅力的。

これ以上無く魅力的。

あどつるつる。

どこがとは言わないけどつるつる。

ちなみに確認はしていない。

……なんて親の前で言えるか。

「あら、じゃあどうしてあんなんかが雇われたのかしらねえ」

「……」

こっちが知りたいわ。

「……本当、なんでだろうね」

「人を見る目だけは無いのかねえ」

「ううん、私以外はみんな優秀だよ」

「じゃああんただけ間違っただのかねえ」

どうしてここで私が優秀だって答えが出ない！

「もう少し自分の娘に誇り持ちなよ……」

「なに言っただかねえ」

はい、ごめんなさい。

「それで、いくらもらってるの」

「それがね……」

「低いのかい？あんたの場合、それが相場じゃないのかねえ」

「いや、逆。月30Gの契約」

「あら……」

「しかも生活費は負担してもらえる」

「お金持ちの金銭感覚はそういうもんなのかねえ」

確かにそれはあるけど、そんなもんじゃないだろうな。

なんか、もっと根本的な部分が違う。

「で、いくら送ればいい？」

「なにがだい？」

「何がって、お金」

30Gももらえるんだから、せめて楽にしてあげないと。

仕官して安定した稼ぎを得ることができなかった分、送れるときに

送っておきたい。

騎士学校の入学金からなにやら、随分手のかかる娘だったんだから。

「何を言っただかねえ」

「なっ……」

そりゃないよ、母さん。

「そのお嬢さんの社会勉強がおわっちゃったら、あんたはまた働き口無くなっちゃうんだろ？貯めとくものは貯めときなさいよ」

「そっちだって、貯金無くなったらどうするのよ」

「国から補償金貰えてるから心配いらないよ。お父さん、ああ見えてしっかりしてんだから」

「そんなこと言っても……」

「それに、お父さんがあんたの稼いだお金なんて受け取ると思うかい？」

「確かに、そうだけども……」

そうだとは思っけど、補償金なんて大した額じゃないだろう。

まだ50も越えてないのに、これから先二人で暮らしていくのは難しすぎる。

それに……

「……ちゃんとしっかりやってるところ見せないと、いつまで経っても認めてもらえないよ」

いや、違う。

見せたところで認めてもらえないのはわかってる。

ただ単に、私がそうやって自尊心を保とうとしているだけなんだ。

ちゃんとわかってる。

「……はあ。父娘共々、ヘンにプライド高いところばっかり似ちゃったねえ」

「……」

「お父さん、あんたがお腹にいるとき、まだ性別がわかんなかったもんだから……」

「大丈夫、何回も聞いたから」

長くなりそうなので手短に断りを入れた。

「初めて話すんだけどねえ」

「かいつまんで説明して」

「俺の子は、一度ハントマンとして家を出たなら、嫁を連れてくる位一人前になるまで、二度と敷地は跨がせない」なんて言っただのよ」

……お嫁さんか。

まあ、あの人がいそいな事だ。

お前もいつか猛る野獣を倒せるようになれ、なんて、ごっこ遊びに興じる娘に強いるんだから、無理もない。

「お嫁さんねえ……連れてくればいいの？」

「男の子に囲まれて六年過ごしたのに、お婿さん一人もひっかけて来なかったあんたがお嫁さんなんて捕まえられるわけないじゃない」

「そりゃ、まあね……」

きつと、男の子が欲しかったんだって事は小さい頃から気付いていた。幸い、私は背も高かったし、運動もまわりの男の子達と遜色なかった。

何かで男の子を抑えて一番になる度、流石は俺の子だ、なんて誉め

てくれたりもした。

お姫さまを諦めて騎士を志した時、私も父さんも、きっと立派になれると思っていた。

親バカって、怖いなあ。

本当に。

「……ありがとう、美味しかったよ」

「お皿はキッチンね。荷物とつたら、もう行くのかい？」

「うん、父さん外で待たせてるのは悪いしさ」

今度帰ってくる時は、姫に頼み込んで一緒に来てもらおうかな。

私がしっかりやってるって事の証人がいれば、きっと父さんも安心する。

それに、勝手にお嫁さん役にしちゃうのは姫に悪いけど、私の中だけではきつと納得のいく帰宅になるだろうし。

自己満足と親孝行を両立できるなら、それでいいかな。

そんなことを、思った。

## Intermission 02 ルームメイト

行くあてもないし、中央広場をブラブラしている。

クエストオフィスにでも……あ、今日はポーアさんいない日か。とりあえずどこかで時間潰し……あれ？

あれは、ハルカラちゃんじゃないかな？

おねーさん大歓喜。

「あつ、昨日のおねーさんだ！」

スパッツ。

す、すぱっ、すぱっつ、すぱっ、すぱ、す。

すぱぱぱ、つつす、すす、すぱす、SPAS。

「あら、ハルカラちゃん、また会ったね」

「うん！……あれ、あの子は？えっと、モメメノちゃんはいないの？」

「うん、今日はお休みだから、私一人だよ」

ああ、どうしてそんなに魅力的なの！

触りたい触りたい触りたい触りたい！

ハルカラちゃんの柔肌に触りたい！

ブーツを脱がせて、ソックスはそのままで！

スパッツとソックスの間にできる神聖な空間！

素敵！

「ハルカラちゃんは一人なの？」

「ううん、アレスと一緒に」



「えつとね、朝、でっかい鳥倒して、戻ってきて、お金もらって、さっきお昼ご飯食べた。ねーアレス」

「ああ、あのドードー、かなりデカかったな」

「アレスよりデカかった」

「すごいね、ハルカラちゃんが倒したの？」

「一人で倒したよ」

ハルカラちゃん、可愛いだけじゃなくて強くてカッコいいんだね。すごいなあ、おねーさんもっともっとハルカラちゃんのこと好きになっちゃおうよ。

「そういえば、昨日お前と雇い主さんと、あと二人いただろ？あれ、どうしたんだ？」

「雇い主さんはモモメノちゃんだよ」

「モモメノさんって言うのか」

「うん。今日はフリー。あの二人、ギルドメンバーなのよ。片方は見ての通りサムライで、もう片方はプレロマから来たみたい」

「プレロマっておい、マジかよ……」

ハルカラちゃん一緒にお風呂入ろうね。

洗濯物はおねーさんが真空パックにしてすーはーするために保管しておくからね。

お風呂に入ったら汚れを落とすためにいっぱいこすってあげるね。どこをとほ言わないけどこすってあげるね。優しくするから大丈夫だよ。

「白いやつだろ？あいつ酒飲んでなかったか？」

「飲みまくり飲みまくり。宿帰ってからも一人で飲んでた」

「マジかよ、あんなのが……」

「あの人なんか怖かった……」

「酔ってるときは楽なんだけどね。シラフの時はもうわけわかんなくって……」

「プレロマつつつたらもつとカタブツをイメージしてたんだがなあ。案外苦勞してんのなお前」

全く、誰に断つてナムナとベタバタしてるんだあの人は。

酔い潰れて、介抱してたらナムナから離れなくなっちゃって、結局今朝も一緒に寝てたじゃないか。

しなやかな体に抱きついて、小さな胸に顔を埋めて……ああ羨ましい。

「……で、昨日の……ランさんとユスタスさんだっけ？」

「うん、あってるよ」

「二人は？どうしたの？」

「でえとだよ、二人で」

「ええっ！ランとユスタスそいう関係なの!？」

「冗談だっつの、落ち着け」

ああ、ハルカラちゃんそんなに慌てちゃって。

可愛いね、うぶなんだね、何にも知らないんだね。

おねーさん、良かったらハルカラちゃんにいっぱい教えてあげるよ。何をとは言わないけど教えてあげるよ。

「で、まあ、俺とコイツがここで暇してるってわけだ」

「今日はお仕事終わりだしねー」

「もうなの？」

「三時起きだからな。日が昇る前に腹に何か詰め込みながら移動。依頼をこなして帰ってきた時には丁度昼飯時ってわけだ」

「……アンタ、起きれるようになったの？」

「アレスねー、いつもランに起こされてる」

「お前、そういうの余計だから言っつなつての……」

まあ、この男がそんな真似できるわけないよなあ。  
ランさんは大変だ。

「ギルド、やっぱりランさんがリーダーなの？」

だってまともそうなのがあの人しかないし。

「うん、ランがリーダーでね、一番強いよ」

「へえー……」

アレスより腕が立つのなら、それはハントマンとしては相当の実力を持っていてるって事か。

強くてカッコいいんだろうなあ。

でもおあいにくさま、私にはお姉さまにはあまり興味はない。

「いや、強いなんてレベルじゃねえよ、ランは……」

「どつして？」

騎士学校では「俺より強いヤツは教官くらいだ」なんて言ってたのに、ずいぶん弱気だなあ。

そんなに強いのかな。

「今日のドードー討伐のスコア。ハルカラー羽、俺とユスタスが五羽ずつ」

全員、かなりの腕らしい。

ハルカラちゃんも強い！

カッコいい！

素敵！

「で、ランが十二羽」

「……は？」

「素手で十二羽」

何を言ってるのか。

「素手で？」

「ああ、素手だ」

「十二羽？」

「ああ、十二羽だ」

「……」

強いつてレベルじゃない。

「いやいやいや、サムライでしょあの人」

「刀を使わないサムライもいるんだとよ……」

「いやいやいやいや」

いやいやいやいやいやいやいや。

「なんか、アイツが本気で拳繰り出すと、炎の幻覚が見えるんだよ

……」

「幻覚じゃないよ、熱かったもん」

「そうだな、熱かったしそのへんの草も焦げてたさ。でもあれは幻覚だと信じたい……」

ああ、なんだか姫と同じ匂いがする。

ひどく匂う。

「信じられないかもしれないが、本当だ。アイツは人知を越えてやる」

「……まあ、うん、信じるよ」

どうせこれもマナとかいうオチだろうし。

すごいなマナ。

都合いいなマナ。

もう私、世の中の科学で解明できないような事、大体悟った気がする。

わかんなかったら全部マナ。

それでいいんじゃないかな、もう。

「……ギルド名は？」

そんな人が決める名前なんだから、さぞかし高尚に違いない。

「むてきランちゃんズ」

駄目だこいつ。

「ふざけないで」

「ふざけて欲しくねえのはこっちだよ……」

「でもラン、無敵だよ」

「いや、『む』かうところ『てき』なしの『むてき』だからな。正しく使わないとアイツに怒られる」

「大して変わらないじゃない……」

なんてギャップだ。

あんなに凜々しいのに、「むてきランちゃんズ」だなんて。

あの人が、したり顔で「むてきランちゃんズ」だなんて。なんてギャップだ。ちよつと可愛いじゃないか。不覚にも、萌えた。

「……あ、そついえばお前に預かり物があるんだよ」  
「へ？」

誰からだろう。

「これ」

アレスは鞆から何か取り出した。

……待て。  
あれ、私の財布？

「なんかユスタスがさ、迷惑かけちまったみたいで……」  
「ユスタス、昨日ランにずっと怒られてたよ」

ああ、なるほど。

なんとなく引つ掛かっていたのは、あの人がスリだったからなのか。……ランさん本気で大変だ。

中身はちゃんと戻ってるみたいだし、まあ良かった、うん。

「……ああ、うん、戻ってくるならいいよ、大丈夫」  
「いや、本当にすまん」

「ユスタスがバカでごめんね。もうしないって言ってたから、許してあげて」

ああ、ハルカラちゃんまで謝らなくていいんだよ。

それなのに自分からだなんて、いい子だね、可愛いね。

「アイツ、ランからも盗ろつとしたらさ、返り討ちにあって……だから、もうしなれないと思う」

「うん、わかった。よろしく伝えといて」

それなら安心だ。

二度としないだろうなあ。

ありがとうランさん。

帰り際、被害届取り下げに行こう。

「さて……」

アレスが何か、ポケットから銀貨を取り出した。

それをハルカラちゃんに握らせる。

買春よくない。

「お使いだ。ハルカラ、ここに6Sある。今から俺とケイトおねーさんは大事なお話があるから、その間コルリアロールを二つ買ってきてくれ。お前とケイトおねーさんのぶんだ」

「いや、いいわよそういの」

「少し安いが迷惑料だ、気にすんな」

「お話ってどんな？」

「大人の話だ」

ほう。

大人の話、ねえ。

「わかった、行ってくる！」

「あんまり急がなくていいぞ」

ああ、走り去っていくハルカラちゃんも可愛いよ。  
密着したスパッツがボディラインを必要以上に強調して扇情的だよ。

「……………で、話って？」

「最近会ってもゆっくり話さなかったからな」

さて、ハルカラちゃんが行ってしまった今、巻き添えを気にする必要はなくなった。

「まあ座れよ、疲れんだろ」

アレスがベンチの隣をすすめる。

そこがリングか。

ああ、受けてたつ。

「はあ……………」

うつむいてため息を一つ。

どうした？

怖じ気付いたかアレス。

「単刀直入に訊くがな……………」

さあ、来い。

本気でかかってこい、アレス！

「……………お前ハルカラの事、不埒な目で見たりしてねえよな？」

なんだ、そんな事か。

「うん、見てるよ」

「死ぬか、死ぬ」

「可愛いよねハルカラちゃん。全身隈無くペロペロしたいよ。ペロペロしたあとさすさすしてやっぱりペロペロしたいよ。最高の天使」  
「死ぬ」

そんな辛辣にならなくてもいいじゃないか。

「別にいいじゃない。アンタに対して何も恥じる必要ないし。絶対手も出さないし」

「問題はそこじゃねえよ」

「器の小さい人間ねえ……」

「この場合は小さくなくても問題視するぞ」

「はぁ……これだからアンタは年端もいかない少女の素晴らしさがわからないのよね」

「わかりたくもねえよ」

「人生の九割八分損してるわよ」

「別なもんで補えるだろ」

「例えば？」

「巨乳」

「隠れ巨乳なら目の前にいるじゃない」

「確かにお前は巨乳かもしれないが女の前にはヒトじゃないから論外だ。メスウシの胸に興奮する男なぞいないからな」

「釈然としない」

はぁ……。

やっぱり、アレスとは永遠に理解しあえないのかな。

あんなに素晴らしいのに、わからないだなんて愚の骨頂だよね。

ね、ハルカラちゃん。

「大体よお、部屋のデスクのエロ本隠し用鍵付き棚、お前の中身はエメラダ様写真集だったじゃねーか……」

「違う！エメラダ様成長録vol.3と4！六歳から九歳と十歳から十二歳！」

「だったら隠さず置いときやいいだろ。んなアレなもんじゃねーし」「かなりアレな本よ！お水遊びをあそばされておらっしやる一枚なんて見ただけで達するわよ！」

「何にだよ」

「言わなくてもわかりなさいよ！」

「すまん、訊かなければ良かった」

レディに対して何を言わせる気だったんだ！いや、ヒトじゃないから論外なのか。

「だいたいアンタだって！なんだったのよアレ！六年間ブツ通して全部巨乳モノだったじゃない！」

「巨乳が好きで何が悪い！」

「ありきたりすぎるのよ！男なんて五人いれば三人は巨乳フェチじゃない！もっとオリジナリティとか無いワケ！？」

「何がオリジナリティだ！まわりの奴らはエロ本交換しまくってたがな、俺だけはハブかれた！お前が同室だったからネタには困らんだろうとな！そんな中苦労して一人で集めた巨乳モノたちをお前は侮辱するのか！」

「くっ………！」

この情熱、懐かしい。

どうやら、向こうも変わっていないようだ。

「……流石ね、流石私の認めた痴友ね」ルイムメイト

「ああ、お前ほどの変態では無いがな」

「今はもう、その言葉は褒め言葉よ」

久々の痴友とのぶつかり合いに、篤い握手を交わす。ルイムメイト

六年間切磋琢磨してきた、まさに好敵手と称え合うことのできる存在。

それが、私にとってのアレス。

「例えば……あ、先に妄想であつて絶対に実際には手を出さないことは私の信条だと断つておくわね。ハルカラちゃんに何かそういうこと教えようとして俗世の穢れである衣服を脱がせている時に『おねーさんって、ヘンタイさんなの？』なんて小悪魔っぽく尋ねられたらもうその時点で昇天モノですわドキドキと冷や汗で頭がおかしくなっちゃうね積み上げてきたものが一気に崩れ落ちて行くような気分で現実逃避に走っちゃういそうな感じこれについてはハルカラちゃんじゃなくて姫でもいいんだけど私的には姫はできればあんまりそういうの知らない方が心にグツと来るかなあだからこそ絶対なにをされるかわからなそうなハルカラちゃんがまさかまさかのおませさんであるほうがギャップのお陰で大興奮なワケですよそれから私はサディストと化したハルカラちゃんのなすがままにされていくの『おねーさんが私にしようとしてたこと、してあげるね』なんて言われて私は私は」

「あーわかった、わかったから世間体気にしろ」

不自然に遠ざかる通行人。

私たちに気圧されたらしい。

へっ、軟弱者が……じゃなかった、ごめんなさい。

「……まあなんだ、ハルカラの話題を振った俺がバカだったか」

「いや……なんていうか、アンタの前だと気が緩むのよ。隠す必要ないから……」  
「そうか……」

入学当初、入試での学科の成績が優秀だった私と、ほとんど実技だけで入ってきたような脳筋アレスは、寮の同じ部屋に閉じ込められた。

それ以来、二段ベッドの上がアレスで、カーテンの付いている下が私の生活を六年間。

その間、私が寝坊をするアレスを教官に怒られないように（部屋割りで連帯責任）起こしたり、勉強を教えたり、仕方なくアレスの物を片付けたり、時には何かで固まったティッシュを捨てたりと、プライベートも何もない暮らしをしていた。

その結果、もはや何も隠す必要の無い、痴友が出来上がった。そう、出来上がってしまった。

「謝るわ……」

「すまん……」

互いに知らないことなんか何も無い。

そうだったアレの趣向だって、ちゃんと理解している。

「……でさ、」

「あ？」

グダグダ話す必要は無い仲だけど聞きたいことはそれなりにある。二人で話すのは久しぶりなのだから。

「ハルカラちゃん、なんでアンタが世話してるワケ？」

「またハルカラの話かよ……」

「大丈夫、自制するから」  
「あー……」

ルシエと人なら、親戚という訳じゃないし……いや、複雑な家庭ならあり得るけど、そんな筈はないし。

こんな男が、十一歳の女の子と一緒に行動してるのはすこし違和感がある。

しかもなついてるし。

「……アイツなあ、なんか、ハイレインっつー西大陸の村から来たらしいんだよ」

「ハイレイン……」

武村ハイレイン。

知っている。

西大陸では珍しく、アイゼン系の住民が多いんだっけ。

多くのハントマンが修行に赴くだとか、なんとか。

「なんか、強くなるためにハントマンになるよう言われて、カザンに渡ってきたらしいんだが、親御さん、少し路銀を少なく持たせちまったみたいで……腹空かせてるところを、俺とランが拾った……つてとこだな」

「ほほうなんとも羨ましい。いいなあ」

まあ、それっばい。

いかにも、な出会いだなあ。

「ちつとも良くねえよ。アイツすげえ食う」

「食べ盛り伸び盛りでしょ？」

「そうだがな、あの体で俺より食うつてのはおかしいだろ。しかも

肉ばかり」

「なんか、ハルカラちゃんらしいっていうか……」

「ちなみにランはハルカラの二倍は食う」

あ、ランさん食いしん坊なんだ。

ギャップ、萌える。

「でもラン、酒は飲まん。弱いらしい」

更に萌えプラス。

「ランさん、意外と可愛いわね……」

「恐怖の対象だぞ？」

「そこがまたいいんじゃない」

ま、素人にはわかんないだろうけどね。

「まあ、二人とも食い扶持は自分で稼いでるからいいんだがな……」

「ハルカラちゃん、強いもんね」

「どうやってあの剣振り回してんのか……」

「やっぱり重いのか？」

「大人用の両手剣だぞ？モメノさんだったら持ち上げることも難しいんじゃないか？」

「まあ、ね……」

「バケモノじゃねーかと思うぞ俺は」

あーあーはいはい。

どーせまたマナなんですよ。

はいはい万能万能。

オールマイティ。

「でも、いい拾い物したわね」

「ああ、アイツは未来のランニ号だよ。強くなる」

「いや、そうじゃないって」

私が話してるのは、そんなことじゃない。

「……胸、きつと大きくなる」

「あーわかったわかった」

「私にとってはは悲しいけど、アンタなら素直に喜んであげられるでしょ？……しつかり、近くで成長を見届けてあげて」

「もう胸の話はしなくていいぞ」

少女は育ってしまつう。

恥じらいを秘めつつ、青く小さなつばみを開いてしまつう。  
でも、それが運命。

逆らうことなど出来ない、女性へと変わり行くチカラ。

永遠など存在せず、あるのはただ、無常のみ。

だからこそ、少女である今を大切にしておきたい。

綺麗な花弁を一枚ずつ必死で開こうともがく、今を大切にしておきたい。

だから、ハルカラちゃん。

あなたは、あなたの好きなように成長してね。

自由に、その花を開いてね。

「でもね、ハルカラちゃん。これだけは忘れないで……」

「自制効いてねえぞ」

「……」

危ない危ない。

ギリギリセーフかな。

「どう思う？」

「アウトだな」

「ごめん、謝るわ」

「おう」

アウトだったかあ。

コードには引っ掛かってないから大丈夫だと思ったんだけどね。

「……で、」

「うん？」

閑話休題。

「お前の雇い主さん、どうしてお前雇ったんだ？」

またそれが。

母さんにも聞かれたから、それ。

「あーもう……斯々然々！以上！」

「それが通用するのは文章上のみだ。わかんねえよ」

「私だつてわかんないわよ。……それに、さつき実家でも散々聞かされたし」

「帰ったのか？」

「騎士号取りにね」

まあ姫については、上手くいけばそのうちわかるだろうし。本人に言わせてみれば、思い知らず事になるだろうし。

「……親父さん、どうなんだ？」

「相変わらず。今日も私の顔見るなり、出て行っちゃったし」「  
「そうか……」

別に、そんなこと心配しなくていいのに。  
いつまで学生気分でいるつもりなんだろう。  
そういうのは、今は私の問題だ。

「気にしなくていい、大したことじゃないし」

「お前のそれは信用ならないからなあ……」

「今はもう別のギルドなんだから、関係無いわよ」

なんて、言葉に出したら、途端に喪失感が溢れてきた。

今はもう上のベッドにアレスが寝てるなんて事はないし、毎日のように変態話に花を咲かせることもない。  
当たり前か。

六年間も過ごしたんだし。

でもなんだかモヤモヤとしていて、俯いてしまう。

「……なあ」

「なに？」

「お前、まだあの学校選んだこと、後悔してるのか？」  
「……」

少し、濁そうかと思ったけど、やめた。

濁せば濁すほど、核心を突いてくる男だから。

「……アンタにも迷惑かけたし、やっぱり後悔してるよ、それは。  
在学中一度も襲われなかったのは、アンタのお陰だし、感謝もして  
る」

「ヒトじゃねえから襲う気にもならなかっただけじゃねえの」  
「この期に及んで何言ってるんだか……」

ただ「女子と相部屋」なだけで、アレスはよく上の年次（特に騎士道を軽率するバカ）から目を付けられていた。

学年では、身体能力がずば抜けていた（加えて、私の異常な性的趣向のあることないことがまことしやかに囁かれていたのもある）からそうはならなかったけど、上級生には通用しない。

乱闘騒ぎになった時なんかは、毎回ボロボロになって部屋に帰ってきていた。

アレスは頭は悪いけどバカではないから、喧嘩なんて吹っ掛ける訳もないし、きっと私が原因だって言うのは理解してた。

きつと迷惑だったに違いないのに、いつも私には関係無いように構えていた。

多分、氣遣ってくれてたんだと思う。

仕方ないから、よく医務室に連れて行って手当てをしたのをきちんとして覚えている。

「……でも今は満足してる。普通の女の子の道は、私には刺激が強すぎたかもしれないし」

「そっち選べば、真人間になれたんじゃねえの」

「私は乙女だから無理」

「誰が乙女だ」

「結局、ロマンチストなのは男なんだから、乙女と大して変わらなのよ。なんにしても、乙女の私に悪い意味でキャピキャピした女の子たちの輪に交じるのは無理な注文よ」

「ちゃんとした本心だ。」

途中で退学していたら、きつとアレスに対する罪悪感だけ残ってただろうから。

卒業した今なら、アレスにとっても後味の悪いものになっていないだろうし。

今でもわざわざありがた迷惑に心配してくれるのが、何よりの証拠。

「でもお前は乙女じゃねえよ」

「まあね。乙女を追うのが男と言う名のロマンスだ。つまり男が乙女なら、私は男とも乙女とも違う、乙女ハンターなのだから」

「意味わからん」

「素人には理解できないのよ」

でも、もう別だ。

「……まあ、心配してくれてありがとう」

「気にすんな」

「でも、今は私じゃなくて、もっと心配すべき対象がいるでしょ？」

「はあ？」

丁度、ハルカラちゃんがお使いを終え、こっちに向かって歩いてきていた。

その手には、三つのコルリアロール。

「ハルカラ、アイツ……二つでいいって言ったのに」

「だいぶ好かれてるわね」

「言われた通りに買わんとお使いの意味がねえよ」

6Sじゃ二つしか買えないはずなのに、どんな魔法を使ったんだろう。

潰してしまわないように、逸る気持ちを抑えてゆっくり向かってくる。

「今は私じゃなくて、本物の乙女を心配するべき」

「アイツが乙女ねえ……」

「いいじゃない、胸、大きくなりそうだし」

「やかましい」

でも、胸とか関係無しに、アレスならきちんと面倒は見るだろう。

だらしない男だけど、そこはランさんとハルカラちゃんに任せるとしよう。

数年後、二人が幸せそうにしているのが、なんだか容易に想像できた。

## 大神様

「ん？狼だつて？」

いまだハッキリと夢から醒めないイクラクンを抱え、部屋に鍵をかけながらナムナは聞き返した。

「ええ。アイゼン領から山脈を越えてこちらに来ていると聞いたものだから、あなたなら何か対策を知っているかと思つて」

「討伐するの？」

「ええ」

今朝はイクラクンがどうにも抱き付いたまま起きなかつたので、ケイトとモモメノだけクエストオフィスにて依頼を受理しに行く事になった。

ブルーウルフが人里に下りてきているだから割の良い物があつたので、ポーアに止められながらもモモメノが即決した。

報酬は80G。

結構な額である。

しかしケイトには、一抹の不安があつた。

いくらこちらに優れた人物がいようと、相手は群れた狼なのだ。

割の良い仕事には、それなりのリスクが付きまとう。

「そつだなあ……姐さん、こっち側に狼来るのは珍しいのかい？」

「滅多に……」

「そうかあ。……ナワバリでも追われた一味が、単に迷い込んできたか……どっちにしろ、腹は減らしてるだろうねえ……」

冷静な判断に、ケイトは少し驚く。

「ナムナ、狩ったことあるの……?」

「ああ、農家にとつて狼は天敵だからなあ。村に下りてきたら、どうにかして仕留めないとならないから、経験はあるんだよ。サイモンのサムライなんて、アタイの家くらいしかなかったからなあ……」

愕然とする。

ナムナならあるいは……とケイトは思っていたのだが、どうやら怖がっているのは自分だけではないか。

手続きをする際に姫に忠告したのだが、「問題ないわ」の一言でかわされてしまった。

「やつらは臆病なんだが、腹が減ると急に狂暴になるんだ。そうないと、人でもなんでも襲われちまうよ。脅しは効かないね」

「始末するしかないわね」

「ああ。人間様のナワバリに入ってきた以上、神様だろうがなんだろうが斬るしかないねえ」

ナムナは寝たままのイクラクンを引きずりながら歩くが、目の前には階段だ。

さて、どうしたものか。

「神?」

「狼は山の神様さね。あ、姐さん刀を頼むよ」

「え、うん……」

言われるがまま受け取ると、思いの外非常に重量がある。

両手で扱うものと考えれば、なんとなく頷けるか。

イクラクンの向きを変えると、ナムナはそのまま、いわゆるお姫さまだっこの形で抱え上げた。

「んしょつと……。ずーつと昔のアイゼンは牛やら羊なんてほとんど飼ってなかったから、肉を食べる狼より、植物を食べるムジナの方が悪者だったんだよ」

そして何事もなく会話を続ける。

ケイトと違って、流石のリアルお姉ちゃんである。

「つまり、そのムジナを狩るブルーウルフは、益獣として崇められ、神格化したってことね？」

「エキジユウ？シンカクカ？」

「姫が言ってるのは、いい動物だから人から尊敬されて、神様になったの？ってこと」

「んー、そんな感じだなあ。アタイが経験したことじゃないからわかんないけどねえ……。つと！」

段差が思ったより大きかったようで、バランスを崩しそうになる。なんとか手すりにもたれて大惨事は免れたが、なんともスリリングである。

「だ、大丈夫ナムナ？」

「なんとか……」

「手伝おうか？」

「いや、姐さんの手を煩わせるなんてしないよ。コイツはアタイが面倒みないと」

「無理しないでね……」

「大丈夫大丈夫」

ナムナは一段ずつ、ゆっくりと足を進めていく。見ているケイトにはハラハラものだ。

そんなことなどつゆ知らず、イクラクンはいまだに夢の中。

余程ナムナに抱かれているのが落ち着くのか、とても安らかな寝顔だ。

狸寝入りかも知れないと思ったが、姫が何らかのアクションを起こさないことを考えると、どうやら大まじめに寝ているらしい。

今日から本格始動だというのに、なんとも能天気である。

「……それで、ナムナ。具体的な対策について、なにか無いかしら」「んーそうだなあ……『狼は牙ではなく脚で獲物を捕らえる』って言葉があるんだよ」

「脚……」

「他の動物に比べて飛び抜けて速くはないが、どこまでもどこまでも追いかけて回してくる。引き離しても、臭いですぐバレるんだ」

「……私もいるし、持久戦になると辛いわね」

そんなモモメノの弱音ともとれる発言は、ケイトの不安を大きなものにした。

そんな、姫が弱気だったら、いったい私に何ができるのだ。

「弓矢か鉄砲でも無い限り、こつちから狩るってのは無理だねえ」

「今回は向こうから来るのでしょうか？」

「うー……それがなあ、やつらは獲物を見つけたら、うまいこと群で取り囲むんだよ。……そうなると、人間なんて羊や牛と大して変わんないよ」

「狩られる獣ではなく、狩る獣だものね……」

討伐目標の狩りの対象になるのは、絶対に避けたい所だ。

相手は狼だ、下手すれば大ケガどころでは済まない。

もう少し安全なクエストならいくらでもあったのに、どうしてこんな危険なものを選んだものか。

「だからこそ山の神様さね。山で一番強くて偉いからなあ。サイモンの近くの山には狼を祀ってる神社がたくさんあるんだよ」

「……でも、ひとたび山から下りてきたら、それはもう神ではないのでしょう？」

「ああ、今となつちや、一番強くて偉いのは人間様になつちまつたからなあ……」

階段の最後の一段を降りきり、抱えていたイクラクンを下ろす。

そしてそのまま、抱き付かせて引きずるスタイルに以降。

その間三秒。

これぞリアルお姉ちゃんテクニクである。

「姐さんありがとう。もういいよ」

「いや……そのままでもいいの？」

「起こそうとしても無駄なら、待つしかないよ」

互いに苦笑いをしながら刀を持ち主へ返す。

寝ていようが、まるで磁石のように抱き付いたまま離れないので、とりあえず引きずって連れていく事はできるのだ。

ナムナはそのまま、引きずりながらカウンターへ。

「女将さん、鍵預けるよ」

「……後ろの子、大丈夫なのかい？」

「ああ、どうにもアタイから離れないから、好きにしてやってるんだよ」

ああ、ナムナ本当にお姉ちゃんなんだね。

けー姉寂しいよ。

ナムナもあんな風にけー姉に甘えていいのに、できないんだもんね。

寂しいよ。

「……ケイトちゃん、着込んでるってことは、討伐にでも行くのかい？」

「ええ、狼が出たとの話なので……」

「悪いこと言わないから、自分の身の丈にあった仕事しなさいよ」

もつともな意見である。

ケイトを知ってる人間であれば、誰もが止めるだろう。

しかしそれはできない。

姫には従わなければならぬのが騎士なのだ。

「心配ないわ。夕食のエビフライの予約、301号室で4つお願いするわね」

「そうかい、わかったよ。頑張ってくださいなさいね」

できればもっと引き止めて欲しかったと言うのが、ケイトの心情である。

姫についていけばどうにかなりそうなのだが、どんな経験をすることになるのかさっぱりわからない。

痛いのと怖いのはできれば避けたいのが普通の神経をした人間である。

「行つてきます……」

「気を付けるんだよ」

ドアを開け、押さえながらモモメノとナムナを先に通す。

騎士（姉）道である。

引きずっているイクラクンの足を挟まないようにドアを閉めるのもたしなみの一つだ。

「それで、どうするんだいボス」

「詳しい話はイクラクンが起きてからよ」

「もう作戦は完成したのかい？」

「ええ、まずは買い物ね」

不敵な笑みを浮かべながら、モモメノは言う。

「姫、何を買うのですか？」

「そうね、ナムナとイクラクンの朝食と……」

とりあえず、姫の策に外れは無いのだ。

大船に乗った気持ちでいればいい。

「……生肉よ」

ケイトの乗った大船は処女航海すら済ます前に沈没した。

## 盾と剣と生肉

騎士は一人、林の中に佇んでいた。

左手に盾、右手にとびきり臭いのキツイ羊の生肉。

青ざめ、こわばった顔も相まって、非常にシュールな光景である。

生肉を買いに行く<sup>と聞いて</sup>からものすごく悪い予感しかしていなかったが、まさか自分が<sup>さため</sup>厄として扱われるとは。

いや、これが騎士の運命なのかもしれない。

地獄を見れば心が乾き、さだめとあれば心を決める。

それが騎士なのだ。

「はは、ははは……ゲホッ！」

肉のにおいしみついで。

むせる。

笑えない。

姫からは「耐えなさい」との一言をもらったが、流石に無謀すぎる。ウドのコーヒー以上に苦い。

鎧を着込んで、盾を持っている<sup>とは言え</sup>、相手は群れた狼。

人間など襲って剥いでしまえば、右手に載せてある生肉と変わらない。  
い。

助かるだろうか。

助かってもただでは済まない気がする。

駄目か。

駄目だ。

じゃあ現実逃避。

「……………」

ああ、ここはなんて素敵な林なんだろう。

木漏れ日は温かく、風は優しい。

いつか姫と一緒にこんな所でピクニックをしたいなあ。

初めて姫と会った日の、あの池の畔のような場所を見つけて、お弁当を食べるのだ。

けー姉、けー姉のためにお弁当作ったよ。

ありがとう、頑張ってくれたんだね。

うん、いっぱい練習したよ。

モメノはいい子だね、えらいえらい。

えへへ、けー姉食べさせてあげるね。

本当に？

うん、あーんして。

あーん。

なんて。

なんて、いいではないか。

しかしこれでは、姫の姫っぽさが全く表現できていないのでは？  
よろしい、ならば姫っぽさを十分に再現するだけだ。

ケイト、あなたのためにお弁当を作ったわ。

ありがとうございます、私のために頑張ってくれたんですね。

そうでもないわ。

そうなんですか？

あなたのために作っていると言うことを考えれば、不思議ととても  
楽しかったのよ。

そうですね、嬉しいです。

口に合えばいいのだけど。

姫の作ってくれたお弁当ならきつと美味しいですよ。

あなたにそう言ってもらえると心強いわ。  
ふふ、じゃあ食べましょうか。  
待ちなさいケイト、食べさせてあげるわ。  
そんな、大丈夫ですよ。  
たまには私に甘えなさい。  
わかりました、ご命令とあれば。  
そう、いい子ねケイト。  
ありがとうございます。  
ほら、口を開けなさい、あーん。  
あーん。

なんて。

なんて、いいではないか。

そのまま甘えて、姫に膝枕をねだれる流れだった。

なかなか素晴らしいシミュレートができた。

素敵だ。

本当にこの林は素敵だ。

そんな甘い甘い一時を過ごすにはもってこいだ。

小鳥はさえずり、木々は優しく囁き、遠くから狼の断末魔も聞こえる。

ひどい肉のおいだっする。

鳥たちのざわめきが大きくなった。

「ああ………」

一気に現実に引き戻される。

そう、ここは狩場。

ケイトが囿となって狼を引き付け、連携のために散らばった所を待ち伏せしていた三人が各個撃破するのが今回の作戦。

断末魔が聞こえたと言うことは、一応予定通りにいっているとと言う

ことか。

あの三人なら大丈夫、一番心配なナムナだって経験者だ。今心配すべきは己の身。

取りこぼした狼が、餌に向かって猛進してくるのは火を見るより明らかである。

大丈夫だ。

首尾良く三人が片付けてくれれば、援護に回ってくれる。

問題は、どの方向から何匹突っ込んでくるかだ。

「……」

作戦はとうに始まっている。

今さら逃げることはできない。

与えられた役割を途中で投げ出すのは、騎士道に背く行為だ。

自分の騎士号はハツタリか。

いいや違う、紛れもない本物だ。

ならば、それに恥じない道を貫くだけだ。

「どこから来る、どこから……」

五感を研ぎ澄まし、集中する。

方向さえわかれば、取りこぼしの数匹くらいはどうにかなる。ナムナが言っていた。

ブルーウルフは小柄な種類で、野良犬に毛が生えた程度だと。

狂暴で危険ではあるが、こちらとて丸腰ではない。

盾に剣、新しい鎧だつて着込んでいる。

三人はケイトよりずっと軽装なのだ。

これでやられてしまつては、ナムナにすら笑われてしまふ。

「さあ、来い……！」

不穏な雰囲気を察知した鳥たちがこの近辺から離れていく。動物たちのいなくなった林を、不気味な静寂が包んだ。

完全な孤独の中、ケイトは敵を感知しようと気を張りつめる。

その時、遠くから四足歩行の足音が聞こえた。

ガサガサと草を掻き分けながら、一定のリズムで鋭い爪を鳴らし、確実にこちらへと向かって来る。

方向は、どちらから。

「……右!？」

いや、違う。

微かに逆からも聞こえるのだ。

複数匹が来る。

まずは右から一匹だけ。

一旦引けば同じ方向にまとめることができるが、狼を引き付けるのが本来の役割である以上、それはできない。

地面に羊肉を叩き付け、鞘から剣を抜き取る。

方向を変え、今一度集中しなおす。

地を掴む足音が、確実に近付いてくる。

思い出せ。

マナを使うのに必要なのは、想像力と集中力。

揺れる草影がケイトに近付く。

まだまだ、姿を見せるまで。ギリギリまで粘り、引き付けてから。

やがて揺れは草むらの終わりに達し、それと同時に狼が姿を表した。今だ。

「らあ、あッ!」

凄まじい勢いでケイトに向かって突っ込んできた狼は、まるでゴム

毬が壁にぶつかつたかのように吹っ飛んだ。  
そのまま真後ろの細い木に頭をぶつけ、地に横たわる。  
その間、ケイトにはスローモーションに見えた。  
できたじゃないか。

「なんだ……できるよ、私……」

当たり所が悪かつたのか、白目を剥いて四肢をピクピクと痙攣させている狼を見ながらケイトは呟く。

これなら、狼なんて余裕だ。

さあ、次は逆から数匹が来る。

回れ右して、迎え撃つ。

近くの草むらが激しく揺れ、間髪入れずに一匹が飛び出してきた。

ケイトは先ほどと同様に盾を作ろうとする。

「ええっ……!?!」

できない。

なぜ。

狼そのまま、ケイトの盾に噛みついた。

「どっして、このっ!」

樫材に縁を金属で覆っただけの盾は、メリメリと音を立てながら強く引っ張られる。

剣で叩き斬ろうと右腕を伸ばすが体勢を崩されてどうにも届かない。

「放せッ……!」

右足で踏ん張って引っ張り返すが、盾を固定しているベルトの部分

が食い込んで痛むだけで、どうにもならない。  
いつそのことベルトを外し盾を捨てて戦おうかと考えた時、また一匹の狼が唐突に草むらから現れた。

「うぐっ……」

今度は右腕、ガントレットに喰らい付く。

幸い、金属部分だったため喰われずには済んだが、双方向から引かれ、振られ、腕が千切れそうになる。

盾のベルトを外そうにも、右手まで塞がってはそれもできない。

「ど、どうすれば……」

万事休すか、と思ったその時、盾が大きな音を立てて二つに壊れた。盾に噛みついてた狼は勢い余って後ろに吹っ飛ぶ。

左腕の自由が戻り、好機を手に入れたケイトは、壊れた盾の縁で勢い任せに右側の狼の脇腹を突いた。

「いい加減放せッ！」

ギヤインと苦しそうな声を発し、真横に吹っ飛んで行く。

しかし、これで終わりではない。

体勢を取り直した二匹の狼が、今度はケイトの喉笛を狙って同時に襲い掛かる。

咄嗟に盾で守るが、半壊状態のそれでは二匹分の衝撃に耐えることはできず、バラバラに砕け散った。

ケイトも踏ん張りきれず、そのまま倒れてしまう。

その拍子に、剣まで手から放してしまった。

一瞬にして、ケイトは狼の前で丸腰になってしまったのだ。

「嫌、嫌だ……」

狼たちに追い詰められ、死を覚悟した。

今まさに頸動脈へと噛み付かんとする狼の挙動がコマ送りで見える。本能的な恐れから、目を瞑り、手を突き出した。

その時だった。

「……何？」

目の前で大きな破裂音が鳴り、狼たちが突き飛ばされていく。

いや、自分が突き飛ばしたのだとケイトは悟った。

盾を作った時と似た感覚が、手のひらに残っている。

こうしちゃいられない。

相手はまだやる気なのだ、剣を取らなくては。

傍らに落ちている剣を拾おうとするが、全身に力が入らない。

そうこうしているうちに、狼たちがもう一度アタックをしかける。

ああ、もうだめか。

諦めかけた時、何か光る弾丸のようなものが狼たちの脳天を貫いた。

絶命し、そのまま倒れ込む。

ああ、助かったのか。

「姐さん！」

背後から声が聴こえる。

力を振り絞って必死で振り向くと、そこには一番最初に相手をした狼を見事に真っ二つにしているナムナがいた。

あの狼、気が付いていたのか。

「……手負いの獣が一番狂暴だ。トドメはすぐに刺しなよ」

返り血で真っ赤に染まり、血塗れの刀を携えたナムナは、まるで人が変わったようだった。

いつもの健気な少女ではなく、戦士であり、サムライの面構えをしていた。

軽い恐怖を覚える。

だが、これがハントマンの仕事だ。

「今ので全て殲滅したようね」

「ケイちゃん、だいじょぶだった？」

遅れて、二人が来る。

何食わぬ顔で会話しているが、きっとナムナと同じように狼を殺したのだろう。

もはや、この三人がわからない。

「戦果報告。ナムナから」

「今の含めて七匹だよ」

「結構。見込みは当たったわ。次」

「いくらくんさんじゅういっぴき」

「紛らわしいわ」

「十一匹」

「あなたにとってはもう少し開けた所の方がやりやすかったかしらね」

「そだね」

「でも、さすがの腕ね」

「ありがと、あとでちゅーしてあげる」

「嫌よ。私が七匹で、二十五匹ね……」

依然として起き上がれないケイトの傍に、モメメノが腰掛ける。

噛み付かれてボロボロになったガントレットを脱がせ、手を診なが

ら言っ。

「怪我はないようね」

「はい、なんとか……」

「……どうしてこうなったか、わかるかしら？」

「え……」

どうして？

そんなのは、自分の技術不足に決まっている。

「わ、私の腕が……」

「違うわ」

呆れたようにため息を一つ。

「まあいいわ、教えてあげる」と前置きして、続けた。

「狼を早々に片付けて、あなたの様子を見ていたのよ。あなた、二度目はできなかったでしょう？」

「はい……」

「あなたがあの時マナを使えなかった理由。一言で表すならば、そうね、慢心よ」

慢心？

「あなたは一匹目の撃退に成功し、気が緩んでいた……そうでしょうっ？」

「……」

「教えたはずよ。マナを使うのに必要なのは、想像力と集中力」

そうか、そうだったのか。

ようやく理解したケイトは、同時にとても自分が情けなく感じた。どうして途中で油断してしまったのだろう。もし一人で戦っていたら、今頃羊肉と同じくになっていた。なんて間抜けなんだ。

「……でも、よくやったわ。上出来よ」

そう言いながら、ケイトを膝枕する。

「あなたが驕り上がってしまう前に、一度怖い目にあわせておこうかと思っていたのよ。危なくなったら、イクラクンがギリギリで仕留める予定だったわ」

「十分、怖かったです……」

「そうね。……予定と違って、あなたが咄嗟にあんな強力な盾を作るとは思っていなかったのだけどね」

「そんなに、ですか……?」

「ええ。今あなたが反動で動けなくなっているのが証拠だわ。イクラクンの狙撃すら遮ったもの」

「でしょう?」と目を遣る。

スナイパーもうんうんとうなずき、満足げだ。

ナムナムニコニコしているのを見るに、裏で話を合わせていたようだ。

してやられた。

「……でも、無茶はしないようになさい。今は加減ができないのもあるだろうけど、あんなマナの使い方は身体を壊すわ」

「無茶なのは姫ですよ……」

「無茶ではなく、計算尽くよ。十分もすれば動けるようになるわ。

それまで、私の膝で休みなさい」

「はい……」

モモメノは優しく頬を撫でる。

ああ、これが狼狩りではなく、ピクニックだったらいいのに。

柔らかな太ももと暖かな手のひらの感触を堪能しながら、ケイトはマナがどうとかではなくそんなことを考えていた。

## 災いの予兆

「んー……」

クエストオフィスにて、きれいにまとめ上げられたレポートに目を通しながらボーアは唸っていた。

同僚のエフィに頼んでいたものがようやく完成したのだ。

「……うん、よくできてる。ありがとね」

「気にするな。暇なだけだ」

「暇なのはお互い様だよ」

「ああ」

「暇だね……」

「暇だな……」

昼下がりとなると、クエストオフィスに顧客は少なくなる。

朝夕の混雑期を除けば、後は簡単な事務仕事とたまに来る依頼の受理をこなすだけなのだ。

ただしこれはクエストオフィスのみの話で、道を挟んで隣の建物の裏方などは猫の手も借りたいような状態らしい。

ボーアは民間の依頼を受け付けるためにオフィスに残らなければならないが、大統領府からのミッションを幹旋するエフィは平時には常に暇をしている。

そのため、比較的人手の足りていないギルドオフィスや大統領府内の雑務やら何やらをしているのが普通だ。

公務員なのでいくら働いても給料は固定なのだが、生真面目な性格ゆえに動かすにはいられないらしい。

そこにつけこんで、今回ボーアは個人的な情報収集を頼んだのだ。

「……で、エフィはこれ、どう思う？」

「お前の予想通り、最近三ヶ月で異常な増え方だ」

「何かいやーな感じがしない？」

「……人が多く亡くなれば、嫌な気分になるのは当たり前だろう」

今回、エフィに依頼したものを。

それは、ここ一年間のハントマンの死亡者及び行方不明者リストの作成と、討伐依頼に関する各種データのグラフ化だった。

「そうじゃないよ。変な事が起こりそうじゃない？世界がどんどんねじれて、なんだかでっかい悪さの予感がさー」

「行くぜメガ、変わるぜメガ。退屈とはおさらばさ」

「いや、ふざけてないで、わりと本気。サーフィンしない」

ここ最近、野性動物討伐のクエストは急増していた。

去年の同じ時期に比べて約四倍もの数である。

本来はカザン領に存在しないはずのオオシシヤードードー、マッドレオなどが多数流入してきており、環境のみならず作物や家畜にまで被害がおよんでいるのだ。

それに比例して、その動物たちの駆除に向かったハントマンが、不幸にも帰らぬ人となるケースも増えている。

そう言った稼業ゆえに事故は付き物であるが、サポートする立場にある身としては、少し辛いものがある。

「確かに、『たまたま』と説明するには難しい結果になったな」

「大統領府からの情報もまだないけど、まさかメナスさんやエランさんが気付いてないって訳じゃないよね」

「意図的に隠蔽しているんだろうが……断言するには情報不足か」

やはり国民を徒に不安にさせるような事は避けたいのだろう。

懸命な判断と言えるが、どこから情報が洩れて尾ヒレがつけば、大きな混乱は免れない。

このレポートが示しているのは、噴火か、地震か、それらとは比にならない大災厄なのか。

地図上に点で示された現場を指でなぞりながら、さまざまな憶測を結びつける。

レポートから今わかるのは、ロラツカ地方に良くない事が起こっていることだけだ。

「……ねーエフィ、ロラツカ森林、ミロスの騎士団が封鎖してるって噂、知ってる？」

「ああ。人体に対して強い毒性のある新種の植物が大量発生したとかいう話だな。プレロマの学士も現地赶赴しているらしい。一週ほど前、大統領府の書類をシュレツダーにかけている時に偶然目に入った。メナスさんのサインもあつたし、信用できる情報だ」

毒性の強い植物。

初めて聞く情報だ。

それが真実の情報なのであれば、ロラツカ森林から動物が流出するには十分な素材である。

「お手伝いお疲れさま。でもそれ守秘義務違反じゃないの？10G以下の罰金」

「気にするな。暇なだけだ」

「うん、暇だし別にいいよね」

「ああ」

そう、大統領府が暇を与えているのが悪いのだ。

いつだって情報漏洩は暇な職員から起こる。

漏らす気は更々無いが。

「……で、エフィ。その植物ってどんななの？」

「目下調査中なんだろう。詳しい事は記載されていなかった」

「ふーん……」

まあ、それはそうか。と、息をつく。

現状、どれほどの物かはわからないが、これが原因と考えて良さそう  
うだ。

立ち入りが禁止されるほどのものならば、おそらく孢子や花粉に有害な物質が含まれているのか。

拡散距離にもよるが、ロラツカ地方から放出されれば恒常風の風下にあたるミロスにはかなりの被害が予想されるだろう。

それから、今まで発見されていなかったような珍しい植物が唐突に大量発生するという不可解な現象だっ  
て起こっている。

繁殖力はそこのものとは訳が違うのだろう。

「……その植物、突然世界中に広まっちゃったらどうなるかな？」

「生態についてはまだわからないが……素人考えだが、毒の被害は甚大だろうな。水資源の枯渇も考えられる」

「エデン規模で、大変なことになるかも……ね。まずいよ」

危機は、ポーアの予想以上に近くまで来ていた。

一介の公務員にはどうにもならないほどに膨れ上がっている。

どうしたものか。

「……とりあえず、この資料をもう少し詳しくまとめてからメナスさんに突撃してみるよ」

「くれぐれも俺の名前は出さないでおいでくれ」

「うん、その辺大丈夫。指紋も消す」

もしどこからか情報が流出してしまえば、面倒くさいことになってしまうことは必至だ。

エフィを巻き込むのは、どうにもボーアのやり方にはそぐわない。しかし、それにしても、打つ手は何かあるのだろうか。

森を焼けば根絶することも不可能ではないが、それでは動物たちが居住地を完全に失い、今以上に死者が増えるのは目に見えている。トドワ地方には肉食獣が多いため、多くはカザン方面へ向かってくることになるだろう。

そんな大群が小さな集落を襲えばどうなるか。

なかなか厄介な問題だ。

ため息を吐きながら、ロラツカから橋を経由し、カザンへと指を滑らせる。

ただでさえ野生動物が堂々と闊歩するこの橋の交通事情も更にひどくなるかも知れない。

「……ところで」

「うーん？」

突然、エフィが話題を提起する。

見れば、断りもせずいつものまにか勝手にコーヒーを淹れていた。

「例の娘、最近来ないな」

「例のつて、ケイト？」

「ああ」

ケイトもハントマンなのだから、いつも油を売っているわけではない。

と、言いたいところだが、実際少し前まであまりにも残念な状態だったので、エフィもエフィで違和感があったのだろう。

「んー、ケイト今、雇われてるんだよ」

「ほう、見つかったのか」

「うん。月30Gで」

「俺たちより高いじゃないか」

「だって僕ら暇だし」

「暇だな」

「暇だね」

淹れたてのコーヒーを差し出され、目で例を言う。

給料相応の仕事をしているのだから、文句は言えない。

「それで、その雇い主さんがさ、十一歳の女の子なんだよね」

「冗談はよせ」

「いや、マジマジ、大真面目」

まあ、普通は信じられる方がおかしいだろう。

ポーアも初めて相手した時は、あまりの精神年齢の高さに驚きを隠せなかったのだ。

それに加えて、自称ハントマンなのだ。

十代前半のハントマン自体は別に少ないわけでもないが、あんなに育ちの良い子供は普通カザンの繁華街にすら近寄らない。

この周辺はお世辞にも治安は良いとは言えないため、普通ならば親の方が近寄らせない。

「その女の子がさ、なんていうかどっかのお嬢様みたいで……そんなでもってなんかすごく頭いいんだよ。天才」

「ふざけるのも大概にしる」

「いや、マジマジ、大真面目。真実は小説よりも奇なり」

「メタ発言していいか」

「うん、だめー」

言うてはいけないことだつてある。

「それで、ケイトはボディガードとして雇われたんだよ」

「アレがか？」

「うん、アレが。人選ミスってるよね」

「しかし、それでもあの娘は『野獣殺しのレオ』の一人娘だろう？」

「『デコのヒタイのモイコ』の一人娘でもあるよ」

「……誰だ」

「またの名を『ロックマツシャー』。昔結構有名だったじゃん」

「……ああ、デコのヒタイだな」

「デコのヒタイでしょ？」

少なくとも猫の額ではないことは確かだ。

あのデコは、広い。

二人の中での共通認識である。

「まあ、今となつては『ミロス王立騎士学校逆首席卒業のダメダメ女騎士ケイト』の方が有名だからね」

「期待が大きすぎたな」

「んーでも、ケイトはそこまで……ってわけじゃないよ。ケイトが雇われた次の日に、オオシシを一人で撃退しようとするサムライの娘が来たんだよ。さすがに止めようと思ったんだけど、勝手に勝ちちゃつてさ」

「新米にはよくあることだろう。彼女は自信が無すぎるだけだ」  
「いやいや、まだ続くよ。その娘が行ったすぐあと、ケイトと雇い主さんが来て、さっきの娘を追いかけてるって。オオシシ撃退しに行つたつて言つたら、そのまま茶も飲まずに救援に向かつちゃつて……。で、しばらくしたら、サムライの娘が半泣きでケイトにしがみつきなから帰ってきたよ。ちゃんと依頼はこなして、ね……」

「……すまん、理解できない。俺は頭が悪くなったのかもしれない」  
「心配しないで、僕もだから」

さすがのボーアもあの時は頭か目がおかしくなったのかと思った。どうみてもいたって普通（お嬢様の時点で普通ではないが）のお嬢様と、あのケイトが立派に依頼をこなしたのだ。空から槍が降ってもおかしくない。

「それで、そのサムライの娘も雇われたみたいで、あともう一人捕まえて、四人で『バルキュリー』だかいうギルド立ち上げたんだって」

「どこから嘘だ」

「嘘だと信じたいよね……。でも残念ながら、今日から彼女ら本格始動らしくてさ。……狼狩りに行っちゃったよ。僕、止めたのに」

今までより深いため息を吐き、ボーアは進行中の依頼リストを手に取り。

その中にあるバルキュリーの部分をエフィに指で示して見せた。

「……心配か？」

「うん。……彼女は討伐になんて行くようなタマじゃないと思ってたから、よく接してたけど……そうこうしてたら情が移っちゃってさ」

「そうか……」

ハントマンたちと接する人間に必要なこと。

それは、絶対に彼らと心からの付き合いをしないことである。

相手はいつ死ぬかもわからない冒険者なのだから、何度も友人の死に直面すれば、精神がもたない。

そのため新人の書士官には徹底的にハントマン相手には事務的に接

しろと刷り込まれるのだ。

ただ、それでもエランなどは多くのハントマンたちに対して愛を以て接している。

しかしそれは気丈夫なエランだからこそ可能なのであって、普通の公務員には到底真似できるものではないのだ。

「気になっていたのか？」

「そうじゃないよ。ここじゃケイトくらいしかマトモな話し相手がいなかったから。それに僕、年上好きだし」

「どうにも、気になってるようにしか思えないが」

「違うつて。僕は姉さん女房もらった方が云々は他ならぬケイトが言い出した事なんだから」

「……まあ、オオシシを撃退したんだ。深く心配せずとも、帰ってくるだろう」

クエストオフィスに勤める書士官は、精神病を患って退職する者が多い。

何も、暇すぎて精神が蝕まれるというわけではなく、依頼を斡旋する立場だからこそなのである。

「自分が引き留めておけば」などと自責の念にとらわれるうちに、次第にノイローゼ気味になっていくのだ。

そのため、月に一度必ず精神科医によるカウンセリングを受けることになっているほどだ。

「だと、いいね……」

いや、彼女は帰ってくる。

盾に鎧の完全武装なのだから、狼も歯が立たないだろう。きっと大丈夫だ。

ポーアは深呼吸をして落ち着きを取り戻す。

そして、カウンターに散らばっているレポートに手をかけ、一枚ずつ集めはじめた。

その時、時間のわりには珍しくクエストオフィスのドアが開いた。

「邪魔するぞ」

「こんにちは、ドリスさん。本日はどのようなご入用で？」

来客は珍しい人物だった。

白髪頭に英雄と呼ぶに相応しい風格。

まさしく、カザン共和国大統領のドリスだった。

しかし大統領と言えど、個人的な依頼はクエストオフィスを通さなければならぬため、その場合は顧客として一般とかわらなく接する必要があるのだ。「いいや、今回は視察だ。大統領として、な」

「そうですね。この時間はハントマンが来ることはありませんが、それでも良ければ。お飲み物などは？」

「コーヒーを貰おうか」

ドリスはそこにある椅子に腰掛け、今日の依頼をまとめた紙を眺める。

普通の視察ならば補佐官のメナスが務めるべき仕事だが、大統領自ら出向くということは、きっと何かあるはずだ。

エフィはその違和感を感じ取っていた。

「……時に、大統領」

「どうした？」

「視察であれば、普段はギルドオフィスへ向かわれると思っていましたが」

「ああ、今日はあまり人がいない方が都合がいいからな」

「そうですね」

あまり人に聞かれたくない話があるということか。  
しかしクエストオフィスでは、得られる情報はあまり多くないだろ  
う。

しばらくすると、淹れたての濃いコーヒーが「どうぞ」「とドリスの  
前に置かれた。

もちろん、ソーサーはない。

「ああ、すまん」

そのまま、一口。

どうにもこの男にカザンビール以外の飲み物は似合わないが、熱い  
ブラックコーヒーはわりと好きらしい。少し中身の減ったカップを  
テーブルに置き、続けた。

「ところで、最近骨のあるヤツはいるか？」

「と言うと、活躍に期待できるギルドですか？」

「ああ」

そう言ったことならばエランに直接聞くべきだが、あえてクエスト  
オフィスで聞くとのは、単純にスコアでの話なのだろうか。

「そうですね……。王者の剣と肉球アタッカーズは相変わらず、で  
す。安定しています」

「以前はその二つに加えてラッキーズが名を連ねていたな？」

「……ラッキーズはリーダーが遠征中に行方不明となってしまう、  
ここしばらく記録はありません」

「そうか……」

事故は付き物だ。

強豪ギルドにだってある。

「では、他にめぼしいギルドは？」

「最近頭角を表してきたものとしては、……むてきランチャンズです  
すね」

「なんだ、ふざけた名前だな。無敵とは」

「ひらがな表記です。間違えると鬼の形相で訂正を迫られるので注意してください」

「ああ、気を付ける」

「まだ活動開始から一ヶ月にも満たない新米ですが、討伐依頼を数多くこなしています。来月からはリーディング争いに加わるでしょう」

「ふむ……」

それに、ボーアがランチャンズを推す理由がもう一つ。

「……それと、彼らの内の一人が、私の信用できる知り合いです」

「待て、ボーア」

すかさずエフィが待ったをかける。

「お前の知り合いは基本的に信用ならん」

「大丈夫、足は洗ったって言ってたから」

「ハントマンになるにあたって足を洗う必要がある時点で信用ならん」

「それなら僕すら信用できないじゃん」

「ああ、信用ならん」

「ハハ、相変わらずだな、お前たちは」

二人をカザンの街で見出した時から変わらないやり取りに、ドリスは顔をほころばせる。

「ポーア、エフィ。ちょうどお前たちが揃っていて手間が省けた」  
「……私どもに、なにかご用でしょうか？」  
「なに、再び剣を取って戦ってもらわねばならないような事態になっ  
てしまう気がしてな」

なにやらずいぶん重たそうな話題を、不敵に笑ってドリスは言う。  
間違いなく、ロラツカの件だとポーアとエフィは確信した。

「大統領、こちらを」

ポーアは先ほどまとめた資料を手渡す。

「一から説明させるなど野暮なことはいらない。」

「……これは？」

「読めばわかります」

「ほう、なかなか」と呟きながら、ドリスはざっと目を通す。  
反応を見る限り、当たりらしい。

「……どこから仕入れたか、法に抵触するレベルの国家機密が盛り  
だくさんだな。誰が作ったんだ？」

「エフィ書士官が独断で製作しました。私は一切関係ありません」

「ポーア書士官に製作を指示されました。全ての元凶は彼です」

「落ち着け、俺は警察ではない。それにしても良くできています。説  
明の手間が省けたな。次の会議で使うことにするか」

「私が製作しました。ポーア書士官は一切関係ありません」

「私が製作を指示しました。使用する資料などを選定したのは私で  
す」

「どちらでもいい。……流石、元リーディングギルドは気付いてい

「ただな」

「ロラツカの件も存じ上げております」

「待て、ボーア。それは俺仕入れた情報だろう」

「僕は君から仕入れたんだから、今は対等な立場だよ」

「納得いかないな。原本から仕入れたのは俺だ」

「現地に行つて直接その目その肌で感じないと『原本』にはならないよ」

「キリがないからその辺にしておけ」

流石に大統領の前となると、互いに良いところを見せようと必死になつてしまう。

ほとんどが足を引っ張ることによつて相対的に自分を良く見せるパターンだが。

「……それで、大統領。今回の件について詳しくお話をして頂けませんか？」

気を取り直し、ボーアが脱線気味だった話をレールに戻す。

「そうだな……ロラツカ森林に新種の植物が出現したというのは、紛れもない真実だ」

「その植物について情報は無いのですか？」

「今はプレロマが調査中だ。既存の解毒剤ではどうにもならんらしい」

その程度の話なら、プレロマの研究を待てばすぐにも新薬が開発されるだろう。

それを踏まえて、ドリスは「だが」と付け足した。

「……本当の敵はその植物ではない。もっと強大で、凶悪な存在だ」

「野性動物の群、ですか？」

「いいや、違う。……エデン全体を巻き込んでしまつような、途方もなく巨大なものだ」

「……」

そんなもの、信じられるものか。

天変地異が起こるのならば、まだ多少はわかる気もするが。

しかし、あまりにも漠然としすぎていて、どうにも把握できない。

「……いまいち、理解できかねます」

「だろうな。今回ばかりは俺でさえそうだ」

「何を根拠に、『敵』など？」

「……勘だ。俺の勘が良くあたる事は、お前たちが身を以て証明しているだろう。根拠としては十分過ぎやしないか？」

「あなたの勘に見込まれた身としてはそう思いたいものですね……」

だが、この男が言うことに間違いはない。

もし、カラスは白いと彼が言えば、ひとりでにカラスが白いペンキの海に飛び込んで行くようなものだ。

自分たちが信頼されている以上、ボアとエフィもドリスを信頼するほか無い。

「詳しくは情報が出揃い次第大統領府で閣僚会議を執り行う予定だ」

「……私どもに参加資格はありませんが」

「特別顧問『行住坐臥』として召集するつもりだ。しっかり準備しておけ」

「了解しました」

「仰せのままに」

行住坐臥。

懐かしい響きに、二人は心を打たれた。  
まさかもう一度そう呼ばれる日が来るとは、思っても見なかった。  
ポーアは短剣を、エフィは刀を手に取り、何を恐れることもなく奔走していたあの頃。  
流石に二十代も半ばを過ぎれば昔のような無茶はできないが、それでもそんなところらの自称強豪ギルドなんかには負ける気がしない。  
またハントマンとして戦えるのだと考えると、ポーアは無性に心が弾んだ。

「……ところで、ついでに訊きたいことがある」

話題転換。

ドリスは冷めはじめたコーヒーで喉の乾きを潤し、続けた。

「ミロスの騎士学校を出たとかいう、女騎士がよくここに来ていると小耳に挟んだのだが……」

「……ケイト・フィルポットですね。ええ、よく来ていました。最近は忙しいようであり見ませんが」

まさか、『ミロス王立騎士学校逆首席卒業のダメダメ女騎士ケイト』が大統領にまで知られるほどに有名だったとは。

ポーアが想像していたよりもずっとケイトは大物だったのかも知れない。

「ああ、知っている。十歳ほどの少女のお守りをしているそうじゃないか。この目で確かめた」

「よくご存知で。しかし、あまりメナスさんに黙って出かけると、厄介な事になるのでは？」

「公務は終えてから街に出るのだが……。アイツの性格には困ったものだ」

などと笑って流すが、メナスの糞真面目さは生真面目なエフィでさえ引いてしまうほどだ。

だが、この大統領にはそれくらいの人物が適任かも知れない。

「……彼女がどうかありませんでしたか？」

「いや、ただ気になったただけだ。あの騎士がどうにも鍵になりそうな気がしてな」

「それも、勘ですか？」

「ああ、勘だ」

いや、流石にそれはあんたでも無理だろ。

と言いたい気持ちをぐっと堪えて、なんとか柔らかくポーアは反論する。

「お言葉ですが、彼女のハントマンとしての腕前は……」

「わかってる。だがアレでも『野獣殺し』の娘だろう？ただ者ではないと、俺の勘が叫んでいる」

「そうですね……」

確かに、ケイトの家系は生粋のハントマンだ。

それこそ全盛期のドリスのような大活躍はしなかったが、それでも同世代のカザンでは五本の指に入ると噂されるほどだったが、娘の教育のためと称して十数年前に引退したらしい。

その教育の結果が現在のケイトだとすれば、それはなんとも教育内容を疑いたくなるものだ。

さすがに妻子持ちとなると、あまり危険な仕事はしたくなかったと言っのが本音だろう。

「彼女なら、今狼を討伐しに行っています」

「そうか。所属ギルド名は？」

「バルキュリーです。……帰ってくる保証はできませんが」

「いいや、すぐに帰ってくるだろう。野良犬くらい一捻りにしてもらわねば、俺の勘もたまつたもんじゃないからなあ」

ドリスはそう笑って言うが、いくらよく当たる勘でも今回ばかりは信じられない。

と、思っていた矢先、クエストオフィスの戸を開く者がいた。

「はあ……ボーアさん帰ってきましたよー……」

なぜだかボーアが朝見た時よりずっとやつれている騎士が仲間を連れて現れた。

あまりにも絶妙なタイミングに、思わず絶句する。

「あれ、珍しいな、エフィさんもいる……こんにちは……」

「……噂をすればなんとやら」

「はい？」

「ちょうどケイトの話をしてたんだよ。僕とエフィと、もう一人ゲストで」

「ゲスト？」

ケイトは首を傾げながら、視線をずらす。

ようやくゲストを捉えると、数秒ほど考えた後、情報を処理しきれずに固まってしまった。

「……」

「ケイト、邪魔よ。立ち止まらないで」

「姐さん、どうしたんだい？」

仲間たちが心配して声をかけるが、反応はない。  
さすがに一国の大統領を前にしては、こうもなるか。

「……あら、ドリス閣下。ごきげんよう」

「やお嬢さん。今日はさしずめ、討伐依頼をこなしてきたというところかな？」

「ええ。どうしてお分かりになって？」

「ハントマンとしての勘だ。それに、お嬢さんたちから獣と血の臭いがする」

石化した騎士を尻目に、平然と会話をする年端もいかぬ少女。  
エフィなどは呆気にとられて言葉をなくしたままだ。

「うん？ボス、知り合いかい？」

「カザン共和国大統領、ドリス」アゴート閣下よ。以前あなたたちに伝えたはずね」

「……」

石化二人目。

「申し訳ございませんわ。少し緊張しているせいかこのような無礼な態度でございますが、皆、ハントマンとしての腕前は一流ですよ」

「ハハ、見ただけでわかる。いい面構えだ。その後ろで寝ているのも、お嬢さんの側近かな？」

「ええ。紹介致しますわ。ナムナとイクラクン。ケイトを私の盾とすれば、彼女らは剣と頭脳ですわね」

「ほう、なかなか頼りがいがありそうではないか」

なんてひどいお世辞だ！とポーアには突っ込みたい気持ちがあった

が、ここは堪えた。

とりあえず、今はケイトが帰ってきたことに喜ぶべきだろう。

「ボーア書士官。依頼番号8553番、完了したわ。これが依頼人のサインよ。ケイト、退きなさい」

「えあ、あ、あ」

ケイトとドアの間の狭い隙間を通過して、ボーアに依頼人からもらったクエスト完了のサインを手渡す。

相変わらず、この少女はなにか他の人間と根本的に違うものがある。それゆえ、ボーアはあくまで一般の利用者と同じ対応をせざるを得ない。

「では、確かに。報酬の方はいかがなさいますか？」

「口座振り込みでお願いするわ」

「畏まりました」

「ところで、ボーア書士官。ケイトの話とは一体？」

「彼女がまさかボディーガードになるとは思っても見なかった……との内容です」

「……そうね、でも満足しているわ」

営業スマイルとも取れる笑顔でモモメノは言う。

大の男と対等以上に渡り合う光景は、ボーア自身にも滑稽に見えた。

「すっかりお気に入りなのよ。お嬢さん」

「今日も彼女は盾として私を補佐してくれましたの。でしょう？ケイト」

「あ、あいんらっど」

「ほう……ところで、その彼女の盾が無いようだが」

「げどらぶ、げんがおぞ」

「しっかりなさい、ケイト」

「しゃっー、めつめどーぞ」  
「……少し取り乱しているようですので、私が説明致しますわね」  
「ぞろあつと」

緊張のあまりギロチン国家の機動兵器の名前を唱えるケイトを尻目にきつとどこか盛られているであろう武勇伝を語るモモメノ。  
もはやコントの域である。

「……と、彼女は囿として、クエストの攻略に尽力してくれました」  
「流石は騎士だな。守ることにかけては一級品だ」

「まだだ、まだだぜ、ざんすかーる」

「ええ。彼女の腕について悪い噂は多々ございますが、私にはそうは思えませんの。やはり、噂と言うものはなにかと誇張されてしまふのだと、若輩ながら痛感いたしました」

「きさまはでんしれんじにいれられただいなまいとだ、めがりゆうしのへいさくうかんのなかでぶんかいされるがいい」

「そうか。評判など気にせず、これから実力で示していけばいいだろう」

「ええ。当面の目標は、ギルドハウスを建てられるだけの実力を身に付けることすわね」

「ハハ、随分強気ではないか」

「自信がありますもの。彼女が補佐をしてくれるのならば、きっとできるよ」

ああ、なるほど。

全てはこの少女が動かしているのか。  
妙に悟ったようにポーアは感じた。  
なるほど、大統領も目をつけるわけだ。

「それでは、ここらでお暇致しますわ。これからこの子の盾を新し

く買いに行かなければなりませんから」

「ああ。より一層の活躍を願う」

「ありがとうございます。ケイト、行くわよ」

「すたんだっとうざびくとりー」

未だに固まっているケイトの袖を引っ張り、「ごきげんよう」と一言残して一行は去っていった。

エフィは頭でも痛むのか、抱えるようにしている。

「ね？言ったでしょ？」

「……ああ、確かに天才だった」

「あの少女、ただ者ではありませんよね、大統領」

「あの歳で随分大人びている。年上のハントマンを三人も引き連れているのだから、腕も間違いないな」

「……彼女たちも、戦いに？」

「ああ、あくまで勘だがな」

「あくまで勘」と言ったが、きっとこれは現実となるのだろう。ポーアには、そんなドリスの予言が妙に現実的に思えてきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1893q/>

---

セブンス女郎Dチーム

2011年10月8日15時21分発行